

靈界物語 第三五卷 海洋萬里 戌の卷

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第三五卷』愛善世界社

2000(平成12)年08月11日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～

## 目次

序文 じよぶん

總説歌 そうせつか

第一篇 むかふやまあらし  
向日山嵐

第一章 こと  
言の架橋 かけはし（九六五）

第二章 しゅっじん  
出陣 しゅっじん（九六六）

第三章 進隊詩しんたいし（九六七）

第四章 村の入口むら いりぐち（九六八）

第五章 案外あんぐわい（九六九）

第六章 歌の徳うた とく（九七〇）

第七章 亂舞らんぶ（九七一）

第八章 心の綱こころ つな（九七二）

第九章 分擔ぶんたん（九七三）

第二篇 ナイルの水源すゐげん

第一〇章 夢の誠ゆめ いましめ（九七四）

第十一章 野宿のじゆく（九七五）

第十二章 自稱神司じしよつかむづかさ（九七六）

第十三章 山嵐やまあらし（九七七）

第一四章	空氣焰 <small>からきえん</small> 〔一九七八〕
第一五章	救 <small>すくひ</small> の玉 <small>たま</small> 〔一九七九〕
第一六章	浮島 <small>うきしま</small> の花 <small>はな</small> 〔一九八〇〕

第三篇 火ひの國都くにみやこ

第一七章	霧 <small>きり</small> の海 <small>うみ</small> 〔一九八一〕
第一八章	山下 <small>やまくだ</small> り〔一九八二〕
第一九章	狐 <small>きつね</small> の出産 <small>しゅつさん</small> 〔一九八三〕
第二〇章	疑心 <small>ぎしん</small> 暗狐 <small>あんこ</small> 〔一九八四〕
第二一章	暗鬪 <small>あんとう</small> 〔一九八五〕
第二二章	當違 <small>あてちがひ</small> 〔一九八六〕
第二三章	清交 <small>せいこう</small> 〔一九八七〕
第二四章	歡喜 <small>くわんぎ</small> の淚 <small>なみだ</small> 〔一九八八〕

序文 じよぶん

本卷には、三五教の宣傳使黒姫が山河を跋渉し、屋方村の男達大蛇の三公の乾兒の徳公と、虎公實は虎若彦の部下の久公を引連れ、火の國の境に屹立せる荒井峠を越え、火の國の都へ立向ふ途中に於て白狐の出産を介抱し乍ら、火の都へ漸くにして到着し、爰に迷夢も醒め、實の吾兒を發見し歡び勇んで自轉倒島へ立歸り、錦の宮に奉仕し、夫婦仲よく神業に奉仕すると云ふ筋書を口述したものであります。

又ナイル河の水源スツポンの湖に虎若彦、三公、孫公別、お愛の一行が魔神の征服に向ひ、危急の場合に際し、玉治別の宣傳使が暗の中より應援の言靈を放ち、首尾よく目的を達したる面白き物語であります。

大正十一年九月十五日より十七日迄三日間の口述に成れるものにして、筆録者は例の松村、加藤、北村の三氏に依つて編纂せられました。

大正十一年九月十七日午後六時五分

總説歌

天地の神の御水火より

現はれ出でし人草は

至粹至醇の神の御子

如何でか曲のあるべきぞ

名位壽富の正欲に

心を碎く處より

執着心てふ魔が憑り

種々雑多と焦慮りつつ

體主靈從に落つれども

一朝神の光得て

省みすれば元の神

神に代りて天地の

大經綸に奉仕する

嚴の力の太柱

萬の物の靈長ぞ

三五教の黒姫も

一度は夫に魂抜かれ

海山越えてはるばると

迷ひに迷ひ居たりしが

心に悔悟の花開き

本つ御魂に復りてゆ

神の恵の幸ひて

戀こひしき吾わが兒こに邂逅かいこうなし 歡よろこび勇いさみ捨すてた兒この

玉たまはる治わけ別もろと諸とも共もに 自おの轉ころ倒じま島たちへ立かへ歸り

夫をつとの君きみに廻めぐり合あひ 麻ま邇にの寶ほう珠しゆの神しん業げふに

仕つかへて名なをば萬よろづ世よに 輝かがやかしたる物ものが語たり

聞きくも目め出で度たき次しだい第だいなり あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら

御み魂たま幸さちひましませよ。

大正十一年九月十七日午後六時十五分



第一篇 向日山嵐  
むかふやまあらし

第一章 言の架橋（九六五）  
こと かけはし

廣大無邊の大宇宙 數ある中に靈力の

秀れて尊き我宇宙 上には日月永久に

水火の光を放ちつつ 下界の地球を照臨し

森羅万象悉く 無限絶對無始無終の

靈力體の三元を 備へてめぐる神の業

太陽大地太陰の 無限の生命は御倉板擧

神の御言の恵なり 抑も大地の根源は

國常立大御神 豊國主大神の

經と緯との水火をもて

生成化育の神業を

開き玉ひしものなるぞ

無限絶對無始無終

至尊至貴なる大元靈

天にまします御中主

皇大神の靈徳は

すべての物に遍満し

高皇産靈の神をして

靈系祖神となし玉ひ

神皇産靈の神をして

體系祖神となし玉ふ

あゝ惟神々々

靈力體の三元は

幾億萬の年を経て

いよいよ宇宙を完成し

我等が宇宙の主宰神

天にありては大日婁賣

天照します大神と

稱へまつるぞ尊けれ

國常立大神は

地上の主宰と現れまして

金勝要大御神

神素盞鳴大神と

大地の靈力體となり

地上に於ける萬類を

晝と夜との區別なく

恵の露をうるほはし

守らせ玉ふ葦原の

神の御國ぞ尊けれ

かかる尊き皇神の

力に造り守ります

大海原の神國に

生を享けたる人草は

廣大無邊の御神徳

朝な夕なに謹みて

仰ぎまつらであるべきや

神は我等の靈の祖

體の祖と現れませば

我等が五尺の肉體も

皆大神の借り物ぞ

皇大神の永久に

守り玉ひて天地の

大經綸を遂げ玉ふ

神の機關と生れたる

尊き清きものならば

至粹至純の精魂に

朝な夕なに磨き上げ

人と生れし天職を

盡しまつれよ同胞よ

あゝ惟神々々

今より三十五萬年

遠き神代に溯り

國治立大神が

天が下なる神人の

身魂を治めて美はしき

神代かみよを造りつく固めかたむと 根底ねそこの國くにに忍しのびまし

いろいろざつた雑多ざつたと身みを變へんじ 百ももの神かみ達たち現あらはして

三五あななひけつ教を立たて玉たまひ 教をしへを四よ方に傳つたへます

尊たふとき清きよき三五あななひの 神かみの館やかたをエルサレム

自轉おのころじま倒島の貴うづの宮みや 西にしと東ひがしに靈たまくばり

神かみの心こころの其儘そのままを 四よ方に傳つたふる宣傳使せんでんし

任まけさせ玉たまふ有難ありがたさ 神かみの司つかさも數かず多おほく

坐まします中なかに三五あななひの 道みちに仕つかふる宣傳使せんでんし

信心しんじん堅固けんこの黒姫くろひめが 神かみの御言みことを畏かしこみて

四よ方ひとくさの人すく草救くさすくはむと 老おいたる身みをも顧かへりみず

島しまの八十やそし島ま八十やその國くに 筑紫つくしの島しまの果はてまでも

教をしへを傳つたへて進すすみ行ゆく 勇健ゆうけん無む比ひの神人しんじんの

不ふ惜じやく身命しんめいの物語ものがたり 心こころを筑紫つくしの不知火しらぬひの

世よ人びとを救すくひ助たすけむと 高たか山やま彦ひこのあと後おを追おひ

自轉倒島を立出でて

孫公、芳公、房公の

三人の信徒と諸共に

波に漂ふアフリカの

建日の港に安着し

嶮しき坂を踏み越えて

火の國都に立向ひ

高山彦の所在をば

索めて來る黒姫が

執着心のどこやらに

まだ晴れやらず氣を焦ち

いろいろ雑多と村肝の

心を盡す物語

今日は九月の十五日

三五の巻の開け口

瑞祥閣の奥の間で

安樂椅子によりかかり

片手に團扇を持ち乍ら

膝を叩いて諄々と

繰出す神代の物語

筆執る人は松村氏

眞澄の空に天津日の

晃々輝く午前九時

誌し行くこそ楽しけれ

あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして

神のまにまに説き出づる

わが言の葉を永久に

世人よびとに傳つたへて惟かむながら神かみ

神かみの賜たまひし生いく身み魂たま

照てらさせ玉たまへ天津あまつかみ神かみ

國くに津つかみ神たち達やほ八よ百ぼ萬ばん

産うぶ土す神ながみの御おん前まへに

慎つしみ敬あやまひ願ねぎまつる

謹つしみ畏かしこみ願ねぎまつる。

現げん在ざいの地ち理り學がく上じやうのアフリカの大たい陸りくは、太たい古この神かみ代よに於おいては、筑つく紫しの島しまと云いつた。さうして此この島しまは身み一ひとつにして面おも四よつあり。火ひの國くに、豊とよの國くに、筑つく紫しの國くに、熊くま襲その國くにと大山だい山さん脈みやくを以もつて區くく劃わくされてゐる。さうして島しまの過くわ半はんは大だい沙さ漠ばくを以もつて形かた作ちつくられてゐる。

現げん代だいの日本にほん國こくの西せい海かい道だう九きう州しうも亦また總そう稱しやうして筑つく紫しの島しまと云いふ。國こく祖そ國こくに常とこ立たち之のみ尊ことが大だい地ちを修しう理り固こ成せいし玉たまひし時ときアフリカ國こくの胞え衣なとして造つくり玉たまひし浮うき島しまである。又また琉りう球きうを龍りう宮ぐうといふのも、オーストラリアの龍りう宮ぐう島しまの胞え衣なとして造つくられた。されど大おほ神かみは少すこしく思おもふ所ところましまして、これあしを葦あし舟ふねに流ながし捨すて玉たまひ、新あらたに一いっ身しん四し面めんの現げん在ざい日本にほん國こくなる四し國こくの島しまを胞え衣なとして作つくらせ玉たまうた。故ゆゑに四し國こくは神しん界かいにては龍りう宮ぐうの一ひと

島とも稱へられてゐるのである。丹後の沖に浮べる冠島も亦龍宮島と、神界にては稱へられるのである。

昔の聖地エルサレムの附近、現代の地中海が、大洪水以前にはモウ少しく東方に展開してゐた。さうしてシオン山といふ靈山を以て地中海を兩分し、東を龍宮海といつたのである。今日の地理學上の地名より見れば、餘程位置が變つてゐる。神代に於けるエルサレムは小亞細亞の土耳其の東方にあり、アーメニヤと南北相對してゐた。

又ヨルダン河はメソポタミヤの西南を流れ、今日の地理學上からはユウフラテス河と云ふのがそれであつた。新約聖書に表はれたるヨルダン河とは別物である。さうしてヨルダン河の注ぐ死海も亦別物たることは云ふ迄もない。今日の地理學上の波斯灣が古代の死海であつた。併し乍ら世界の大洪水、大震災に依つて、海が山となり、山が海となり、或は湖水の一部が決潰して入江となつた所も澤山あるから、神代の物語は今日の地圖より見れば、多少變つた點があるのは止むを得ぬのである。

さて三五教の宣傳使黒姫が現代のアフリカ、筑紫の島の一部、熊襲の國の建日の港へ上陸し、それより建日別命の舊蹟地を探ね、筑紫ヶ嶽を三人の供人と共に踏越えて、火の國の都を指して進み行く物語は、前巻に於て大略述べておいた通りである。いよいよこれより黒姫が火の國都に立向ひ、高山彦の宣傳使と名乗る高國別命、神名は活津彦根命を自分の夫高山彦と思ひ詰め、夫の所在を探らむと進み行く波瀾重疊としたる面白き昔語である。さうして自分の若き時に或事情の爲に捨兒をした男の子が、成人して立派な宣傳使となり、同じ道に仕へて居るのを母子共に氣付かなかつたのが、或機會に親子の間柄たる事が知れ渡り、喜び勇んで自轉倒島の聖地へ歸り、麻邇の寶珠の神業に奉仕する芽出度き事實を口述するのが本巻の主眼である。第三十三巻を参照すれば、此間の消息が分るであらう。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・九・一五 舊七・二四 松村眞澄録)



第二章 出陣（九六六）

あななひけう 三五教の宣傳使 黒姫司はしとしとと

たけひ 建日の館を立ち出でて 岩石起伏の急坂を

ひ 火の國街道さして行く 神の經綸か偶然か

し 知らず識らずに踏み迷ひ 左へ行くべき谷道を

いつの間にかは右に取り 向日峠の山麓に

いと淋し氣にさしかかる 深谷川の丸木橋

なかばく 半朽ちたる其上を 薄氷を踏む心地して

かみ 神の恵に助けられ 向ふへ渡りすたすたと

しやうじゆ 樟樹の空を封じたる 細谷道を辿る折

おもやつ 面竄れたるいたいの 娘のお梅に出會し

じしやう 事情を聞けば武野村 義侠をもつて聞えたる

白波男の虎公が

妹と聞いて立ち留まり

お梅を勞り何故に

汝は少女の身をもつて

此山道を辿るやと

聞くよりお梅は涙ぐみ

私の義姉のお愛さま

大蛇の三公と云ふ奴が

兄の命の不在宅に

數多の乾兒を引つれて

現はれ來り義姉上を

高手や小手に縛めて

向日峠の山麓の

樟の木蔭に連れ來り

義姉妹二人は三公の

手下の奴にさいなまれ

遂には義姉の息絶えて

土中に深く埋められ

二人の男と諸共に

あへない最後を遂げしぞと

聞くより黒姫仰天し

お梅を背に負ひながら

樟の根下に駆けよつて

力限りに墓の石

取りのぞかむと思へども

女の非力如何とも

救はむよしも泣く許り

途方に暮るる折もあれ

三尺ばかりの小童兒

八柱此處に現はれて

さしもに重き岩石を

毬の如くにひつ掴み

彼方此方に投げ散らし

其儘姿をかくしける

黒姫【ハツ】と驚いて

八人の童兒に打ち向ひ

感謝する間も泣く計り

童兒の姿は白雲と

なつて其場に消えにける

黒姫汗を流しつつ

力限りに土を掘り

三人の男女を抱上げて

芝生の上に横臥させ

固く縛りしいましための

繩解き放ち一二三と

天の數歌のりつれば

お愛は息を吹きかへし

感謝の涙に暮れにける

黒姫お愛に目も呉れず

二人の男を熟視して

高山彦には非ずやと

眺むる折しも孫公の

姿に驚き胸を撫で

ほんにお前は孫公か

嬉しい事だと云ひながら

お梅が谷におり立ちて

掬ひ來れる水筒の

水を含ませ勞りつ

兼公迄をも救ひ上げ

此處に五人は皇神の

尊き恵を感謝して

此場を後に谷道の

草踏みわけてかへり來る

時しもあれや虎公は

新、久、八の三人を

伴ひ此處に來かかつて

互の無事を祝しつつ

屋方の村の三公が

家路をさして進み行く

あゝ惟神々々

御靈幸倍まませよ。

お愛は途々謠ひ初めた。

其歌。

熊襲の國にかくれなき

大曲津見と聞えたる

八岐大蛇の分靈

憑りて醜のわざをなす

大蛇の三公が夕間暮

數多の乾兒を引きつれて

夫の命の不在宅へ どやどや進み入り来り

妾が隙を窺ひつ 首に細繩引きかけて

グイと後へ引き倒し 有無を云はせず三公が

乾兒の奴等は蟻のごと 群がり来つて吾身をば

縦横無盡に引き縛り 口には箝ます猿轡

妾は無念の息を詰め 涙かくして傍を

ふと眺むればこは如何に 妹のお梅も猿轡

口に箝められ慄ひ居る ハツと驚き顔と顔

見合すばかり音なしの 口さへ利けぬ苦しさに

三五教の大神の 尊き救ひを祈りつつ

大蛇の三公がなすままに 身を任せたる腑甲斐なさ

大蛇の三公初めとし 兼公與三公兩人の

兄弟分の兩腕は 妾二人をひつかたげ

西へ西へと向日山 峠の麓の森林に

擔かつぎ來きたりて三さん公こうが

夫をつとある身みの妾わらはら等に

非ひ道だう極きはまる横よ戀これん慕ぼ

嚇おどしつ賺すかしつ詰つめかくる

其その言ことの葉はの嫌いやらしく

汚けがらはしさに腹はらを立たて

命いのちかまはぬ捨すて臺ぜりふ詞ふ

手て痛いたき言こと靈たまう打たち出だせば

兼かね公こう與よ三さん公こう兩りやう人にんは

交かはる交がるに傍そばにより

煩うるせき事ことを云いひかける

ア、惟かむながらかむながら神かみ々々

神かみに任まかせし此この體からだ

夫をつとある身みの如いか何かにして

力ちからに怖おそれて三さん公こうが

いかに望のぞみを許ゆるさむや

口くちを極きはめて罵のしれば

三さん公こう忽たちまち腹はらを立たて

妾わらはが前まへに詰つめ寄よつて

黒くろい顔かほにて覗のぞき込こむ

嫌いやな臭におひのする男をとこ

逆むかづくやうに思おもはれて

胸むねも塞ふさがるばかりなり

大をろち蛇こぶんの乾こぶん兒はむらむらと

妾わらはに向むかつて攻せめて來くる

此この時とき兼かね公こうの返かへり忠ちう

太ふとい度どき胸ようのお愛あいどの

こんな姐あね貴きを親おやかた方に

持もつた乾こぶん兒さいは幸さいだ  
面おも白しろからうと云いひ乍なが

秋しゅう波はを送おくる可を笑かしさよ  
大を蛇ろちは胸むねに据すゑ兼かねて

與よ三さん公こうに向むかつて縛しばれよと  
【めくばせ】すれば兼かね公こうの

不ふ意いを狙ねらつて綱つなをかけ  
首くび引ひき締しめて走はしり出だす

遠さの兼かね公こうも弱よわり果はて  
高た手かてや小こ手てに縛しばられて

泣なき聲こゑ上あぐるをかしさよ  
大おほ空ぞらつた日ひの影かげは

地ち平へい線せん下かにかくれまし  
夕ゆ暮ふ告つぐる鳥とりの聲こゑ

時じ々じ刻く々くと寂せき寥れうの  
氣き分ぶん漂ただふ折をりからに

間ま近ぢかく聞きゆる宣せん傳でん歌か  
三あ五な教ひけうの孫まご公こうが

忽たちち此こ處こに現あらはれて  
吾われは尊たふとき宣せん傳でん使し

火ひの國くに都みやこに名なも高たかき  
高たか山やま彦ひこと空から威ゐ張ばり

一いち同どうの者ものの荒あら肝ぎもを  
挫ひしぎやらむと思おもひつつ

早さ速そくの頓とん智ちも水みづの泡あわ  
二ふたつつの眼まなこに目め潰つぶしの

砂すななげ込こまれ憐あはれにも  
孫まご公こうは其そ處こに踞しゃがみける

時ときを移うつさず與よ三公さんこうは 孫公まごこうの首くびに綱つなをかけ

肩かたにひつかけ二三にさんげん間ま 力ちから限かぎりに引ひきずれば

何なん條じょうもつて耐たるべき 信しん仰かう強つよき孫公まごこうも

瞬またたく間うちに身しん體たいを 雁がん字じ搦がらみに縛しばられて

苦くるしみもだゆる憐あはれさよ 大を蛇ろちの三さん公こうは冷ひややかに

三み人たりを眺ながめて嘲あざ笑わらひ 乾こ兒ぶんの奴やつに下げ知ちなして

忽たちまち大だい地ちに穴あなを掘ほり 男だん女ぢよ三み人たりを荒あ縄らなに

縛しばりたるまま放ほうり込こんで 見みるも無む殘ざんな生い埋まいめの

惡あく逆ぎやく無ぶ道だうを敢あへてなし 土つちをかぶせて墓はかとなし

重おもき石いしをば運はこび來きて 吾われ等らが上うへに積つみ重かさね

凱がい歌かを揚あげて歸かへり行ゆく あゝ惟かむ神な々ながら々ながら

神かみの守まもりの深ふかくして 妹いものお梅うめは恙つつがなく

九きう死し一いつ生しやうの難なん關くわんを 苦くもなく越こえて木こ下した暗やみ

姿すがたをかかくす賢かしこさよ 妾わら三は人みは荒あ鐵がねの



冷たき土に埋められ 身動きならぬ苦しさに

前途を案じ煩ひて 天地を祈り吾夫の

御無事を祈る折柄に 黒姫司が現はれて

妹お梅と諸共に 力を合せて三人を

苦もなく救ひたまひたる 其御恵の有難さ

感謝の涙泣く泣くも 黒姫司に従ひて

妹のお梅に手を曳かれ 草生ひ茂る木下道

歸り來れる折もあれ 吾背の君の虎さまが

玉公さまを初めとし 新、久、八の乾兒連れ

來りたまひし嬉しさよ あゝ惟神々々

神の恵の幸はひて 此處に一行九人連れ

屋方の村に立ち向ひ 大蛇の三公訪れて

三五教の神の教 善惡正邪の大道を

誠めさとし村肝の かが心に潜むなる

曲まがの御魂みたまを言こと向むけて 神かみの大道おほぢに盡つくすべき

清きよきみたまとなさしめむ 朝あさひ日は照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも 假たとへ令だい大地いちは沈しづむとも

誠まことの力ちからは世よを救すくふ 誠まこと一つの言こと霊たまの

劍つるぎに刃はむか向むかふ敵てきはなし 黒くろ姫ひめ司つかさに從したがひて

夫つまの命みことと諸もろ共ともに 言こと霊たま戦せんを開ひらくべく

岩がん石せき起き伏ふくの谷たに道みちを 進すすみ行ゆくこそ樂たのしけれ

あゝ惟かむ神な々ながら々かむ 御み霊たま幸さち倍はましませよ  
御み霊たま幸さち倍はましませよ

と謠うたひ乍ながら一行いっかうの先さきに立たち、猿さる田だ彦ひこ氣き取とりになつて進すすみ行ゆくお愛あいの姿すがたの雄を々をしさ。  
黒くろ姫ひめを初はじめ虎とら公こう、孫まご公こう、お梅うめは何なんとなく心こころ勇いさみて進すすみ行ゆく。

(大正一一・九・一五 舊七・二四 加藤明子録)

第三章 進隊詩（九六七）

虎公は谷道を辿り乍ら足拍子をととり、チヨコチヨコ走りのまま謠ひ出したり。

「ウントコドツコイ」夜が明けた 向日の森が晴れて来た

虎狼や獅子熊の 猛びの聲も鎮まりて

彼方此方に鳥が啼く 東の空は茜さし

豊坂昇る日の神は 山道辿る吾々の

一行の身をば照します 「ウントコドツコイ」足許に

何れも氣をつけなされませ 黒姫さまは老年だ

別してお足が重からう 高い石奴がゴロゴロと

此坂道に轉げてる ウツカリして居りや石車

ガラガラガラリと乗り迂り 思はぬ怪我がをせにやならぬ

神を力に三五の 誠の道を杖として

波布や蜈蚣の毒蟲が

右往左往に這ひまはる

草道分けて進み行く

あゝ惟神々々

尊き神の御守りに

吾等一行九人連れ

恙もなしに屋方村

大蛇の三公が構へたる

館に無事に着かしめよ

吾家の留守に三公が

數多の乾兒を引率れて

押寄せ來り女房や

妹のお梅を虐げて

深山の奥の森林に

連れ行き無體の掛合を

やつて居るとは知らずして

「ウントコドツコイ

ドツコイシヨ」

建日の館にいでませし

黒姫さまの後追うて

嶮しき坂道攀ぢ登り

建國別の神様が

祝の席に招ぜられ

生命の水の甘酒を

「ドツコイ」飽くまで振舞はれ

酔がまはつてユラユラと

新、久、八を引きつれて

坂道下り火の國の

深谷街道に來て見れば

大蛇をろちの乾兒こぶんの六公ろくこうが 數多あまたの乾兒こぶんを引きつれて

棍棒こんぼうや刀かたなを携たづさへつ 擦鉢卷ねぢはちまきをリンと締しめ

裾すそをからげて「ドッコイシヨ」 仰々げげしくも待まつてゐる

流石さすがの虎公とらこうも面喰めんくらひ 心こころに神かみを祈いのりつつ

惡胴わるどう据すゑて呶鳴どなり聲こゑ あり合あふ木片きぎれを拾ひろひあげ

群むらがる敵てきの中心ちゅうしんを 目蒐めがけて「ドッコイ」突つき入いれば

「ヤツトコドツコイ」危あぶないぞ 初はじめの勢いきほひ何處どこへやら

猫ねこに追おはれた「ドッコイシヨ」 鼠ねずみの如ごとく「ウントコシヨ」

縮ちぢみ上あがつて六公ろくこうが 一いち目散もくさんに逃にげ出だせば

手て下したの奴やつは「ヤツトコシヨ」 度どを失うしなうて散さん亂らんし

「ウントコドツコイ」蜘蛛くもの子こを 散ちらすが如ごとく逃にげ失うせぬ

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々 神かみの惠めぐみの深ふかくして

危あやふき處ところを助たすけられ 後あと振ふり返かへり玉公たまこうや

新しん、久きつ、八はちの名なを呼よべば 木蔭こかげに潛ひそみし四人よにん連づれ

蜘蛛の巣だらけの顔をして 足もワナワナ怖さうに

現はれ来るぞ可笑しけれ 何は兔もあれ一時も

早く吾家へ立ち歸り お愛の安否を探らむと

韋駄天走りに驅け出せば 勢餘つて「ウントコシヨ」

向日峠の山道に 思はず知らず突進し

引返さむかと思へども あゝ待て暫し三五の

神の教にや退却の 「ウントコドツコイ」 二字無しと

教へられたる言の葉を 思ひ浮べて進行し

見るも危き丸木橋 飛鳥の如く飛び越えて

坂道登る折柄に 思ひも掛けぬ黒姫が

お愛やお梅を勞りて 孫公、兼公諸共に

此場に來る不思議さよ あゝ虎さまか黒姫か

お愛かお梅か孫さまか 大蛇の乾兒の兼公か

虎公の身内の新公か さては久公か八公か

不思議な處で會うたもの  
これも矢張神様の

水も洩らさぬ御仕組  
こんな目出度い事はない

云ひつつ一同道の邊に  
両手を合せて天地の

神の御名をば稱へつつ  
感謝祈願の太祝詞

唱ふる聲は中天に  
清く響きて夜が明けた

あゝ惟神々々  
神の御蔭を被りて

三人男女が黒姫に  
危き處を助けられ

無事に歸つた嬉しさに  
虎公さまも雀躍し

尊き清き三五の  
神の光を伏し拜む

時しもあれや樹々の空  
吾物顔に諸鳥の

常世の春を歌ふ聲  
直日々と聞え來る

吾等は神に救はれて  
此神徳を取りもぎに

してはならぬと「ドッコイシヨ」  
心を定めて「ウントコシヨ」

大蛇の館に立ち向ひ  
尊き神の御光を

三公さんこうの頭かしらに照てらさむと

一行いっかう九人くにん潔きよく

露道つゆみち分わけて進すすみ行ゆく

神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと悪あくとを立たて別わかける

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

只何事ただなにごとも人ひとの世よは

直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし

世よの過あやまちは宣のり直なほす

三五教あななひけつの神かみの道みち

歩あゆむ吾等われらは逸早いちはやく

「ウントコドツコイ

ドツコイシヨ」

大蛇をろちの靈みたまと聞きこえたる

三公さんこう初はじめ與よさ三公こうや

其他そのたの人ひと々びと悉ことごとく

誠まことの道みちを説とき聞きかし

高天原たかあまはらの神國かみくにの

「ウントコドツコイ」

住人ぢゆうにんと 救すくうてやらねばなるまいと

生うまれついでをとこたての俠客こころ

心こころの駒こまの勇いさむまに

鞭むちうち進すすむ膝栗毛ひざくりげ

進すすむ吾われこそ勇いさましき

あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸さちはひましませよ」



と 謠うたひ 乍ながら 進すすみ 行ゆく。  
黒くろ姫ひめは 道みち々みち 謠うたひ 出だす、  
その 歌うた。

綾あやの 聖せい地ちを 後あとに して

老おいの 年とし波なみ押おし 寄よする

大おほ海うな原ばらを 打うち 渡わたり

波なみ太たい平へいの 洋うみを 越こえ

大だい小せう無む數すうの 島しま蔭かげを

右みぎや 左ひだりと 潛くぐり っ つ

孫まご、 房ふさ、 芳よしの 三さん人にんに

棚たななし 船ぶねを 操あやつらせ

漸やうやく 筑つく紫しの 神かみの 島しま

熊くま襲その 國くにに 名なも 高たかき

建たけ日ひの 港みなとに 安あん着ちやくし

高たか山やま峠たうげを 踏ふみ 越こえて

岩がん石せき起き伏ふくの 坂さか道みちを

足あしを 痛いため て 進すすみ 來くる

時ときし も あ れ や 虎とら公こうが

建たけ日ひの 宮みやの 神かむつ司かさ

建たけ國くに別わけは 捨すて兒ごぞ と

宣のる 言こと靈たまに 耳みみす ま せ

高たか山やま彦ひこの ハズ バンド

探たづぬ る 途とち中ちゆうを 廻まはり 道みち

建たけ日ひの 館やかたに 行いて 見みれば

頼たのみ の 綱つなも 斷きれ 果はて て

何と詮術なくばかり  
館の夫婦に慇懃に

おもてもんまでみおく  
表門迄見送られ  
取つて返した坂の道

火の國街道の山口で  
數限りなき手長猿

猿の奴に擲掬はれ  
早速の神智を絞り出し

漸く猿をば追ひ散らし  
火の國都へ急がむと

進む折しも惟神  
神の仕組に操られ

迷ひ込んだる丸木橋  
神の化身に導かれ

向日峠の山麓に  
來る折しも乙女子が

足もヒヨロヒヨロ進み來る  
俄に憐れを催して

背撫で擦り勞りつ  
様子如何にと尋ぬれば

お愛の方の御遭難  
高山彦も諸共に

土中に深く埋められ  
果てさせ給ふと聞くよりも

心は忽ち顛倒し  
胸に早鐘鳴り渡り

矢さへ楯さへ堪らなく  
心いらちて乙女子を

背せなに負おひつつ樟樹くすのきの森もりに漸やうやく辿たどり着つき

三人みたりの男女なんによを救すくひ上げ此處ここ迄まで進すすみ來きたりたる

黒姫くろひめ司つかさの嬉うれしさよ天あめヶ下がしたなる人草ひとぐさは

互たがひに睦むつび親したしみて助たすけ導みちびき神かみの爲ため

御國みくにの爲ために眞心まごころを盡つくさにやならぬ神かみの宮みや

お愛あいの方かたや虎とらさまの二人ふたりの無事ぶじな顔かほを見みて

心こころも勇いさみ身みも勇いさみ大蛇をろちの靈みたまの三公さんこうを

神かみの教をしへの言靈ことたまに言向ことむけ和やはす此首途このかど

實げにも尊たふとき限かぎりなりあゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸さちはひましまして吾等われら一行いっかう九人くにんづ連れ

協心けふしん盡力じんりよく相結あひむすび枉まがの砦とりでに進擊しんげきし

仁慈じんじ無限むげんの大神おほかみの尊たふとき御稜威みいづを現あらはさむ

あゝ惟神かむながらかむながら々々御靈みたま幸さちはひましましてよ

と謠うたひ乍ながら心こころイソイソとして進すすみ行く。

(大正一一・九・一五 舊七・二四 北村隆光録)

#### 第四章 村むらの入口いりぐち〔九六八〕

向日むかふたうげ峠さんろくの山麓さに差さしかかつたる孫公まごこうは騒さわがしき人聲ひとこゑを聞ききつけ、宣傳歌せんでんかを歌うたひ乍ながらツカツカと立寄たちより、夕ゆふまぐれに三公さんこうの手て下した共に謀はかられて手て足あしを縛しばられ、土中どちうに埋没まいぼつされ九死きつし一生いつしやうの所ところを黒姫くろひめに救すくはれて、今いまや虎公とらこう一行いっかうと共に火ひの國都くにみやこへ至いたる途中とちうを繰くりあはせ、屋方村やかたむらの三公さんこうを言向和ことむけやはさむと進すすみ行く途々みちみち、足拍子あしびやうしを取とり乍ながら歌うたをうたつて嶮けはしき坂道さかみちを下くだり行く。

黒姫司くろひめつかさに伴ともなはれ 自轉倒島おのころじまを後あとにして  
筑紫つくしの島しまに來きて見みれば 思おもひもよらぬ廣ひろい國くに

やまかはきよ  
山河清く野は青く  
バナナ無花果其外の

あぢ  
味よき木の實は遠近の  
木々の梢に實りある

あゝ天國か極樂か  
但は神の公園か

げ  
實にも樂しき御國なり  
筑紫ヶ嶽の中腹で

こし  
腰をぬかした其時に  
黒姫司は冷笑し

ふさこう  
房公、芳公促して  
私を見すてて登り行く

おも  
ホんに思へば腹が立つ  
情を知らぬ鬼婆と

いま  
今の今迄胸に持ち  
黒姫司を「ドツコイシヨ」

こころ  
心の中で「ウントコシヨ」  
皆さま氣をつけなさいませ

むかで  
蜈蚣の大きな奴が出た  
足を刺されちや堪らない

こころ  
心に恨んで居りました  
黒姫司の一行は

いづ  
何れへ逃げて行つたやら  
行方も知らぬ一人旅

とり  
鳥や獸のなき聲を  
心の友と頼みつつ

いは  
岩が根木の根ふみさくみ  
重たい足を引ずつて

火の國都を目當とし

進んで来る折もあれ

道ふみ迷ひし向日山

峠の麓の森林に

いと騒がしき人の聲

こは何事の起りしと

「ウントコドツコイ ドツコイシヨ」

叢分けて細道を

探り探りて行て見れば

數多の男が寄り合うて

三人の男女を縛り上げ

何ぢやかんぢやと挑み合ふ

此奴あテツキリ悪者の

深き企みに乗せられて

どこかのシヤンが捉へられ

手籠めに會はむとする所

これが見すてておかれうか

三五教の神の道

人の難儀を目のあたり

眺めて後へは引かれない

持つて生れた義侠心

黒姫司のした様な

薄情なことは出来ない

一つ肝をば放り出して

木蔭に身をば忍ばせつ

火の國都に名も高き

高山彦と呼ばはれば

大蛇の三公始めとし

乾兒こぶんの奴等やつらはあざ笑わらひ  
面おもてを上げよとぬかす故ゆゑ

彼奴等あいつらの深い企たくみをば  
神かみならぬ身の知しる由よしも

なければ忽たちまち空そら仰あふぎ  
この木きの上うへに何者なにものが

ひそんで居をるかと思みる間に  
忽たちまち降り來くる砂礫すなつぶて

「ウントコドツコイ」目潰めつぶしの  
其計略そのけいりやくに乗のせられて

眼まなこは眩くらみ忽たちまちに  
大地だいちに踞しゃがむ折をりもあれ

悪者わるもの共どもは後うしろより  
首くびに綱つなをば引ひつけて

後うしろに倒たふし手ても足あしも  
所構ところかまはず縛しばり上げ

忽たちまち大地だいちに穴あなを掘ほり  
無殘むざんや吾等われら三人さんにんは

深く土中どちゅうに「ウントコシヨ」  
命いのちカラガラ埋うめられた

これ程ほど深い山奥やまおくに  
埋うづめられてはモウ駄目だめだ

無念むねん乍ながらも今いま此處ここで  
「ウントコドツコイ」玉たまの緒をの

命いのちの消きゆることなるか  
あゝ是非ぜひもなし是非ぜひもなし

前生ぜんしやうの罪つみが酬むくい來きて  
海洋かいやう萬里ばんりの此國このくにで

この様な破目に落ちるのか 國に残せし女房の

お安は嘸や悔むだる なぞと心を痛めつつ

一夜を明かす其間に 體が輕くなつて來た

あゝ訝かしや訝かしや 如何なる神の現はれて

吾等を救はせ玉ふかと 思ふ間もなく「ウントコシヨ」

冷たくなつた口の中 冷たい雨は顔に降り

驚き心を取直し あたりキヨロキヨロ見まはせば

思ひ掛なき黒姫が 顔を覗いて呆れ聲

ヤアヤアお前は孫公か マアマアよかつた よかつたと

七六つかしき顔の色 牡丹の様に榮えつつ

やさしき詞を「ドツコイシヨ」 「ウントコドツコイ」黒姫が

かけて呉れたが「ドツコイシヨ」 こりや又如何した「ウントコシヨ」

涼しい風の吹き廻し あれ程えぐい婆アさまが

俺を助けてくれるとは 前代未聞の大珍事



合が點てんのゆかぬ次第しだいだと　　ここまで思おもうてやつて來きた

「ウントコドツコイ」危あぶないぞ　　そこには蝮まむしが「ウントコシヨ」

飛とびつきさうにしてゐるぞ　　足下あしもと用心ようじんするがよい

黒くろ姫ひめさまのハズバンド　　高たか山やま彦ひこが惡わる者に

土ど中ちゆうに深ふかく埋うづめられ　　今いまや命いのちの瀨せ戸とぎ際はと

聞きいて胸むねをば轟とどろかし　　お梅うめさまをば背せなに負おひ

はるばる助たすけに「ドツコイシヨ」　　お出いでなすつたと云いふ事ことだ

これこれを思おもへば黒くろ姫ひめは　　元もとより俺おれを「ウントコシヨ」

助たすけてやらうと思おもうての　　心こころつくしの業わざでない

サツパリ様やうす子は不知しらぬ火ひの　　波なみのまにまに流ながれ來きて

俺おれを助たすけて「ウントコシヨ」　　くれたに違ちがひはない程ほどに

これこれを思おもへば黒くろ姫ひめさま　　お前まへの眞まことの心こころ根ねは

「ウントコドツコイ」おれの身みを　　助たすける積つもりぢやなかつたが

三あ五な教ひけうの神かみさまに　　知しらず識しらずに使つかはれて

「ウントコドツコイ」孫公を お助けさして頂いた

神の仕組に違ひない お前もこれから喜んで

結構な御神徳を澤山に 頂きましたと神の前

御禮を申さにやなるまいぞ お前の罪も孫公を

助けた御神徳で軽うなり 高山彦の御亭主に

いつかは會はれる事だらう かう云ふ具合に「ウントコシヨ」

夕べの事件を解剖して 一々解釋下す時や

お前の爲には孫さまは ホンに尊い救主

一度御禮を云うたとして メツタに損はいくまいぞ

こんな御神徳を頂いて 孫公さまに反対に

お禮を云はしちやすまないぞ こんな事をば云うたなら

高姫もどきと云ふだるが 決してさうではない程に

孫公守る神さまが お前の身魂を一寸借り

御用に立てて「ウントコシヨ」 俺を助けて下さつた

決して龍宮の乙姫の うつつた肉の生宮が

お愛の方や孫公や 兼公さまを助けたと

慢心しては可かないぞ 「ウントコドツコイ ドツコイシヨ」

益々坂がキツなつた 何程坂を下るとも

「ウントコドツコイ」 下らない サカ理屈をば云ふ奴と

必ず思うて下さるな これもやつぱり黒姫の

常平常のお仕込みで こんな屁理屈言ふやうに

「ウントコドツコイ ドツコイシヨ」 なつて了うたか知らないが

必ず氣悪う「ドツコイシヨ」 思はぬ様にしてお呉れ

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ」

と謠ひつつ、一行の臍をよらせ乍ら、滑稽混りに黒姫にからかひ、坂路を上りつ下りつ進み行く。

兼公は覺束なき口調にて又もや歌ひ出す。

あゝ惟神々々 神の使の黒姫が

向日峠の山麓に さまよひ來つて吾々の

危難を救うて下さつた おれは元から悪い奴

大蛇の乾兒に取入つて いろいろ雑多と畫策し

參謀次長の地位迄も 上つて居つた代物だ

人情知らぬ三公が 虎公さまの不在の家に

數多の乾兒をさし向けて お愛の方を縛り上げ

かついで來る楠の 人の通はぬ木下かけ

巖の上に座を占めて おいらを使つて「ドツコイシヨ」

そこには木株がころげてる 皆さま氣をつけなされませ

無理難題を吹きかけて うまくやらうとした所

天道さまは「ドツコイシヨ」 惡には決して助けない

さすが三公も弱りはて お愛の方に逆様に

言ひ込められて劫煮やし 男女三人を無殘にも

土中に深く埋めよつた 何程度胸の「ウントコシヨ」

人にすぐれた兼公も 手足を縛られ穴を掘り

埋められては堪らない 寂滅爲樂と思ひきや

天地の神の御恵に 再び此世の「ドツコイシヨ」

あかりを見せて下さつた これもヤツパリ黒姫が

お越しになつた其御神徳 私は感謝を致します

「ウントコドツコイ ドツコイシヨ」 虎公さまやお愛さま

さぞやお前は「ドツコイシヨ」 随分得意で御座いませう

死んだと思うたハズバンド 行方の知れぬ女房に

思はず知らず廻り會ひ 無事であつたか嬉しいと

口には云はねど顔の色 チラリとおれは見ておいた

ホンに目出度いことだなア サアサア是から「ドツコイシヨ」

屋方の村に乗込んで 大蛇の三公が素首を

引き抜きやらむと思へども 「ウントコドツコイ」まで暫し

神かみの教をしへを聞きくからは　　そんな無理むりをばやつたなら

根底ねそこの國くにに落おとされて　　無限むげんの苦くをばなめなけりや

「ウントコドツコイ」ならうまい　　さはさり乍ながら餘あんまりの

三公さんこうの仕打しうちに劫がふが沸わき　　何程なにほど思おもひ直なほしても

小癩こしやくにさはつてしようがない　　あゝ惟かむながらかむながら神々々

御靈みたま幸さちはひましまして　　私わたしが今いままで盡つくしたる

惡虐あくぎやく無道ぶだうの罪科つみとがを　　何卒なにとぞ許ゆるして下くださんせ

私わたしも大蛇をろちの三公さんこうを　　憎にくい奴やつぢやと思おもへども

仁慈じんじ無限むげんの神かみさまの　　大御心おほみこころに神習かむならひ

今度こんどは許ゆるしてやりませう　　國魂くにたま神がみの純世すみよ姫ひめ

其外そのほか百ももの神かみ達たちよ　　私わたしが三公さんこう許ゆるすよに

如何いかなる深ふかき罪科つみとがも　　どうぞ赦ゆるして下くださんせ

心こころを清きよめ身みを淨きよめ　　皇大神すめおほかみの御前おんまへに

眞心まごころこめて兼公かねこうが　　慎つつしみ敬あやまひ願ねぎまつる

「謹み敬ひ願ぎまつる」

と謠ひ乍ら進み行く。進んで来るのは早いもの、早くも屋方の村の入口に差かかる。大蛇の三公が館は、コンモリとした櫳の森の中に、僅に其棟を現はしてゐる。  
(大正一一・九・一五 舊七・二四 松村眞澄録)

## 第五章 案外(一九六九)

黒姫の一行九人は、漸くにして大蛇の三公が表門に立ち現れた。門番をして居た二三人の若い奴、森の中に埋めて置いた三人の男女を初め、名を聞いても恐れ居た虎公が、乾兒を引きつれ宣傳使までも伴うてやつて来たのに肝を潰し、蒼白な顔をして「ポカン」と眺めて居る。

兼公は妙な手つきをして故意とに細い聲を出し、

「ホーイホーイ、源公の奴、兼公さまが歸つて来たぞよ。お愛さまも生還り、墓から現はれて、お前等の素首を貰ひに來たから用意をして呉れ。餘り怨めしいので肉體は死んだけれど靈魂が生還り、言葉のお禮に來たのだから、三公の親分を初め與三公、徳公、高、勘の兄弟分にも早く知らして下せえよ。ヒュードロドロドロ……」

と未だ七つ下りの太陽がカンカンとして居るのに、亡者の眞似をして門の前で三遍兩の手をシユウと前に出し、右に左に二三間計り進退しながら擧めた顔をして見せる。

源公外二人の乾兒は驚いて、與三公、徳公等が酒に酔ひ喰うて管を捲いて居る座敷に慌しく注進する。兼公は勝手知つたる館の内、一同を導いて遠慮會釋もなく酒宴の場に乗込み來る。

與三公、徳公は弱腰を抜かし狼狽へ廻る可笑しさ、吹き出すばかり思はるるをジツと耐へ、兼公は尚も作り聲、

「ホーイホーイ與三の野郎。兄弟分の交誼を忘れ、俺の首へ不意に繩を引っかけ、



手足を縛り、ようまあ無残にも生埋めにしよつたな。これ見よ、此通り首が長うなつたぞよー」

と云ひながら無理に首を伸ばして見せ、眼をクリクリさせ、舌を思ひ限り突き出し、兩の手を怪しく前の方へぶらさげ、ビリビリ慄はせながら、

「ヒュードロドロドロ……」

與三公は腰のぬけた儘兩手を合せ、

「ヤア兄貴許して呉れ。決して俺が殺したのぢやない。親分の云ひつけた。俺は親分にお前の知つて居る通り、助けてやつて呉れと頼んだのだが、如何しても聞いて呉れぬものだから、止むを得ず可憐さうな事をしたのだ。何卒堪忍して呉れ。その代りきつとお前の冥福を祈つてやる」

と蒼白の顔をし、兩手を合せて慄つて居る可笑しさ。虎公は吹き出し、

「アハ、ハ、ハ、オイ與三、徳の兩人、些と確りせぬか。幽霊でも何でもないのだ。正真正銘のピチピチした男の中の男一匹、武野村の虎だ。随分御親切にお愛をしてやつて呉れて、餘り有難いからお禮に來たのだよ。妹のお梅まで御親切に預つ

てほんとに「かつちけねえ」。まあ悠りと氣を落ちつけて、虎公の仰しやる事を聞かつしやい」

「これはこれは、武野村の親分で御座いましたか。何卒今までの不都合は水に流し、命だけは助けて下せえませ」

「オイ、與三に徳の兩人、手前は鞆丸をどうしたのか一遍見せて貰ひてえものだ」  
「ハイハイ、お見せ申すは易い事でございますが、餘りの吃驚で何處かへ轉宅してしま

ひました。……鞆丸の奴、氣が利いて居らあ。虎公さまに引張られては、同じ年に生れた親までが苦しむと思つて、體好く姿をかくしよつた。貴様と云ふ奴は餘程氣の利いた奴だ。若い時から皺だらけの面しよつて氣の喰はぬ奴だと思つて居たが、こんな時には都合がよい。何時もしんなまくらな、ブラブラとしゃがつて力も出しやがらぬが、まさかの時には間に合ふと見えるわい。金剛不壞の寶珠迄何處かへいつた。どつかへ持つて逃げよつたのかなア」

お愛「ホ、ホ、ホ、」

お梅「アー可笑しい、徳のをぢさま、見つともない。そんな處早う匿してお呉れ」

「へイ、匿すれば、かくれるものと知りながら、出るに出られぬ狸の辜丸、アハ、ハ、ハ、ハ、」

「どうだ、與三に徳、些つと安心したか」

「些つと許り安心したやうです。親分、誠に濟まねえが、さつぱり弱腰が抜けて仕舞つたのだから、一つ腰を揉んで下せえな」

「エイ厄介な奴だなア」

と云ひながら後へ廻り、腰をグツと抱へウンと氣合をかけると、

「アイタ、ア、これでどうやら元の鞘に納まつたらしい。遠は親分だ、有

難う御座いやす」

「もしもし親方、徳公もどうか一つ願ひます。如何にも斯うにもなりませぬわ」

「エ、幽霊を按摩と間違へやがつたな」

「滅相な、幽霊に禮云ふなんて、そんな御心配はいりませぬ。きつと禮云ふ積りで御座いますから……ア、知らぬ間にちやんと腰が直つて居やがらア。もう斯うなつちや幽霊のやり場がなくなつて仕舞つた、アハ、ハ、ハ、」

斯かる處へ大蛇の三公は、衣紋を整へ恭しく四五人の乾兒に酒肴を運ばせ、白扇をすばめたまま右の手を膝のあたりに斜に置き、靜々と入り來り、一同の前に行儀よく「きちん」と坐り、

「これはこれは皆様、よくこそ入らせられました。三公誠に恐悅至極に存じます。貴方様御一行のお姿が門前にチラリと見えますや否や、この三公の體より小さき蛇二三匹這ひ出しました。ハテ不思議やと眺めている中、その小蛇は表門さして一生懸命逃げだす。不思議の事だと後を追つかけて眺むれば、忽ち變る三匹の大蛇、鎌首を立て向日峠の方面さして一目散にかけ去りました。昨日はお愛様お梅様其他の方々に對し、くだらぬ遺恨より御無禮の事を致しましたが決してこの三公が左様の悪事を働いたのではありませぬ。私に憑依して居た大蛇の奴、吾が肉體を使ひ、あのやうな惡逆無道を致したので御座いますから、何卒三五教の信者たる貴方様、今迄の此の肉體の罪を許して下さいませ。屹度お許し下さるに間違ひないしと確信致してお目通り致しました。サア何卒一獻召し上り下さいませ」

「これはこれは痛み入つたる御挨拶、仰せの通りで御座らう。虎公は大蛇を憎ん

で三公を憎まず、マアマア御安心なさいませ」

「皆様ようこそお越し下さいました。サア何卒、汚穢しい所では御座いますが、御緩りとお寛ぎ下さいまして、三公が寸志の御酒をお上り下さるやうにお願い致します」

「ハイ有難う。サアサアお愛さま。お梅さま、孫公、何をまごまごして居るのだ。サア早く上りなさい。虎公さまの乾兒共、お前も一緒に上るんだよ……へい御免下さいませ」

と云ひながら黒姫はズツと奥に通る。虎公外一同も黒姫の後に従ひ、奥の間に蹄鐵形に「ずらり」と座を占めた。

大蛇の三公は黒姫以下一同に心の底より障壁を除つて、誠意を籠め酒肴を勧める。黒姫の一行も三五教の教を遵奉して居るお蔭で、今迄の恨みを流れ河で尻を洗つたやうに「ケロリ」と忘れて仕舞ひ、和氣霽々として杯を酌み交し、他愛もなく吾家に歸つたやうな気分になつて、或は歌ひ或は舞ひ、三公の數百人の乾兒も座敷の外の庭に蓆を敷き、再び酒の飲み直しをやり、三公館は全くのお祭り騒

ぎと一變して了つた。

三公は珍客の待遇に全力を盡し、打ち解けて色々と痒い所へ手の届くやうな接待振りをやつて居る。三公の歌、

熊襲の國に隠れなき

醜の曲津の容器と

もてはやされた無頼漢

大蛇の三公と名を呼ばれ

調子に乗つてドシドシと

體主靈従のありたけを

盡して來たのが恥かしい

八岐の大蛇の分靈

醜の魔神に憑依され

神の大道は云ふも更

人の踏むべき道さへも

取り違へたる曲津神

執着心に囚へられ

お愛の方に懸想して

朝な夕なに村肝の

心を悩ませ居たりしが

思ひは募る戀の暗

黒白も分かずなり果てて

虎公さまの留守宅を

狙ひすまして押し圍み

お愛あいの方かたやお梅うめさま  
 織かよわ弱をんなき女をを引ひつ捕とらへ  
 人じん跡せき絶たえし向むか日ひ山やま  
 林はやしの中なかに連つれ行ゆきて  
 人ひとのなすべべき業わざでない  
 悪あく虐ぎやく無む道だうをかん敢かう行かうし  
 勝かち鬨どきあげて吾わが家いへに  
 歸かへりて見みれば村むら肝きもの  
 心こころの鬼おにに責せめられて  
 夜よも碌ろくろく々くに寝やすまれず  
 その苦くるしさにあなななひ  
 皇すめ大おほ神かみの御おん前まへに  
 體からだを清きよめ口くち嗽すすぎ  
 自おのが犯おかせし罪つみ科とがを  
 詫わびぶる折をりしも神しん殿でんに  
 現あらはれ給たまひし神かみ姿すがた  
 木この花はな姫ひめの御おん化け身しん  
 言こと葉は静しづかに宣のらすやう  
 お愛あいお梅うめを初はじめとし  
 二ふ人たりの男をとこは三あな五なひの  
 神かみの司つかさの黒くろ姫ひめに  
 救すくひ出だされて明あ日すの日ひは  
 必かなず此こ處こに來きたるべし  
 汝なんぢは今いまより身みを清きよめ  
 心こころの駒こまを立たて直なほし  
 誠まこと一ひとつの三あな五なひの  
 道みちにかへりて今いま迄までの  
 惡あしき行おこなひ立たて直なほし

世人よびとの鑑かがみとなれよかし 虎公とらこうお愛あいを初はじめとし

黒姫くろひめ司つかさや孫公まごこうを 御身おんみ其外そのほか一同いちどうが

恭うやうやしくも出いで迎むかへ 互たがひに胸むねを打うちあけて

神かみに供そなへた大神おほみき酒さけに 心こころの垢あかを洗あらひ去さり

互たがひに手てに手てを引ひき合あうて 世人よびとのためために盡つくせよと

宣のらせたまひし御言おんことば葉は 夢ゆめか現うつしか夢ゆめならず

現うつしにあらぬ大神おほみのり勅しるし 惡虐あくぎやく無道むだうの三公さんこうも

胸むねの雲霧くもぎり吹ふき散ちりて 今いまは尊たふとき神かみの御子みこ

清きよき身魂みたまとなりなりにけり あゝ惟かむながら神かみ々々々々

御靈みたま幸倍さちばひましまして 黒姫くろひめ司つかさは云いふも更さら

虎公とらこうさまやお愛あいさま 其その他た一同いちどうの信徒まめひとと

皇大神すめおほかみの御道おんみちに 進すすみて行ゆかむ吾わが心こころ

完全うまらに委曲つばらに聞きし召めせ 國魂くにたま神かみの純世すみよ姫ひめ

月照彦つきてるひこの神様かみさまに 誠心まごころ籠こめて三公さんこうが



慎み誓ひ奉る　あゝ惟神々々  
御靈幸倍ひましませよ

と歌ひ終り、一同に恭しく一禮して下座につき敬意を表せり。  
（大正一一・九・一五 舊七・二四 加藤明子録）

## 第六章 歌の徳（一九七〇）

黒姫は元氣よく歌をうたつて、雙方の和解を祝す。その歌、

三千世界の梅の花　一度に開く時は今  
天教山や地教山　黄金山にあれませる  
三五教の大神の　尊き教は四方の國

隈なく光り輝きて

心を筑紫の熊襲國

山の奥まで鳴り渡る

實にも尊き神の道

虎公さまを初めとし

大蛇の三公と聞えたる

龍虎の如き兩人が

心の底より打ち解けて

尊き神の御教に

服ひ給ひし畏さよ

天ヶ下なる人草は

高き低きの隔てなく

老若男女の嫌ひなく

國治立大神や

豊國主大御神

造り給ひし御子なれば

互に睦び親しみて

神の造りし神の世に

生き存らへて御恵の

露に潤ひ喜びの

花を開かせ實を結び

千代萬代の末までも

同じ心に睦び合ひ

榮え行くこそ人の身の

此世に生れし務なり

虎公さまは最愛の

お愛の方や妹の

お梅を無殘に三公の

指圖の許に虐まれ  
無念の涙を抑へつつ

神の心を省みて  
凡ての仇を神直日

心も廣き大直日  
見直し給ひし尊さよ

神は吾等を守ります  
人は神の子神の宮

神と神とは善と善  
善に刃向ふ仇はない

あゝ惟神々々  
御靈幸はひましまして

今日の生日の喜悅を  
千代も八千代も變らずに

續かせ給へ天津神  
國津神等百の神

國魂神の御前に  
三五教の黒姫が

謹み敬ひ喜んで  
感謝の詞奉る

いざこれからは皆の人  
心の隔てを取り拂ひ

親と子の如親しみて  
心の玉を磨きつつ

神の大道に服へや  
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも  
假令大地は沈むとも

誠まことの力ちからは世よを救すくふ

誠まことは此この世よの寶たからぞや

金剛こんがう不壞ふゑの如意にょい寶珠ほつしゆ

麻邇まにの寶珠ほつしゆは麗うるはしく

如何いかに尊たふとくあるとて

誠まことの魂たまには如しかざらめ

魂たまを磨みがけよ諸人もろびとよ

魂たまの功績いさをを永久とこしへに

崇あがむる身みこそ樂たのしけれ

あゝ惟かむながら神かむながら々々

御魂みたま幸さちはへましませよ

徳公とくこうはツと立たちてうたひ出だした。

あゝ惟かむながら神かむながら々々 神かみの惠めぐみを蒙かうむりて

徳公とくこうが此處ここに言靈ことたまの お歌うたをうたひ奉たてまつる

大蛇をろちの三公さんこうと云いふ人ひとは 本當ほんたうに腹はらの悪わるい人ひと

今いまの御歌おうたで伺うかがへば 夜前やぜんの中うちに木花このはなの

姫ひめの命みことの御化身ごけしんに 天地てんちの道理だうりを聞きかされて

心の雲を吹き拂ひ  
正しき身魂となりながら

今の今まで知らず顔  
徳公さまを急き立てて

向日峠の山麓に  
埋めて置いたお愛さま

一日も早く助け出し  
何處かの山へ連れ行きて

うまくお前が抱込んで  
竹の柱に萱の屋根

手鍋さげても構はぬと  
お愛の方が吐すまで

うまくやつつけ呉れよやと  
誠しやかに急きたてて

お酒に酔うた徳さまを  
無性矢鱈に急きたてる

誠に腹の悪い人  
外の事とは事變り

冗談云ふにも程がある  
呆れて物が言はれない

本當に馬鹿にされました  
斯んな事だと知つたなら

心配するのぢや無かつたに  
思へば思へば馬鹿らしい

與三公の奴まで騙されて  
本當になつて徳公よ

早く行かなきや親方が  
大きな目の玉むき出すと

脅し文句を並べたて

章魚禿頭に湯氣立てて

勧めくさつたこと思や

夢か現か幻か

分らぬ様になつて来た

今日も思はぬ酒の席

天下は極めて太平だ

兼公の奴がヒヨロヒヨロと

此處へ歸つて来た時は

亡者が俺等の首とり

やつて来たかど肝潰し

腰を抜かした苦しさを

さはさりながら一同の

顔をばよくよく眺むれば

何れも愉快の顔の色

此奴ア大事アあるまいと

高を括つて虎公に

腰をば揉んで下さいと

抜けても居ないわが腰を

瀬踏みの爲めに突き出せば

怨みを忘れた虎公は

困つた奴ぢやと言ひながら

私の後にツと廻り

擦つてくれた御親切

この徳公もこれを見て

轟く胸を撫で下し

ヤツと安心したわいな

あゝ惟神々々

神の御神酒を澤山に 皆さま飲んで下さんせ

私が飲まずぢやない程に 大蛇の親分三公が

祕藏して居た甘い酒 地獄の上を飛ぶ様な

肝放り出して惜氣なく 社會の爲めに投げ出した

由緒の深き酒ぢやぞえ 決して遠慮はいりませぬ

ズブ六さまに酔ひ潰れ 舌も廻らず目も見えず

足さへ立たため處まで 遠慮會釋はない程に

ガブガブ飲んで下さんせ 親分さまの酒ぢやもの

私の懐中痛まない ほんに結構な結構な

目出度い事が出来てきた 「ドツコイドツコイ ドツコイシヨ」

酒は酒屋に よい茶は茶屋に 別嬪さまは此處に居る

お愛の方やお梅さま 何卒今から打ち解けて

私に一杯甘酒を 何卒酌して下さんせ

黒姫さまは手と許り お年は召して御座るけど

矢張女に違ひない

男の手から貰ふより

女の方が味がよい

さあさあ皆さま踊りませう

飲んだり食つたり跳ね廻り

謡うて一夜を明かさうか

八岐大蛇の靈まで

三公さまの體內を

雲を霞と脱け出して

今は尊き神の宮

御神酒あがらぬ神はない

三公親分御守護神

嘸や嘸々御満足

お愛の方も虎公も

御一同様も御満足

序に私も御満足

千客萬來いつまでも

晝夜分たず酒に酔ひ

面白可笑しう暮したい

之が一生の徳さまだ

あゝ惟神々々

爛でも冷でも構はない

早く一杯ついで呉れ

序にも一つついでくれ

本當に甘い酒だなア

こんな良い酒持ちながら

大蛇の靈に憑依され

俺等に隠して三公さま



飲のんで居ゐたのに違ちがひない 昨日きのふ出だしたる甘酒うまざけは

腐くさつた様やうな酒さけだつた もうこれからは親分おやぶんよ

お前まへも改心かいしんしたからは お前まへは悪い酒わるいさけを飲のみ

乾兒こぶんの奴やつにや良い酒よさけを ドツサリ飲のましてやらさんせ

悪虐あくぎやく無道むだうの三公さんこうが 神かみの光ひかりに照てらされて

改心かいしんしたと云いふ證しるし 思おもひ違ちがひのない様やうに

此徳公このとくこうの言いふ事ことを うまく呑のみ込こんで下くださんせ

あゝ惟かむ神な々々ながらかむながら 爛かんした酒さけは尚なほ甘うまい□

と口くちから出で任ませに謠うたひ乍ながら舞まひ狂くるふ。

(大正一一・九・一五 舊七・二四 北村隆光録)

第七章 亂舞らんぶ (九七一)

八公は徳公の歌にそそられて、覺束なくも謠ひ初めたり。

武野の村の玉公が 親の代から傳へたる

水晶玉が如何してか 俄に黒く曇り出し

心をひそめて伺へば 筑紫の島に黒姫が

泥をば吐きに來よつたに てつきり違ひはないものと

大當外れの判断に 親方さまを頼み込み

無花果取るは表向き 高山峠を登り來る

黒姫司を捉まへて 改心ささねばならないと

新、久、八の三人も 親分さまの言ひ付で

嶮しき山をよぢ登り 峠の絶頂に車座と

なつて白黒石トを 初める時しも黒姫が

てつきり此處にやつて來た いきり切つたる吾々は

黒姫司を見るよりも 俄に心機一轉し

どことはなしに具はりし 其神徳に敬服し

建日の館の神司 建國別の許にゆき

親子の對面させむとて 山坂越えて進み行く

さはさりながら黒姫や こちらの目算相外れ

親でもなければ子でもない 肉體上から言うたなら

あかの他人と知れた故 是非なく此處を立ち出でて

九十九曲りの坂路を 親分さまの後につき

火の國街道の山口に 下りて見れば六公が

數多の乾兒を引きつれて 喧譁装束いかめしく

捩鉢巻で待つてみた さすがに偉い虎公は

皆の奴をば追つ拂ひ お愛の方の遭難を

助けてやらねばならないと 一目散に走り行く

深谷川の丸木橋 渡つた所で黒姫や

案じて居つたお愛さま お梅さまにも出會して

やつと安心する間なく 屋方の村の三公を

三五教の大道に 救ひやらむと勇み立ち

向日峠の坂路を 「ウントコドツコイ ドツコイ」と

拍子を取りつつ下り来る 一つの間にやら「ドツコイシヨ」

水晶の玉がなくなつた いやいや さうではない程に

水晶玉を持つた主 玉公の奴が雲がくれ

分らぬ奴は放つとけと 大地をドンドン響かせつ

波布や蜈蚣の横たはる 恐ろし道をふみ越えて

屋方の村に来て見れば 思ひがけなき三公の

鬼は忽ち神となり 大蛇は逃げて神の宮

尊き人となつてゐた あゝ惟神々々

神の恵は目のあたり 若しも大蛇の三公が

昨日の心で居つたなら さぞ今頃は親方と

ヤツサモツサの腕比べ 剣光閃き雷の

鳴り轟きて血煙の 雨が降つたに違ひない

グツグツしてゐりや俺までが 笠の臺までむしられて

いやな冥途へ死出の旅 三途の川の渡場で

婆さまに叱られ居るだらう 同じ婆さまと言ひながら

三五教の神司 黒姫司の御前で

結構な結構な酒を呑み 一同揃うて睦まじう

喧譁和合の大酒宴 こんな目出度い事あるか

案に相違の今日の首尾 私は嬉して飛び上り

手が舞ふ足が踊り出す 何とはなしにブカブカと

體一面浮いて来た 浮く奴ア瓢箪のみぢやない

八公の體も今ういた サアういたり ういたり酒のんで

うき世を渡れ皆さまよ うきに沈んで暮すのは

其奴は悪魔の仕業ぞや 夢のうき世といふからは

人はうくのに限るぞや 火の國川の筏さへ

朝あさから晩ばん迄までういてゐる 【ヨサミ】の池いけのかいつぶり

をしどりさへも夫婦めをとづれ連れん 仲なかよう暮くらしてういてゐる

うけよ、うけうけ皆みなの奴やつ 大海原おほうなばらの舟ふねのよに

「ウントコドツコイ」人ひとの世よは うき世よ三分さんぶといふぢやないか

朝あさから晩ばんまで修羅しゆらもやし 何なんの彼かんのと うき苦勞くらう

する馬鹿ばか者の氣きが知しれぬ 酒さけさへ飲のめばいつもかも

心こころがういて掛取かけとりの 矢やの催促さいそくも梅うめの花はな

鶯うぐひすとまつて鳴なくやうな 程ほどよい聲こゑに聞きえ來くる

人ひとは心こころが第一だいいちだ 心こころ一つひとつの持もち様やうで

ういて暮くらすも一生いっしやうなら 沈しづんで暮くらすも一生いっしやうだ

「ウントコドツコイ」浮沈うきしづみ 七度ななたびあるのが人間にんげんと

どこの奴やつだか知しらないが 吐ほぎいた奴やつは馬鹿ばか者ものだ

七度ななたび八度やたび九度このたび 百度ももたび千度ちたび萬度よろづたび

ういて暮くらすがうき世よぞや 石いしや瓦かはひぢやあるまいし

神の御靈を授かりし 人の身としてやすやすと

沈んで暮して堪らうか あゝ惟神々々

冷の酒より爛がよい 「かんかんカラケツかあん かあん」

「カンカラベラ棒ドッコイシヨ」 坊主鉢巻リンと締め

威張つて見たとて支柱がない さはさりながら酒のめば

如何しても一度はツブ六になつた揚句は茹蛸だ

顔も手足も眞赤いけ 骨はやはらぎグニヤグニヤと

蒟蒻見たよになつて了ふ 體も心もやはらいで

初めて天下は泰平だ 俺の内でも嬪天下

酒さへ呑ましておいたなら 暫く泰平無事の夢

貪る事が出来るぞや 無料の酒ならかまやせぬ

皆さまドツサリよばれませう 未熟者奴と思はずに

冷酒ならぬカン直日 御馳走の数も大直日

何卒見直し聞直し 無禮を許して下さんせ

世の諺にいふ通り 主人の好を悉く

出て来る客にふれまふと うまい理屈をつけながら

頂く御神酒の味のよさ 長い山坂飛んで来て

心がホツとしたとこへ 思ひもよらぬ御馳走に

舌の鼓をうちならし お腹は忽ち布袋さま

七福神の樂遊び 辨財天のお愛さま

大黒みたよな顔をした 三五教の黒姫さま

與三公どんの壽老面 頭ビシヤモン福祿壽

七お多福の寄り合うて 面白可笑しう酒を呑む

あゝ惟神々々 御靈幸はひまませよ

あゝ惟神々々 御靈幸はひまませよ

と口から出任せに歌ひ踊り狂ふ。

高公は又もや歌ひ出す。



八公はちこうよ八公はちこうよよつく聞きけ  
俺おれはお前まへの知しる通とほり

武野たけのの村むらの空平もくべいが  
倅せがれと生うまれたならず者もの

爺おやぢの寶たからをぬすみ出だし  
朝あさから晩ばんまで酒さけくらひ

人ひとの意見いけんもうはの空そら  
父ちちと母ははとに追おひ出だされ

よるべ渚なぎさの捨すてをぶね  
取とりつく島しまもなき儘ままに

火ひの國くに峠たうげをブラブラと  
涙なみだながらに通とほる折をり

驍名げうめい轟とどろく男達をとこたて  
大蛇をろちの親分おやぶん三公さんこうに

ヤツと拾ひろはれ息いきをつぎ  
朝あさな夕ゆふなに草履ざうり取とり

雪隠せんちの掃除さうぢも精出せいだして  
勤つとめて居をつたら親分おやぶんが

貴様きさまはわりとはえらい奴やつ  
兄きやうだい弟にい分ぶんにしてやると

異數いすうの拔擢ぼつてき有難ありがたく  
羽振はぶりを利きかす身みとなつて

肩かたで風切かぜきり遠近をちこちと  
勝負しょうぶに歩あるいた面白おもしろさ

さうだと云いつて俺おれは今いま  
改心かいしんしたとは言いふもの

朱しゆに交まじはれば赤あかくなる  
元もとから悪わるい親分おやぶんの

手下てしたになつて何なんとして

誠まことの心こころになるものか

よくない事ことを朝夕あさゆふに

よい氣きになつてやつてみた

さうした處ところ此度このたびの

向日峠むかふたうげの大騷動おほさうどう

死しんだと思おもうたお愛あいさま

兼公かねこう迄までがやつて來きて

ヒュードロドロとおびやか

俺おれの荒肝あらぎも取りよつた

酒さけでも呑のんでゐなんだら

なに猪口ちよこ才さいな幽靈いうれい奴めと

握にぎり拳こぶしを固かためつつ

兼公かねこうの奴やつを初はじめとし

残のこらず亡者まうじやを打うちすゑて

打うちこらすべき所ところだつた

酒さけに酔ようたる其その爲ために

足腰あしこし立たたぬ悲かなしさに

恨うらみを呑のんで見みてゐたら

正眞しやうしん正銘しやうめいの眞人まにん間げん

亡者まうじやと云いつたは嘘うその皮かは

之これを思おもへば高公たかこうが

お酒さけに酔ようてゐた爲ために

大騷動おほさうどうも始はじまらず

無事ぶじに解かい決けつ相告あひつげた

之これを思おもへば酒さけ呑のんで

腰こしをぬかすも惟かむながら神

何なにが仕組しくみになるぢややら

分つた事ではない程に 皆さまドツサリ酒呑んで

腰をぬかすが宜しかる 酒呑む時には酒を呑み

働く時には働いて 苦樂を共にするがよい

苦中樂あり樂中に 苦ありと云ふのは此事だ

あゝ惟神々々 爛酒の方が味がよい

モウシモウシ黒姫さま 何卒一獻召しあがれ

私がお酌を致します そんな六かし顔をして

睨んで御座ると閻魔さま 冥途の國からやつて來て

ドツサリ科料を取りますぞ あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と嬉しさ餘つて、脱線だらけの酒の讚美歌を謠ひ、ウラル教式になつて了つた。

されども互に心打ちとけた目出度き酒宴であるから、黒姫も別に咎めず、虎公、

三公も、お愛の方も、今日ばかりは治外法權だと、臍をかためて乾兒共の自由の

亂舞に任してゐる。

(大正一一・九・一五 舊七・二四 松村眞澄録)

## 第八章 心の綱(九七二)

一しきり酒宴はすんだ。大蛇の三公は虎公、お愛、お梅、孫公、黒姫、兼公を美はしき吾居間に誘ひ、四方山の話をし乍ら、打ちくつるいで二次會を行つてゐる。數多の乾兒もそれぞれ思ひ思ひに田圃に出で、相撲をとつたり、寝ころんだり、下らぬ話をして上機嫌である。あちら此方に大勢の乾兒のこととて、小競合は始まつたが、何分にも今日は目出度いと云ふので、互に慎み合ひ、大した喧嘩もなく、極めて無事である。

六公、徳公、高公及び虎公の乾兒なる新、久、八の六人は酒に酔ひつづね、其場にドツカと坐つた儘、打解けているいろの話に耽つてゐる。

「オイ新公、貴様んこの姐貴は随分素敵な代物ぢやねえか。どこともなしに一寸あの優しい目で睨まれると、體が吸ひつけられる様な氣がするぢやねえか。それで俺が酒に酔うたのを幸ひ……お愛さま、一寸一杯ついで下せえ……とやったとこりすが偉いワイ……ハイ……と云つて、あの優しい目元で、徳公の顔を戀しうに眺めながら、氣よく注いで下さつた。オイどうだ。貴様たちア、氣が利かねえから、千載一遇の好機を逸したぢやねえか、先んずれば人を制すと云つてナ、甘くやつただらう」

「たつた一遍位酒を義理で注いで貰つたつて、さう法螺を吹くものぢやねえワ。俺たちア、何時も親分の留守になると、お愛さまが、スーツと色目を使つて……コレ新公や、今日は親分が不在だから、マアゆつくり酒でも呑んで……お愛が注いで上げます……とか何とか云つて、あの白い細い手で爛德利を握り……サア新公さま、杯をお出しよ……と仰有るのだ。そこでこの新公が、鬼の來ぬ間の洗濯だと一寸肝玉をオツ放り出し、杯をスーツと前に出す、お愛さまがああ柔かい手で爛德利を取り、左のお手々を徳利の底へ當てスーツと腰を伸ばして、立膝

のまま、ドブドブドブオツト、こぼれます、こぼれます……と云ふ調子だ……と、いいのだけれど、それは何時やらの俺の見た夢だった。乍併、毎日日あの綺麗な顔を見て居ると、何時とはなしに夢に見る様になるのだからなア。つまり要するに、即ち、夢の中の新公の女房だからなア、大したものだらう、オツホン」

「オイ徳公、こんな奴の云ふ事、本當にしちやならねえぞ。親分の居られる時は小さくなつて、何でもかんでもお愛さまのいふ事を聞きよるものだから、お愛さまも餘り小言を仰有らぬが、虎公の親分さまが不在になると、ソロソロサボリ出しよるものだから、お愛さまが柳眉を逆立て、長い煙管をヒヨイと持ち……コレ新公や、お前といふ人は何とした譯の分らぬ男だえ。虎さまの前では平た蜘蛛の様になつて行くせに、お不在になると戸棚の鼠があばれるやうに、一寸も妾の言ふ事を聞かぬぢやないか。腰拔男といふのはお前のことだよ。一寸ここへお出で、さうしてお手を出し……と云はれ依つて、新公の奴、生れついでての天保錢だからなア……へ工何ぞ頂戴致しますのか……なんて吐しよつてな、コハゴハ手をニユーツと、お愛さまの前へ出しよると、お愛さまが……お前一寸目をつぶ

つて御覽……とやられくさるのだ。阿呆が足りないで、新公の奴目を塞ぎよると、お愛さまは左の手に灰をつまみ、右の手に火の燵を火箸につまんで、掌に火をのせ、それと同時に、舌に灰をのせられよつて……アツ、アツ、プープーと言ひながら裏の小川へ走つて行く……と云ふ馬鹿者だからなア。到底お話にならない代物だよ

「コリヤ久公、ソラ何を言ふのだ、貴様のことぢやないか。何時もお愛さまに灸をすゑられよつて、キユーキユー言うてゐるから、何時の間にか久公といふあだ名がついた位なのに、知らぬかと思つて、そんなウソツハをこきよると、承知しねえぞ」

「ヘン、お人がズツと違ふのだから、何と云つても天道さまが見て御座るのだ。グズグズ吐すと久々言ふよな目にあはしたるか。コラ新公、【シン】氣臭い新公だと、いつもお愛さまにボヤかれてるくせに……」

と言ひ乍ら、新公の横面をピシャツと擲る。

「コリヤ喧嘩か、喧嘩なら飯より好きだ。イヤ酒の次にや喧嘩が好きな新公だぞ。」

サア来いこ」

と拳骨げんこつを固かためる。六公ろくこうは慌あわてて、

「コラコラ内裏うちうらから、内亂ないらんを起おこしちや詮つまらぬぢやないか、マア待まて待まて」

「内亂ないらんが起おこつたつて仕方しかたがねえワ。どうぞ放ほつといてくれ、新公しんこうには新公しんこうとして

の新案しんあんがある。「新久しんきう」思想しきうの衝突しきうつうだから、「六ろく」公こうが何程なにほど仲裁ちうさいしても、「六ろく」

な解決かいけつアつきやしめえ、「六ろく」に内容ないようも査しらべずして仲裁ちうさいしたつて駄目だめだぞ」

「今日けふは目出度めでたい日ひだから、親分おやぶんに免めんじて喧譁けんわ文だけは止やめてくれ。若わけえ奴やつに聞きか

れても外聞ぐわいぶんがわりいからなア。時ときに新公しんこう、お愛あいさまはありや普通ふつうの女をんなではないや

うだが、一體いつたいどこからお出いでになつたのだ。あの方は親おやが分わからぬと云いふぢやない

か」  
「その分わかつて居ゐる者ものは、此この廣ひろい熊襲くまその國くにに、言いふと濟すまぬが、親分おやぶんと此この新公計しんこうばか

りだよ」

「一つこの徳公とくこうにソツとお愛あいさまの素性すじやうを明あかしては呉くれめえかなア」

「それを聞きいて何なににするのだ。もしも本當ほんたうのことを聞きかうものなら、アフンと致いた



して開いた口がすばまらぬやうになつて了ふぞ。腰をぬかすかも分らぬから、鮮でも用意しておくがよいワ」

「馬鹿にするない、猫ぢやあるめえし、鮮の用意せえとは、何を吐すのだ」

「鮮（日進）月歩の世の中だ、【新久】思想の衝突する現代だから、世の中は何時もガヤガヤ騒がしいのは當然だ。此新公と徳公と寄つて、【新徳】を發揮し、亂麻の如き亂れ果てたる世の中を、一つ改造して見たら如何だらうなア」

「其奴ア面白い。乍併其問題は委員付託としておいて、お愛さまの素性を早くきかしてくれねえか。決してビツクリやしねえから……」

「そんなら一つ、今日は大張込みに張込んで、神祕の扉を開いてやるから、最敬禮の上、新公の言ふことを謹聽せい……抑も虎公親分の最愛の妻、お愛の方の素性と言つば、畏くも天教山より天使として、火の神國に降らせ玉ひし八島別の神、後には建日向別の神と申上げた神司の御祕藏の御娘子様だぞ」

「ヤア、ソラ又本當かい。どうしてそんな尊い身分で居乍ら、侠客風情の虎公の女房になつたのだらうか、チツと合點がいかなぬぢやねえか。なア、高公、六公、

まるで天地が覆るやうな話だなア、さうすると、俺だつてあまり馬鹿にやならぬ  
ワイ。どんな尊い方の娘と結婚するかも知れやしねえからなア」

「モウそれ丈でよいのか」

「ヤアよい所か、モツトモツト聞かしてもれへてえのだ。それから如何したのだ。

サア其次をきかしてくれ。何だか氣がせいてならねえからなア」

「八島別の神様は敷妙姫様といふ奥さまがあつて、其仲にお生れ遊ばしたのが愛

子姫さま、其妹に依子姫様といふ綺麗なお嬢さまがあつたのだ。さうした所、御

兩親様が豊の國の豊日別様の御子息豊照彦様を養子に貰つて、後をつがさうと遊

ばした所、愛子姫さまは、貴族生活が生れつきの大のお嫌ひで、平民主義の御方

だから、立派な豊照彦様の御養子をお嫌ひ遊ばし、ソツと夜陰に紛れて館を飛び

出し、黄金の腕輪や、ダイヤモンドの首飾をかけたまんま、夜道を辿らつしやる

其時しも、忽ち森の木かげより現はれ出でたる二三人の男、矢庭に姫の前に立塞

がり、手を取り足をとり、草原の路傍に打倒し、亂暴狼籍に及ばうとしてゐた所、

俺所の親分虎公さまが、此新公を伴れて、一杯機嫌でヒヨロリヒヨロリと千鳥足、

木遣りを唄つて向方の方よりやつて来た。三人の悪い奴アよつて集つて姫を押し、キヤアキヤア云はしてゐやがる。そこへ親分と俺とが飛んで出て、大喝一聲……悪者共暫く待てえ……と雷の如き大音聲に呼ばはれば三人の奴は、其聲に打驚き雲を霞と逃げ散つたり……卑怯未練の奴共、逃げる奴には目は付けず……と姫の方を月影にすかし眺むれば雪を欺く天下無雙のナイス、ダイヤモンドは月に照らされ、頭一面に星の如くにきらめいて居る。指にもダイヤモンド、足にも腕にも黄金の輪が嵌つてゐる。コリヤ普通の家の嬢さまであるめえと、親分さまが合點し……もしもしどこのお女中か知りませぬが、大膽にも物騒な夜の一人旅、危ねえ事で御座えましたネ……と云ひながら姫の手を取り静に抱き起し、塵打拂つて勞つた所、姫さまは漸くに顔をあげ……どこの何方か存じませぬが、九死一生の場合、よく助けて下さいました、途中のこととて御禮の仕様も御座いませぬから、どうぞこれを受取つて下さい……と、頭に光るダイヤモンドを一つも残らず取外し、足の輪から腕輪まで一つに集めて親分に渡さうとする。親分の虎公は喜んで飛付くかと思つてゐたら、猫に小判を見せたよな調子で……コレコレお女中、

そんな物を貰ひてえ爲に助けたのだござえやせぬ、どうぞ納めて下せい……と仰  
有つた所、そのお姫さまは……どうぞ受取つて下さいませ、あなたは命の親で御  
座います、私は建日向別命の總領娘、貴族生活が厭になり、鄙に下つてどこかに  
水仕奉公でもしたいから脱けて來ましたのだ、こんな物は最早必要は御座いませ  
ぬ、さうして一旦お前様にあげようと思つた妾の心、如何しても翻すことは出來  
ませぬから、何卒お慈悲に受取つて下さい……と手を合して頼まれる。親分は……  
……わしも武野村の侠客だ、一旦要らぬと云つたら、如何しても受取らねえ……と  
頑張り出す。如何しても埒が明かねえので、此新公が中にわつて入り、とうとう  
親分に得心させた。さうすると親分が……そんならお姫さま、折角のお志、有難  
う頂戴致します……と受取り……もし姫さま、私が頂戴した以上は、如何しても  
構ひませぬかと親分が云つたのだ。さうすると姫さまが……あなたに渡した以上  
はあなたの品物、如何なつと御勝手に遊ばしませ……とお出でなすつた。親分は  
……それなら私の勝手に致します……と言ふより早く傍を流れる深い谷川へ、惜  
氣もなく投込んで了つた。そこで其姫さまが親分の氣前に惚込み、懸想をしてゐ

らつしやつたのだ。乍併女心の恥かしいと見えてそんなことはケブライにも出さず、武野の村の七兵衛の内に水仕奉公に、素性を隠して住込み二年許りみられたのだ。サアさうすると誰云ふとなく別嬪だ別嬪だといふ評判が立ち、大蛇の三公がやつて来て……お愛と名乗るお姫さまを執念深く口説き立てに來ると云ふ騒ぎだ。それが到頭三年前に姫様の方から内の親分に申込んで結婚の式を擧げられたと云ふ始末だ。随分内の親分もえれえものだらう。其親分の一の乾兒だから、此新公だつて、決して馬鹿にはならないぞ。お愛さまと初から、さう云ふ關係があるのだから、不在中に酒の一杯位ついで貰つたつて、別に不思議はあるめえがなア

ともつれた舌で物語つてゐる。六公、高公の兩人は此話を聞いて、腕を組み、首を傾け吐息をもらして居る。

「ホンに偉い者だなア。度胸が据わつて居ると思へば、ヤツパリ蚯蚓切りや蛙とばしの腹から出たのぢやねえからなア、人間と云ふ者は争はれぬものだ……昔からの胤の吟味を致すは今度のことぞよ。種さへよければどんな立派な花でも咲く

ぞよ……と云ふ三五教には教があるといふことだが、本當に種といふものは争はれぬものだなア……オイ六公、高公、貴様何時やら、俺に話して居つた失敗話によく似てるぢやねえか、あの時の馬鹿者は貴様の連中だらう。此話を聞くや否や、サツパリふさぎ込んで了ひよつたぢやねえか。そのしよげ方は何だい、忽ち様子に現はれて居るぞよ、本當に困つた代物だなア」

「夜分のこととチツとも分らなかつたが、其時のナイスがヤツパリお愛さまらしいワイ。大きな聲を出しよつた奴は、虎公だつたのだなア。世間は廣いやうなもの狭いものだなア。之を思ふと悪い事はチツとも出来やしねえワ」

「アハ、ハ、ハ、とうとう蛙は口から、白状しよつた。おれも此處へ來た時に、どうも貴様のスタイルが臃げながら、あの時の馬鹿者によく似てると思つてゐたのだ。天罰と云ふものは恐ろしいものだなア」

「本當にさうだ。おれもいよいよ改心するワ。こんな話を聞くと、折角酔うた酒迄さめて了ひさうだ。ア、ア、新公の親分は本當に仕合せな男だ。そして内の親分は不仕合せな男だ。俺までヤツパリ不仕合せだ。アンアン悲しわいはい」

八公「ウツフ、、、」

「アツハ、、、、オイ俺所の親分を一通りの人間だと思つてゐるかい」

「【徳】とは分らぬが此奴も只の狸ぢやあるめえ。どこぞの落胤ぢやなからうかなア」

「落胤所かい、昔火の國に御座つた虎轉別さま、後に豊の國へ行つて豊日別命とお成り遊ばした結構な神様の總領息子だ。それで虎公と云ふのだ。其の虎公さまが一寸澁皮の剥けた下女に手をかけ、手に手を取つて、道行ときめこみ、熊襲の國へさまようて御座つた其時、其女は腹がふくれてをつた。それが大きな山坂を越えて来たものだから、とうとう病氣になり、難産をして親子共になくなつて了つたのだ。此新公だとして、ヤツパリ元は豊日別様の御家來だ。若旦那様の虎若様が驅落遊ばす時に、お供をして従いて来たのだから、何と云つても此新公が親分さまの一の眷族だ。何ほど久公や八公が【しやち】になつたつておれにや叶はねえからな、アツハ、、、」

と肩をゆすつて笑ふ。徳公は「フーン」と云つた限り、感に打たれてゐる。折し

も遠音とほねに響ひびく鐘かねの音ね、ゴーンゴーンと静しづかに聞きえ來きたる。  
徳公とくこう『ヤアもう子ねの刻こくだ。皆みなさまこれから休やすみませう』

(大正一一・九・一五 舊七・二四 松村眞澄録)

## 第九章 分擔ぶんたん (九七三)

吼ほえ猛たける虎狼とらほかみや獅子しし大蛇をろち 熊襲くまその國くにの高原かうげんに

館やかたを構かまへて遠近をちこちに 暴威ばうゐを揮ふるひし男達をとこだて

その名なも大蛇をろちの三公さんこうが 離座敷はなれざしきに夜よもすがら

酒汲さけくみかはし四方山よもやまの 話はなしに耽ふける人ひとの影かげ

障子しやうじに映うつる五いつつ六むつ 夜よは深しん々と更ふけ渡わたり

荒野あらのを渡わたる夜嵐よあらしの 聲こゑも何時いつしか静しづまりて



幽かに聞ゆる谷川の  
水の音のみ鳴り渡る。

巖を咬むで進む

酒の機嫌で何となく神経興奮して寝つかれぬままに、ブラリブラリと境内を遡してゐた新、久、徳の三人、障子に映る人影を眺め、巻舌になつて呶鳴つてゐる。

「オイ新公、あの障子の影を見い！ 貴様が親方の不在になると、チヨイチヨイと酒を汲んで貰ふと吐しよつたナイスの影法師がシヤントコセイのウントコセと映つとるぢやねえか、本當に偉い奴だなア。お愛の姐貴も只の狐ぢやないと思うて居つたが、八島別とか何とかの娘だと言ひよつたなア。昔常世の會議で八島とかいふ狐が出よつて、常世姫命をアフンと言はしよつた其奴の系統かも知れないぞ」

「コリヤ徳、そんな大きい聲で吐すと、三公に聞えるぢやねえか。貴様が口外せぬと吐したから、この新公が親切に神祕の鍵を開いて聞かしてやつたぢやねえか、

これ程夜が更けて、そこらあたりがシーンとして居るのだから、小さい囁き聲でも聞えるのだから、小さい聲で云はぬかい。お愛さまに聞えたら大變だぞ」

「貴様の其聲の方が餘程大きいぢやねえか。オイ新公、あのお梅と云ふ奴ア、親分の妹だといふ事だが、妹迄伴れて驅落しよつたのか。本當に念の入つた奴だなア」

「妹といへばママア妹だ。實のとかア、彼奴も拾ひ子だよ。うちの虎公が表向妹だと云つてるのだが、其實ア、フサの國に生れた女で、姉にはお松といふ立派なナイスがあるのだ」

「そのお松を如何して知つとるのだ」

「きまつた事だ。松竹梅と云ふ事があるぢやねえか。お梅の姉はお竹、お竹の姉はお松だ。黄泉比良坂の桃の實になつた松竹梅の宣傳使の生れ變りだからなア。本當に素敵なものだ。オイ徳公、俺が一つ貴様の改惡記念にお梅さまを女房に周旋してやらうか」

「あんな若え代物と如何して夫婦になれるものけえ。世間體が見つともねえワ」

「貴様ア、世閒體を憚る良心があるのなら、なぜこんな無頼漢の三公の乾兒になつたのだい。それの方が餘程世閒體が悪いぞ。俺のこの親方はドンドンながら、ポンポンながら、豊の國の豊日別命さまの御總領で、虎若彦命様だ。若い時に無分別な戀におちて、熊襲の國へお出で遊ばしたのだが、何と云つても種が種だから偉いものだ。大蛇の三公なんて云ふ奴あ、どこの牛骨だか馬骨だか素性の分らねえゲス下郎だから、人情も知らねば、誠の道理も悟らず、卑怯未練な、親分の不在宅へ押かけて、お愛の方を無理往生させようとしよつたのだよ。そんな奴の提燈持をしてる奴に、碌な奴があるかい、なア久公」

「オイオイそんな聲を出すと、親分に聞えるぢやねえか。聞えたら又事が面倒だぞ」

「（淨瑠璃）そりや聞えませぬ、久公さま……だい、お詞無理とは……チンチン……ぢや、思はねどオ、俺は餘り氣にかかる、折角結構な親方を、持つて喜ぶひまもなう、追ひ出されては、此新公、どこに如何して暮さうやら、案じすごしてヒヤヒヤと、轟く胸を押へつ……け……悔み歎きし其顔付……」

「オイオイ障子が開いたぞ。親分が今お目玉だ。逃げる逃げる」

「（浄瑠璃）ヤレ其障子開けまいぞ、此蚊帳の内は黒姫婆が城廓、其腐った魂で、

此城一重破らるるなら、サ、破つて見……よ……と百筋千筋の理をこめて、引  
つかついだる蚊帳の内、泣くねより外應答なし……と云ふ様な愁歎場だ」

障子をあげた男の影、

「オイ久公、何を云つてゐるか」

三人は一度に両手で頭を抱へ、

「へー」

と云つた限り踞んで了つた。

「ハハ、人間かと思へば、四つ足だつたな」

「イエエ工違ひます違ひます。【新】酒と【久】酒と【徳】利に入れて持つて來

やした、【三公】……オツトドツコイ三人で御座います。【トラ】まアよい味の

酒で御座いますから、味はお【ウメ】さんで、中々素敵な物でげす。夜夜中にこ  
んな所迄來て、【孫公】々々して居るものだから、月も星もないこれ程曇つた

【黒姫】の晩に、【ヲロチ】い目に會うて困つて居る三公でげす。親方如何でげせう、第三次會をお開きなさつたら……モウ夜の明けるに間もあるめえから、綺麗なナイスをお【愛】手として一杯やるも乙でげせう。ア—ア、とうとう酒に一夜酔をして了つて、舌も碌にまはりやしねえわ」

虎公「オイ三人の奴、最前から聞いて居れば、貴様等は怪しからぬ事を囀つて居つたではねえか」

「へエ、虎公の親分さま濟みませぬ。新公が自慢顔をして、親方さまの素性を明かしよつたものだから、耳が痛くて仕方がねえのを辛抱して聞いて居つたのですよ。さうして宅の親分をボ口糞にこきおろしよるものだから、ム力つくのム力つかぬのつて、最前から三四度も八百屋店を出しましたのだ。ア—ア、こんな所に居つちや劍呑だ。親方、今日はそんな事を言つて、私を冷つかし、冷酒で苦しめるよりも、爛酒に見直し聞直して下さいませ。オイ皆の奴、あつちへ行かうかい」と云ひ乍ら、三人は暗に紛れて、田圃の中へ酔醒ましに行つて了つた。

あとには例の虎公、黒姫、孫公、兼公、お愛、お梅に、主人側の三公七人が机

を中なかにおいて、ヒソヒソ話はなしを續つづけて居ゐる。宵よひから尊たふとき神様かみさまの御經綸談ごけいりんだんに魂たまをぬか  
れ、夜よの更ふけるも知しらず、又また餘あまりの愉快ゆくわいさに睡氣ねむけもささず、小聲こごゑにいろいろの經けいれ  
歴話きばなしを交ませて、入信にふしんの經路けいろなどを物語ものがたつてゐる。黒姫くろひめが、  
「今窓外いままどそとにて三人さんにんの話はなしを聞きけば、お愛あいさまや虎公とらこうさま、お梅うめさまの身みの上話うへばなし、實じつ  
際さいあの通とほりで御座ございますか」  
「若わえ奴やつが酒さけに酔よつて云いふのですから、當あてになつたものぢや御座ございませぬ」  
「酒さけの酔よ本性ほんしやう違たがはず……と云いひますから、満更まんざら、影かげも形かたちもない事ことでは御座ございます  
まい。酒さけに酔よつた時ときは比較ひかくてき的正直しやうじきなものですからなア虎公とらこうさま」  
「合あうたところもあれば、合あはない所ところもあり、兔とも角聞かくききはづれを云いつてるので  
から、困こまつたものですワイ」  
「お梅うめさまはお松まつさまの妹いもだとか云いつてゐましたなア。そのお松まつさまは今いまどこに  
居をられますか。お差支さしつかへなくば仰有おつしやつて下さいませ」  
「ハイ私わたくしには姉あねが御座ございました。中なかの姉ねえさまのお竹たけさまはコーカス山ざんへ行いつたき  
り行方不明ゆくへふめいとなり、上うへの姉ねえさまのお松まつさまはフサの國くにから海うみを渡わたつてどこか遠とほい

國へ行かれたとか言ふ話で御座います。何分私の小さい時に別れたのですから詳しい事は存じませぬ」

「あなたの御両親は何と云ひますかな」

「私の父母は人の噂に承はりますれば、バラモン教の鬼雲彦とやら云ふ大將に連れ歸られ、生命を取られたとか云ふことを承はりました。私は或悪者の爲に拐はかされ、筑紫ヶ嶽の頂上へ来る折しも、兄さまがお出でになり、悪者を追ひ散らし、私を助けて連れ歸り、今迄世話して下さいました。兄さまの計らひで、親子兄弟のない子だと言つたら世間の人が輕蔑するから、お前は俺の國許から訪ねて来た妹だと言つてをるがよい、俺もお前を眞の妹だと思つて可愛がつてやると仰有つて下さいました」

と涙を流し泣き入る。虎公もお愛も黒姫も手を組み首を垂れ、太き息をついて居る。

「お梅さまの事は三公今始めて承はりました。ヤア虎公さま、あなたは本當に親切な方ですなア。ヤもう感心致しました」

とこれも亦涙含む。

「ヤア是で孫公も三人の祕密が全部分りました。就いては三公の親分、お前さまは何と云ふ人の子だい、序に言つて下さつたら如何です。モウ斯うなれば親身の兄弟も同様だから、何の分け隔ても要りませんまい」

「私の父はエチプトの町に住んで居りまして、春公と申し、母はお常といひました。或時、三五教の宣傳使となつたのを幸ひ、初陣の功名をして神様に御目にかけたいとか云つて、私を家に残し、白瀬川の水の上、スツポンの湖に棲む大蛇を言向和すとか云つて、夫婦が参りました。さうした所が、私の兩親はまだ神力が足らなかつたと見えまして、湖の大蛇に苦もなく吞まれて了つたので御座います。私はただ一人下男と留守をして居りましたが、此事を風の便りに聞き、矢も楯もたまらず、三五教の宣傳使で埃及の酋長なる夏山彦様の御館へ、父が入魂にして頂いて居つたのを幸ひ馳せ参じ、神勅を伺つて貰つた所「お前の兩親は今迄餘り澤山に財産を拵へ、難儀な者を助ける助けると云つた計りで、米一掴み與へた事もなし、大勢の者の執着心が重なつて大蛇となり、お前の兩親を亡ぼして了つた



のだから、モウ駄目だ。せめては兩親の冥福を祈り、再び此世へ立派な人間として生れて来るやうに祈つてやれ……と仰有いました。併し乍ら兩親はどこかへ生れ變るにした所で、私としては最早親を取られたのだから、安閑としては居られない、スツポンの湖の大蛇を片つ端から切り屠り、親の仇を討つてやらむと、夏山彦御夫婦が親切におとめ下さるのも聞かず、夜に紛れて吾家を飛出し、湖畔に来て見れば、際限もなき廣い湖、此奴ア到底一人や二人の力では可かないと斷念し、それから遙々と熊襲の國の屋方村、檜の森の木かげに庵を結び、侠客となつて數多の乾兒を養ひ、サア是で大丈夫と云ふやうになつた所で、一擧にして大蛇を殲滅せむと、心の底より惡ではないが、惡を装うて惡人原をかりあつめ、大蛇退治の用意をして居つたのです。三五教の様な無抵抗主義の教を奉ずる信者が幾らあつても、到底大蛇征伐の様な殺生な事は致しますまいから、類を以て集まるとか云つて、悪い者の所へは悪い者が集まります。其悪い奴を澤山集めて悪い大蛇を平げるのは所謂毒を以て毒を制すると云ふ筆法ですから、今日迄其覺悟を持つてゐたので御座います。さうしてお愛様に對し失禮な事を致しましたのも、

實の所は戀慕に事寄せ、お愛様を私の手許に引寄せ、建日向別命様の靈系であるから、まさかの時の用意にと思つて、いろいろ雑多と拙劣な計劃をめぐらしてゐたので御座います。實に幼稚な考へで、只今となつては恥しう御座います」

と物語りつつ、涙を雨の如くに流し乍ら、悄然として俯むく。

「ヤアそれで虎公もスツカリと様子が分つた。いよいよ四人の種明かしも無事に終了してお目出度い、其話を聞く以上は、ジツとしちやゐられない。サア是から三公さま、吾々と共にスツポンの湖に向つて言靈戦を開きに参りませう。併し乍ら、三五の教は喜ばれて仇を討つといふ教だから、大蛇の命を取りに行くのではない、大蛇の靈を、天津祝詞の生言靈に依つて解脱させ、天國に救ひ上げ、今後は決して國民に災をなさないやうにするのだ。一旦殺された御兩親は氣の毒だが、是も自分から作つた罪が酬うて大蛇に呑まれたのだから、吾々人間として如何ともする事は出来ない。又三公さまだとて、大蛇を親の仇だと恨む譯には参りませんまい。要するに春公、お常御兩人の自ら造つた悪魔が、自らを攻めたのだから、言はば自業自得、何事も神様の御裁斷に任すより仕方がない。サア皆さま、言靈

戦に参らうぢやありませんか

ソリヤ結構ですなア。此三公の野郎も時を移さず乾兒を引つれて参る事に致しませう

「イエイ乾兒なんか伴れて行く必要はありませんよ。吾々には八百萬の神さまが守護して下さるから、人数は餘り要りませぬ、三人居れば大丈夫です」

「左様なれば虎公さま、お愛さま、三公さま、あなたに御苦勞になります。黒姫はこれから孫公を伴れて火の國都へ参りませう」

「あゝそれは御苦勞で御座います。左様なれば機嫌よく御越しなさいませ。誰か乾兒を一人、御案内に立てませうか」

「ハイ有難う御座います。どなたでも宜しいから、道の勝手を御存じの方を、お一人お貸し下さらば有難う御座います」

「そんなら、徳をお供に立たせますから、宜しう願ひます。元來が氣の利かない男ですから、却て足手纏ひになるかも知れませぬが……」

「ハイ御親切に有難う御座います。そんなら徳さまに御苦勞になりますませう」

「黒姫さま、女房の命を助けて下さったお前さまを、一人やる譯にも行きませぬから、久公を一人御案内に立てませう。さうすれば三人の道伴れ、大丈夫ですか」

「ハイ有難う御座います。どこへ行つても神様と道伴れ、一人で結構で御座います。すが、向ふへ参つた所で、掛合が一人では都合が悪う御座いますから、そんならお二人にお世話になりませう。其代りに孫公をあなた方のお伴をさせませう……コレ孫公さま、お二人の親分によく仕へ、大蛇を言向和せた上、火の國都へ訪ねて来て下さい」

「ハイ願うてもなき事、有難う御座います。そんなら行つて参ります。随分御無事でお出で下さいます様御祈り致します」

茲にお梅は虎公の命に依つて、新、八の二人と共に武野村の不在宅へ歸る事となりぬ。虎公、お愛、三公、孫公の四人は、いよいよ時を移さず屋方の村を立出で、スツポンの湖の大蛇を言向和すべく、意氣揚々として旅装束を整へ進み行く。兼公、與三公、高公の三人は數多の乾兒と共にあとに留まりて不在役を勤めさ

せらる。

(大正一一・九・一六 舊七・二五 松村眞澄録)

第二篇 ナイルの水源すゐげん

第一〇章 夢の誠ゆめ いましめ〔九七四〕

屋方やかたの村むらの三公さんこうと 綽名あだなをとつた男達をとこだて  
蚊龍かうりゅう天てんに登のぼるよな 其勢そのいきほひの荒男あらしをとこ  
武野たけのの村むらの男達をとこだて 譽ほまれを四方よもに虎公とらこうが

お愛の方と諸共に

孫公伴ひ鼈の

湖水に潜む曲神を

神の教の言靈に

言向和し世の人の

百の禍除かむと

侠客氣性の兩人が

足もいそいそ山道を

右に左に辿りつつ

カンカン照り込む夏の陽を

頭にうけて進み行く

あゝ惟神々々

御靈幸ひまませよ。

一行四人は漸く白山峠の山麓にさしかかった。登りが三里、下りが三里と云ふ

可なり大きい峠である。早くも夏の陽は西天に没し、生暑い風が一行の顔を撫で

て四邊の木々の梢を揺りながら、おとなしく通つて行く。

孫公「随分コンパスが疲勞したやうです。幸に日が暮れたのですから、此邊で一

つ一宿を願つて行く事に致しませうか」

虎公「どうでこんな急坂だから夜の途は危ない。此坂下で今夜は野宿をする事に

しようぢやないか、なア三公………」

三公は「好からう」と唯一言、嬉しさうに諾いて居る。四人は木の葉を澤山にむしつて敷き、俄作りの青葉の疊の上に、長途の疲れと他愛もなく寝込んで仕舞った。

孫公は三人の雷の如き鼾が耳に入り、どうしても寝られないので、四五間許り隔てた草の中に胡坐をかき、空を仰いでオリオン星座を見つめ、何事か口の中に祈願して居る。

其處へザワザワと茅を揺つて現はれて来た一つの白い影がある。孫公は此影を「まんぢり」ともせず怪しき者の出現かなと見詰めて居た。怪しの影は孫公の前に恐る恐る現はれ来り、優しき女の聲にて、

「もしもし旅のお方様、お願いが御座います」

「ヤアお前は女ではないか。こんな草の原に唯一人やつて来るとは肝玉の太い者だなア。俺に頼み度いと云ふのはどんな事か、云つてみさつしやい。事によればお前の力にならない事もないから………」

「ハイ有難う御座います。詳しい事は後で申し上げます。何卒私に跟いて来て下さいませ」

「近い所ならいいが、餘り遠くは御免蒙り度いものだ。ソレ、あすこに俺達の道連が三人寝て居るのだから、どうしても離れる事は出来ない、俺は此處で三人の夜警をやつて居るのだからなア」

「さうするとお前さまは、あの三人の方の奴さまですか。何と氣の利かねエ方ですなア。何程大きくても牛の尻にはなるな、小さくても鶏の頭になれと云ふぢや御座いませぬか、それにお前さまはそんな大きな圖體をして、あんな侠客や、ハイカラ女のお尻に從いて行くとは本當に甲斐性のない方ですなエ」

「こりや女、馬鹿にするない。俺や決してあの三人の奴ぢやないぞ。押しも押しされもしない男の中の男一匹、三五教の宣傳使の孫公と云つたら俺の事だ。あんまり見違ひをして貰ふまいかい。又お前も、こんな俺を腑甲斐ない男と見込んで頼むとは何の事だ。餘程腑甲斐ない女だなア」

「ホ、ホ、ホ、知らぬかと思つて、三五教の宣傳使だなぞと、ようそんな嘘が云



へたものだわ。黒姫と云ふ宣傳使のお供をして来た自轉倒島の孫公ぢやないか。まだ宣傳使になるは早い、資格が具備して居ないから、そんな法螺を吹かぬやうにして下さい。この熊襲の國は悪人もあるが、併しどんな悪人だつて嘘だけは云ひませぬよ。自轉倒島の人間は、嘘が上手だから、夫で他の國の人間が劍呑な人種だと云つて、到る所排日思想を噓りたてるのだよ、チト心得なさい」

「これは又づけつけと怯めず臆せず他の悪口を云ふ女だ。ちつと言靈を慎まないか。俺が宣傳使だと云つたのをお前は嘘ぢやと云ふが、決して嘘ぢやないよ。未來の宣傳使だ、神の目から見れば現在も未來も一つだよ」

「ホ、ホ、ホ、ホ、本當に偉い未來の宣傳使様だこと、高山峠の中腹では腰を抜かし、連れの男女にほつときぼりを喰はされ、涙ながらに見つともない、トボトボと淋しさうな顔をして、向日峠の山麓に迷ひ込み、大それた嘘を云ひ、今ここへ來て居る三公の乾兒にとつちめられ雁字搦みにせられ、生きながら穴に葬られた腰拔男ですからなア。イヤもう其御神徳の強いには感心しましたよホ、ホ、ホ、ホ。私も女と生れた以上は、お前のやうな腰拔男とどうかして一度夫婦になつて見たく

も何ともありません。あた汚らはしい、嫌な臭のする男だね工、オ、臭やのう、これこれ孫公どの、一問許り間隔を保つて来て下さい。餘り近よると臭い匂ひがするから……」

「勝手にしやがれ。誰が貴様のやうな化女の尻について行く馬鹿男があるものか。馬鹿にするな、孫公の腕には骨があるぞ」

「ホ、ホ、骨があるといふア。八丁笠のやうな骨をして、餘り大きな口を叩くものぢや御座いませぬぞ工。些と修業をなさらないと、鼈の池の大蛇退治は駄目ですよ。お前が大蛇に呑まれに往くかと思へば、不憫で耐らないから氣をつけてあげるのだ。一度あつた事はきつと三度あるものだ。一度は高山峠の岩に腰を打ち氣絶して命危く、二度目は三公の乾兒の者に生理めにしられた。災難のよくつきまとふ男だから、三度目蛇の子と云つて、今度こそ大蛇の腹へ呑まれに行くのだから、思へば思へば氣の毒なものだなア。あのまア孫公の狼狽へ加減、矢張り孫公だと見えてよう魔胡つく男だ。眞心が足らぬと何遍でも命を取られるやうなお誠めに遇ひまするぞえホ、ホ、。あれまア時々刻々に孫公の顔が青くなつて

来た。まるで八寒地獄にウヨウヨして居る亡者のやうだワ」

「ヤイ女、六尺の男をつかまへて鬪者にしようと思つても、此孫公は些と種が違ふのだ。貴様の様な妖怪變化に誑かされるやうな兄イぢやないから、もうよい加減に諦めてすつこんだら何うだ。夜分の女と云ふものはあんまり氣分のよいものぢやない。用があるなら夜が明けてから出て来い。何なりと聞いてやるわ」

「私は夜鷹だから夜出るのが商賣だよ」

「氣の利かねえ夜鷹だなア。都の中央の細い路次に出るのが貴様の商賣だ。それに人家もなければ商賣も尠いこんな荒野ヶ原へ、假令百晩千晩立つた所で旨い鳥はかかりやせないぞ。こんな所で鼻の下の長い男をちよるまかさうとするのは、恰度山へ魚を捕りに行き、海の底へ猪をとりに行くやうな話だ。お前は餘程どうかして居るねエ。癡狂院代物ぢやあるまいかなア」

「癡狂院でも、天教山でも放といて下さい。それよりもお前の足許に氣を付けなくて駄目ですよ。明日はお前の冥日だから……」

「エ、縁起の悪い事を云うて呉れない。亡者か何ぞのやうに、冥日があつて耐ま

らうか」

「ホ、、、、、お前まへそれでも生いきて居ゐると思おもふのかい。お前まへの魂たましひはとつくの昔むかしに死しんで了しまひ、胴體どうがら計ばかり残のこつて居をるのだよ。云いはば娑婆しやば亡まうじや者だ。冥日めいにちがあるのはあたりまへだよ」

「エ、氣分きぶんの悪いわる夜よさだなア。オイ女をんな、俺おれやもう此處ここから御免蒙ごめんかうむるわ、お前まへ勝手かつてにどこへでも行いつたらよい。餘あまり俺おれの悪口わるくち計ばかりつきよつて業腹ごふはらだから止やめて置おかうかい」

「サア行いけるのなら何處どこなと勝手かつてに行いつて御覽ごらん、お前まへの知らぬ間まにちやんと體からだに綱つなをつけて縛しばつてあるから一ひとつ歩あるいて見みなさい」

「何歩なにあるかいでか、アイタ、、こりや本當ほんたうに縛しばりよつたな。些ちつとも動うごきやしないわ、下くだらぬ悪戲いたづらをする女をんなだなア。サツパリ雁字がんじがら搦しみに知らぬ間あひだに縛しばつて仕舞しまひよつた、こんな無茶むちやな女をんなに出遇であつたのは今日けふが初はじめてだ」

「ホ、、、、お前まへ計ばかりか今いまの人間にんげんに、一ひとり人ひととして女をんなに縛しばられて居ゐない人間にんげんがありますか。何奴どいつも此奴こいつも、執着しふちやくだとか戀こひだとか云いふ怪あやしい代物しろものに、蜘蛛くもに蟬せみがか

かつたやうに捲きつけられて、雁字り捲きにされて居る人間計りがウヨウヨとして居る娑婆ぢやないか」

「さうすると女に縛られたものは俺計りぢやないなア。お前はさうすると些と計り俺にラブして居やがるのだな。好いた同志は毎日毎日、擲つたり、噛りついたり、抓つたりするのを此上なき愉快のやうに感ずるものだが、俺もお前から雁字りに縛られて些とはむかついたが、よく氣を落付けて神直日に見直し善意に解して見れば、餘り腹も立てられまい。却つて有り難いやうになつて来たワイ」

「エ、まア好かんらしい男だこと。お前と云ふ男は、お愛の方の寝顔をちよいと覗き込んで戀の執着をたつた今起しただらう。其執着心が、此私を生んだのだよ。つまり云へば孫公の反映だ。何と云つても内裏だから腹を立てないやうにして下さいネ孫公」

「益々譯が分らなくなつて来た。此奴は本當に化物だなア」

「そりやさうとも、化物に違ひありません。化物の腹から生れた私だもの。烏は烏を生み獅子は獅子を生むのは當然ですよ」

かかる所へ闇を通して幽に宣傳歌の聲が聞え來る。

神が表に現はれて  
戀になやみし執着の

心の雲霧吹き拂ふ  
我は玉治別司

湖の魔神を三五の  
神の教に言向けて

世の禍を悉く  
拂はむとして出でて行く

三五教の孫公は  
心の中の曲者に

とり挫がれて今正に  
闇路に迷ふ憐れさよ

心の中に恐ろしい  
大蛇を宿す身をもつて

どうして魔神を速かに  
服へ和す道あるか

あゝ惟神々々  
憐れな孫公よ孫公よ

一日も早く眞心に  
立ち歸りつつ三五の

誠の教を諾ひて  
夢をば醒せ目を醒せ

唯今其處に現はれし  
怪しの女は何者ぞ

汝が心に潛みたる  
横戀慕と名のついた

八十の曲津の化身ぞや  
一日も早く宣り直せ

汝が姿も見直して  
虎公三公兩侠の

清き御魂に神習ひ  
お愛の方を思ひ切り

心にさやる白山の  
峠を早く踏みしめて

誠一つに進み行け  
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも  
假令大地は沈むとも

大蛇の曲は荒ぶとも  
三五教の神の道

誠一つは世を救ふ  
あゝ惟神々々

神の御言を諾ひて  
玉治別の神司

神に代つて説き諭す  
進めよ進めいざ進め

誠の道に逸早く  
進めや進め湖の傍

大蛇の御魂の亡ぶまで  
心の曲津の失する迄

あゝ惟神々々  
御靈幸はひましませよ

と聞ゆるかと思れば、以前の女の影はいつの間にか煙の如く消えて仕舞ひ、夜嵐冷やかに孫公の顔を撫でて通る。ふと気がつけば孫公は三人の寝て居る四五間許りの傍の芝生に横たはつて居た。

「ア、何だ夢だつたか、しようもない。併しながら夢だとして油断は出来ない。神様が玉治別の名をかりて御注意して下さい。俺もこれで大分に悟る事を得た。あゝ惟神々々御靈幸倍ませよ」  
と云ひながら、拍手を打ち、聲高らかに天津祝詞を奏上する。

(大正一一・九・一六 舊七・二五 加藤明子録)

## 第一章 野宿(一九七五)

孫公が一生懸命になつて夜中に祝詞をあぐる聲に、目を覺まされて起き上つたお愛は、孫公の此姿を見て怪しみ、ツカツカと側に寄つて來た。其時は已に祝詞



を<sup>を</sup>終<sup>は</sup>つてヤツと一<sup>ひと</sup>息<sup>いき</sup>をついた時<sup>とき</sup>である。

「孫<sup>まご</sup>公<sup>こう</sup>さま、もう何時<sup>なんどき</sup>で御<sup>ご</sup>座<sup>ざ</sup>いませうかな。まだ夜<sup>よ</sup>明<sup>あけ</sup>には間<sup>ま</sup>がある様<sup>やう</sup>ですが、えらい早<sup>はや</sup>く目<sup>め</sup>が覺<sup>さ</sup>めたと見<sup>み</sup>えますなア」

孫<sup>まご</sup>公<sup>こう</sup>は星<sup>ほし</sup>月<sup>づくよ</sup>夜<sup>よ</sup>にお愛<sup>あい</sup>の姿<sup>すがた</sup>を眺<sup>なが</sup>めて驚<sup>びつくり</sup>愕<sup>り</sup>し、兩<sup>りやう</sup>手<sup>て</sup>を打<sup>うち</sup>振<sup>ふ</sup>り打<sup>うち</sup>振<sup>ふ</sup>りながら、

「もしもしお愛<sup>あい</sup>さま、其<sup>そ</sup>處<sup>こ</sup>にジツとして居<sup>ゐ</sup>て下<sup>くだ</sup>さい。お前<sup>まへ</sup>さまに來<sup>こ</sup>られると戀<sup>こひ</sup>の

絲<sup>いと</sup>に縛<sup>しば</sup>られて、身<sup>からだ</sup>體<sup>たい</sup>がビクともせない様<sup>やう</sup>になつて了<sup>しま</sup>ひます。もう何<sup>どう</sup>卒<sup>ぞ</sup>々<sup>どう</sup>々<sup>ぞ</sup>彼<sup>あそ</sup>處<sup>こ</sup>で

結<sup>けつ</sup>構<sup>こう</sup>で御<sup>ご</sup>座<sup>ざ</sup>います。何<sup>なん</sup>なりと御<sup>ご</sup>用<sup>よう</sup>を云<sup>い</sup>つて下<sup>くだ</sup>さい。近<sup>ちか</sup>寄<sup>よ</sup>つて來<sup>き</sup>ても私<sup>わたし</sup>はスツパリ

改<sup>かい</sup>心<sup>しん</sup>しましたから、何<sup>なに</sup>程<sup>ほど</sup>可<sup>か</sup>愛<sup>あい</sup>いお愛<sup>あい</sup>さまが秋<sup>しゅう</sup>波<sup>は</sup>を送<sup>おく</sup>つて下<sup>くだ</sup>さつても、孫<sup>まご</sup>公<sup>こう</sup>の鐵<sup>てつ</sup>石<sup>せき</sup>

心<sup>しん</sup>はお生<sup>あ</sup>憎<sup>にく</sup>様<sup>さま</sup>、梃<sup>て</sup>子<sup>こ</sup>でも棒<sup>ぼう</sup>でも動<sup>うご</sup>きませぬぞや。女<sup>をんな</sup>と云<sup>い</sup>ふものは魔<sup>ま</sup>だからな。世<sup>せ</sup>

界<sup>い</sup>中<sup>ちゆう</sup>の男<sup>をとこ</sup>を雁<sup>がん</sup>字<sup>じ</sup>り捲<sup>ま</sup>きにして身<sup>み</sup>動<sup>うご</sup>きもならない様<sup>やう</sup>にする奴<sup>やつ</sup>だからなア。あゝ若<sup>も</sup>し

若<sup>も</sup>しお愛<sup>あい</sup>さま、さう此<sup>こ</sup>方<sup>ちゆう</sup>へ近<sup>ちか</sup>寄<sup>よ</sup>つて貰<sup>もら</sup>つちや堪<sup>た</sup>りませぬわ、何<sup>なん</sup>だかいけ好<sup>す</sup>かない

臭<sup>にお</sup>がしますから……」

と今<sup>いま</sup>見<sup>み</sup>た夢<sup>ゆめ</sup>の受<sup>う</sup>賣<sup>けうり</sup>を一生<sup>いっしやう</sup>懸<sup>けん</sup>命<sup>めい</sup>にやつてゐる。

「ホ、ホ、ホ、あのまア、孫<sup>まご</sup>公<sup>こう</sup>さまの恐<sup>こは</sup>さうな様<sup>やう</sup>子<sup>す</sup>、お前<sup>まへ</sup>さまも男<sup>をとこ</sup>ぢやありませ

ぬか、チツとシツカリなさいませ」

「最後の夢の見直しかいな。同じ様な事を言ひよるワイ」

「これ孫公さま、夢でも見なさつたのか。ほんに氣樂な方ですな」

「氣樂どころか、チツとも寝られないのですよ。お前さまが出て来ては私を罵つ

たり引括つたりするものだから、如何しても寝られやしない。宜い加減惡戯をせ

ずに寝んで下さいな。今晚の中にチツと身體を休めておかないと、明日の言靈戰

に元氣が抜けちやなりませぬからな」

「何とまア譯の分らぬ寢言を云ふ人だ事、チツとシツカリなさいませ」

と言ひ乍らお愛は頬邊を一寸抓つた。

「アイタ、痛いなア。ア、併しながら温かい柔かい白い細い手で抓られるのも、

何處ともなしに愉快なものだ。モシモシお愛さま、一寸も遠慮は入りませぬ。顔

なつと尻なつと腕なつとお前さまに任しますから、何卒自由にして下さい」

「ホ、ホ、これ孫公さま、虎公さまが居られますよ。あんまりの事は云はないで

下さい」

「アア又怪しくなつて来た。如何やら俺の腹の中から再び最前の化女が生れさうになつて来たわい……あゝ惟神靈幸倍坐世。何卒天地の大神様、此孫公が戀の執着心を科戸の風の天の八重雲を吹き拂ふ如く伊吹き拂ひに拂ひ除けて下さいませ、偏にお願い致します」

虎公は此話にフツと目を覺まし、

「お愛お前其處に何して居るのだ。早く寝ないと明日は大活動をせなくちやならないぞ」

「孫公さまが下らぬ事を云つて騒いで居るものですから如何しても寝られないのですよ」

「孫公さま、早くお寝みなさらぬか」

と虎公がきめつける。

「何だか知りませぬが、お愛さまが夢か現か分らないが二度迄も私の側にやつて来て、引張つたり抓つたり意茶つくものだから、チツとも寝られないのですよ。」

チツと虎公さま、女房に説諭をして置いて貰はぬと、色男の孫公も本當に迷惑致

しますわい」

「アハ、、、氣樂な男だなア。……これお愛、孫公さまをよく寝入る様に、お前の乳でも飲まして「寝んね」でも歌つて寝ましてやつて呉れ。俺達やモ一寝入りしたいからな」

「オホ、、、虎公さま、そんな事云つて下さると困りますわ。孫公さまの前で……」

「オツと占めた、御亭主の許可が下つたのだからもう大丈夫だ。これこれお愛さま、遠慮は要らぬ、苦しくない、近うおぢや」

「オホ、、、又女の臭い香がすると御迷惑だから遠慮しておきませうか、なあ、妾は男の側へ寄ると鼻を揞ぢたり、目玉をくり抜いたり、乳を噛み切つたり、抓りたいのが病ですから……それでも御承知ですならお傍へ寄せて頂きませう」

「虎公さまは随分辛抱のいい男だと見えるなア。こんな劍呑な女を如何してまア平氣に一緒に寝て居るのだらう。矢張意茶つかれるのが氣分が好いのかなア」

「虎公さまなら一度だつて抓るの、齧りつくの、そんな亂暴な事はしませぬよ。」

肩かたから足あしの先さきまで撫なでて可愛かあいがつて寝ねかして上あげるのですからね」

「そんなら私もさう願ねがひたいものだなア」

「エ、好すかんたらしい。天あまン若じゃくだから抓つめつたり嚙かんだり、可愛かあいがつてやると云いふのですよ。オホ、、、」

「はい有あ難がたう。それで何なにもかも私わたしの胸むねが開ひらけました。實じつの處ところはお前まへさまが私わたしの顔かほを一寸ちよつと覗のぞき込んで、意い味みありげな笑わらひ様やうをなさつたと思おもひ、此こ奴いつア俺おれにチヨイ惚ぼだなアと早はや合がてん點てんし、それを根ねにしてお前まへさまを密ひそかに戀こひする様やうになつたのだ。併しかし今の言こと葉はによればお前まへさまは此この孫まご公こうに對たいし、吾われ不かん關せ焉えんの御ご心しん底ていだと云いふ事ことが今いま初はじめて分わかりました。是これで私わたしもスツカリ諦あきらめます。何どう卒そ安あん心しんして下くださいませ。此この上うへは決けつして穢けがらしい量りやう見けんは出だしませぬから……」

「吾われ不かん關せ焉えん位くらゐですか。本ほん當たうの事ことを云いへば孫まご公こうさまは鈍どんな男をとこだ、蟲むしの好すかぬ男をとこだと思おもつて居ゐるのですよ。お前まへさまの方ほうから吹ふいて來くる風かぜでさへも胸むねが悪わるいのだもの、本ほん當たうにいけ好すかない野や郎らうだと心こころの底そこから思おもつて居ゐますのよ」

「ハイ、有あ難がたう。ようそこ迄まで嫌きらつて下くださいました。それで私わたしも眞ま人にん間げんになつて助たす

かります。ア、神様、有難う御座います」

と愛想盡かしを云はれて、孫公は心の底から打ち喜び、拍手をうつて大神に感謝の詞を捧げて居る。

三公は又もや目を覺まし、

「皆さま、えらうお話が機んでる様ですが、もう夜明けに間もありますまいな」

孫公「烏羽玉の暗夜はここに晴れ渡り

心の空に照る月の影。

来て見れば白山峠の登り口

登りつめたる戀の曲者。

曲者は今や何處へ去りにけむ

心の空に懸る雲なし。

草原を分けて怪しの物影は

吾を目當に攻め寄せにける。

その影は何者ならむわが胸に

潜み居たりし戀の曲者。

何時迄も胸の惡魔の去らざれば

吾は根底の國に落つべき。

皇神の深き恵みに包まれて

草野にやすく夜を眠りたり。

惟神のまにまに進み行く

大蛇退治の身こそ尊き

虎公とらこう 小夜更さよふけて砧きぬたの聲こゑもとどまりぬ

早くはや寝いねませ孫まご公司じゅうしかいよ

孫公まじこう 『沸わき返かへる戀こひの焰ほのほに包つつまれて

心こころ苦くるしく眠ねむられざりける』

お愛あい 『ほのぼのと東あづまの空そらも白しろ山の

麓ふもとに明あかす神かみの道みち芝しば』

三公さんこう 『騒さわがしき聲こゑ聞ききつけて起おき上あり

四あ邊たりを見みれば戀こひの曲く者せもの』

孫公まじこう 『まごまごと戀こひ路ぢの暗やみをさまよひて

一ひと目めも寢ねずに泣なき暮くらしける。



泣き暮す戀の虜は吾ならじ  
今は昔の三公親分よ

三公 晴れ渡る大空の如きわが胸に  
戀の黒雲かかるべしやは

お愛 人はいざ知らず妾は何處迄も  
戀と道とを立て別け行かむ

虎公 迷ひ行く戀の坂道漸くに  
踏み越えましし三公の君

孫公まごこう 『まごまごと白山しらやまたうげ峠たけの山麓さんろくに

まごつき戀こひの夢ゆめを見みしかな。

夢ゆめに見みて戀こひしきものを現身うつそみの

君きみに添そひなば如何いかに樂たのしき。

まて暫しばし心しん猿意馬ゑんいばは又また狂くるふ

心こころの手綱たづなかたく結むすばむ。

惟かむながら神かみの教をしへの道みちをふみ

戀こひの曲くせもの者き斬きりて屠ほふらむ。

迷まよひけり覺さめけり又またも迷まよひけり

夢ゆめに夢ゆめ見みる浮世うきよなりせば〆

夜よは漸やっやくに白しらみ初はじめた。四人よにんはムツクと起おき谷川たにがはに手水てうづを使つかひ身みを清きよめ、天津あまつ

祝詞のりとを奏上そうじやうし、携たづさへ來きたりし辨當べんたうを食くらひ、赤禿あかはげだらけの白山しらやまたうげ峠たけを登のぼり行ゆく。孫公まごこうは

道々みちみち足拍子あしびやうしを取とつて歌うたひ出だす。

「ウントコドツコイ」きつい坂  
今行く坂は戀の坂

善か悪かは白山の  
峠を渡るわが戀路

知らず識らずに村肝の  
心の曲者跳梁し

お愛の方に目をくれて  
「ウントコドツコイ」きつい坂

及ばぬ事のみ思ひつめ  
心を苦しめ居たりしが

「ウントコドツコイ ハアハアハア」  
油断をすれば危ないぞ

危ない危ない戀の闇  
寝られぬままに起き上り

彼方此方と「ドツコイシヨ」  
夜霧の中を逍遙うて

戀の焰を消すうちに  
ザアザアと音たてて

「ウントコドツコイ」又滑る  
怪しの女が只一人

薄の中から手を伸ばし  
「ウントコドツコイ」嫌らしい

妙な聲をばふりしぼり  
モシモシこれこれ旅の人

「ドツコイドツコイ」私は  
お前に願ひがあります

何卒此方へ来てお呉れ  
お頼み申すと云ふ故に

寝られぬままに「ドッコイシヨ」 孫会社が跟いて行く

やさしい女の顔に似ず 口を極めて荒男

神の司を捉まへて 口を極めて嘲弄する

こりや怪しからぬ女奴と 眼を据ゑて「ウントコシヨ」

睨めば女は打笑ひ 女に「ドッコイ」魂抜かれ

荒野を逍遙ふ「ドッコイシヨ」 腰抜男のお前さま

お愛の方を戀しいと 迷ふ心の執着が

妾の身體を生みました ほんに困つた男だと

散々小言を竝べ立て 孫公凹ます折柄に

何處ともなしに宣傳歌 闇を通して響き来る

「ハアハアハアハア」えらい坂 「如何にも息が絶れさうな」

玉治別と名乗りつつ 孫公司を誡めの

手痛い意見の宣傳歌 こりや堪らぬと首おさへ

眼を閉ぢて居る間に 以前の女は何處へやら

煙けむりとなつて「ドッコイシヨ」  
姿すがたを隠かくした訝いぶかしさ

折をりから吹ふき來くる夜嵐よあらしに  
面おもてを撫なでられ氣きがつけば

執し着ぢやく心の戀こひの犬いぬ  
主人しゆじんの寢ねたのを幸さいはひに

跋扈ばつこつ跳梁てうりやうして居をつた  
あゝ惟かむながらかむながら神々々

思おもへば思おもへば馬鹿ばからしい  
別べつに戀こひしと「ドッコイシヨ」

俺おれは思おもうたぢや無なけれども  
心こころに潛ひそむ曲者くせものが

此この肉體にくたいを左さ右うして  
「ウントコドッコイ ヤットコシヨ」

あんな心こころにしたのだらう  
あゝ惟かむながらかむながら神々々

神かみの尊たふとき御光みひかりに  
心こころの闇やみも晴はれ渡わたり

夜よも白しろ々と白山しらやまの  
峠たうげを越こえてスツポンの

湖うみに潛ひそめる曲津まがつ見みの  
大蛇をろちを言こと向むけ和やはさむと

進すすみ行ゆくこそ樂たのしけれ  
あゝ惟かむながらかむながら神々々

神かみの助たすけを蒙かうむりて  
吾等われら一いつ行かう四よ人にんづれ

協けふしんりくりよく心戮力しんりくりよく「ドッコイシヨ」  
臍ほそを固かためて曲神まがかみの

醜しうの砦とりでに立たち向むかひ  
善言美詞ぜんげんびしの言靈ことたまに

大蛇をろちの靈れいを解脫げだつさせ  
天國淨土てんごくじやうどに救すくひつつ

皇大神すめおほかみの御教みをしへを  
禽獸蟲魚きんじうちつぎよに至いたるまで

開ひらき行ゆくこそ雄々ををしけれ  
あゝ惟神かむながらかむながら々々

御魂幸みたまさちはへましませよ  
」

と歌うたひ乍ながら、四人よにんは漸やつやくにして白山峠しらやまたうげの絶頂ぜつちやうに辿たどりつけり。

(大正一一・九・一六 舊七・二五 北村隆光録)

## 第一二章 自稱神司じしよつかむつかさ (九七六)

拭ぬぐひ四方よもの山野さんやを心地ここちよげに觀望くわんぼうしながら小憩せうけいを試こころみてゐる。  
白山峠しらやまたうげの山頂さんちやうに漸やつやくにして辿たどりついた四人よにんの男女だんぢよは、峰みねの嵐あらしに吹ふかれつつ汗あせを

遙かの東北に當つて、白く光つたものが見えてゐる。それは春公、お常が大蛇に呑まれた思ひ出深きスツポンの湖の一部である。三公はその湖がフツと目につき慨歎措かざるものの如く、

「皆さま、ズツと向ふの方に幽かに白く光つてる所があります。あれが私に取つては、寝ても起きても忘れ難き、兩親の古戦場で御座います……」  
と言つた限り、差俯むいて落涙する。

孫公「なアんだ、あんな小つぽけな湖か。假令一杯になつてゐた所で知れたものだ。今度は神様と一緒にだから大丈夫だ。メツタに呑まれるやうなこたアあります

まい

三公「イエイエ、今見る様な小さい湖水ぢやありません。山に包まれて僅に一部が見えてゐる計りです。目も届かぬ許の大湖水です。何と云つても、ナイル河の水源地ですから、大變なものです。皆さま、是からシツカリ腹帯をしめて行きます。」

孫公「かう云ふ時に本當の宣傳使が一人あると、大變都合が好いだけれどなア」

虎公「孫公さま、宣傳使ぢやなかつたのか」

「宣傳使のお供ですから根っから氣が利きませぬワイ。併しながら其様な名前がなくても心に誠さへあれば、大蛇は十分言向和す事が出来ませう。名は實の實だから、宣傳使の雅號のみでは、決して仕事は出来ませぬよ。先づ心細ければ、あなた方三人が此孫公を何とかして宣傳使に選舉して下さい。さうすれば名實相叶ふ所の大活動をやりますから……」

虎公「名は實の主だから、如何しても名がなくては行くまい。無名の戦になつて了つちやつまらないからなア」

孫公「有難い、サア普通選舉だ。誰も彼も選舉權があるのだから、早く投票をして下さい。併しながら無記名投票ですから、其御考へで願ひます」

虎公「生憎用紙もなければ、投票函もありませぬが、如何したら宜しからう」

孫公「先づ選舉區を第一區、第二區、第三區と分け、私が候補者に立ちますから、どうぞ口頭でも宜しい、早く選舉の開始を願ひます」

虎公「一票に幾ら出しますか。百圓位は安いものでせう。今一寸衆議院に出よう



と思へば、少くても五萬圓、多くても十萬圓は要りますからなア」

孫公「代物は見ての御歸り、選舉して見て値打がないと見たら、御取消になつても差支ありません。そんなら一層の事投票なしに口で言つて下さいな。簡單で物が事が埒よう運びますから……」

虎公「投票を省くなんて、『トヘウ』もない事を仰有いますなア。そんなら虎公が宣傳使の立候補の宣言致しますから、どうぞ皆さま、貴重の一票をお恵み下さいませ。候補者一人では競争者がなくて、選舉もサツパリ張合がない。皆さま何卒私に選舉を願ひます。一票は私の縁故たるお愛さまに願ひませう。さうすればあと一票、三對一によつて、大勝利ですから……」

孫公「困つたなア、三公が投票して呉れた所で、どちらも同點數だ。若しさうなつた時にはどうするのですか」

虎公「年長者を當選者ときめませうかい」

孫公「さうすると、虎公さまは幾つですか」

虎公「あなたよりも二三年古いやうです」

孫公「困つたなア、さうすると戦はずして敗北かなア。エ、残念な、又次期の總選挙が解散があつた時に華々しく名乗つて出る事にしよう。今度は断念致しませう。さうすると虎公さまの一人舞臺だ、假令三公さまが棄權しようが、私が棄權しようが、當選疑なしといふものだ」

三公「コレ孫公さま、飽くまでも選挙場裡に立つて戦ひなさい。三五教には退却の二字はないぢやありませんか。及ばずながら私があなたを選挙します。さうすれば大多数を以て當選疑なしです。一人でも三公だから三票は大丈夫ですよ、アハ、ハ、ハ、ハ」

虎公「全部取消だ。孫公さま、臨時宣傳使となつて吾々を導いて下さい。私は辭退しておきますから……」

孫公「ヤア有難い、そんなら只今より三五教の宣傳使孫公別命だからそのお心組で願ひます。宣傳使になつた祝ひに、一つ此山上で言靈戦をやりませう。政見發表の代りに戦見發表宣傳歌をやりましますから謹聽を願ひます……」。

神かみが表おもてに現あらはれて 賢者けんしやと愚者ぐしやを立別たてわける

人ひとは見みかけによらぬもの 黒姫司くろひめつかさにケンケンと

朝あさな夕ゆふなにボヤかれて 馬鹿ばかな男をとこと言いはれたる

孫公司まごじうつかさも何時いつ迄までも まごまごしてはゐられない

心こころの奥おくのドン底ぞこに 人ひとにみえない智慧ちゑがある

智慧ちゑの光ひかりはいつまでも 隠かくれて消きゆるものでない

袋ふくろの中なかに鋭利えいりなる 錐きりある時はとき「鋭脱えいだつ」し

其鋒銚そのほうばうは現あらはれる 何なんにも白山しらやまた峠つげかと

思おもうて來きたのにこれは又また どうした風かぜの吹ふき廻まはし

月つきにスツポン湖みづうみの 大蛇をろちの奴やつが現あらはれて

三公さんこうの親おやを食くたおかげ 自轉倒島おのころじまから従ついて來きた

孫公司まごじうつかさは選えらまれて 思おもひもよらぬ宣傳使せんでんし

こんな嬉うれしい事ことはない 三公さんこうさまや虎とらさまよ

お前まへは神かみか龍神りうじんか 木この花はな姫ひめか知しらねども

余程身魂の光る奴

三五教の黒姫が

看破し得ざりし孫公の

此神力を認識し

全會一致の勢ひで

選舉したのは偉い奴

お前の様な選舉人

世界に澤山あるなれば

體主靈從の惡政は

全く根絶するだらう

聖人賢人哲人は

野に埋もれて何時迄も

頭あがらぬ今の世に

こりや又如何した幸ひか

孫公別の宣傳使

神力示すはこれからだ

あゝ惟神々々

神は吾等と俱にあり

吾等は神の子神の宮

三公さまが兩親の

命を取つて鼈の

湖にひそめる大蛇奴を

廣大無邊の神力の

備はりきつた宣傳使

孫公別が現はれて

三公虎公お愛をば

御供の神と定めつつ

進み行くこそ勇ましき

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 辭職の出来ない宣傳使

握つた上は放さない 其執着はスツポンが

かぶりついたりたる如くにて 如何しても斯うしても放しやせぬ

三千世界の梅の花 一度に開く常磐木の

松の神代がめぐり來て 世におちぶれた孫公も

雲井にぬき出た白山の 此絶頂で勇ましく

神の使の宣傳使 任命されたる上からは

假令野の末山の奥 虎狼や獅子熊の

狂へる野邊も厭ひなく 心を盡し身を盡し

筑紫の島は云ふも更 常世の國や高砂の

島の奥まで乗込むで 尊き神の御光を

輝き渡すは目のあたり あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

何處ともなく中空より宣傳歌の聲が聞え來る。四人は不審の眉をひそめながら、  
耳をすまして聞いてゐる。

神が表に現はれて

善と惡とを立別ける

善に見えても惡靈

惡に見えても善の魂

心は揆ぢけ智慧曇り

一寸先の分らない

凡夫の身魂が寄り合つて

神の尊き宣傳使

選舉するとは何事ぞ

神の心と空蝉の

人の心は裏表

如何に選舉に當選し

月桂冠を得たとて

神が許さにや眞實の

誠の力は出よまいぞ

あゝ惟神々々

神の心も白山の

此絶頂でいろいと

心を碎き胸痛め

湖水にひそむ曲神の

其猛勢に戦いて

無道の選舉をしたとて

微塵も効力ない程に  
何れも心を取直し

早く誠に立かへれ  
屋方の村の親分と

羽振り利かした三公も  
武野の村の虎公も

貴族生れのお愛まで  
神の教に酔っぱらひ

今は全く山上に  
身魂は墮落して了うた

此爲體でありながら  
大蛇の潜むスツポンの

湖に向つて言靈の  
戦ひせむとは身知らずだ

命知らずの侠客も  
今は命が惜しうなつて

そんな弱音を吹くのだろ  
弱音ばかりか臆病風

此山頂に吹いてゐる  
朝から晩まで偉さうに

肩肱いからし大手ふり  
法螺吹き廻つた男達

何を血迷ひ黒姫の  
愛想を盡かした孫公に

卑怯未練に頼むぞや  
少しは胸に手を當てて

考へ直ししてみるがよい  
吾は玉治別司

神かみに代かはつて一同いちどうに 誠心まことこころで氣きを付つける

あゝ惟かむながらかむながら神々々かみ 御靈幸みたまさちはひましませよ」

と言いつたきり、其聲そのこゑはピタリと止とまる。

四人よにんは聲こゑの出所でどころを求もとめて、彼方あちら此方こちらと谷底たにそこを覗のぞき込こんで見みたが、そこらに人ひとら  
しき者ものの影かげも見みえなかつた。ここに一行いっかう四人よにんは白山峠しらやまたうげの急坂きふはんを東北とうほく指さして下くだり行ゆ  
く。

（大正一一・九・一六 舊七・二五 松村眞澄録）

### 第一三章 山嵐やまおろし（九七七）

白山峠しらやまたうげの絶頂ぜつちやうで

普通選舉ふつうせんきよの其結果そのけつぐわ



あななひけう  
三五教の宣傳使

まごこうわけ  
孫公別と名のりつつ

いきやうやう  
意氣揚々と勇み立ち

かたひぢいか  
肩肱怒らし宣傳歌

うた  
歌うて勇む折柄に

いづこともなく神の聲

たまはるわけつかさ  
われは玉治別司

いっすんさき  
一寸先の見えもせぬ

ぼんぶ  
凡夫の身にて宣傳使

せんきよ  
選挙するとは何事ぞ

はや  
早く心を直せよと

いはれて孫公は悄氣かへり

かた  
肩をすぼめてすたすたと

しらやまたうげ  
白山峠の峻坂を

とうほく  
東北さして下りつつ

あし  
足の拍子を取りながら

「ウントコドツコイ

ドツコイシヨ」  
倒けなよ倒けなよ氣を付けよ

こと  
言あげしながら下り行く。

まごこうわけ  
孫公別は足許覺束なく爪先に力を入れながら、坂道を下りつつ歌ひ出したり。

しらやまたうげ  
白山峠の絶頂で

「ウントコドツコイ  
危ないぞ」

言靈戦に出陣の 其統帥を得むものと

虎、三、お愛の三人が 鳩首謀議の其結果

「ウントコドツコイ」又迂る 俺をば尊い宣傳使

神の使にして呉れた 世の諺にも云ふぢやないか

「ウントコドツコイ」名は實の 寶ではなうて實の主と

瑞の御靈の言の葉を 一同遵奉仕り

互に心を合せあひ 選ぶだ處を「ウントコシヨ」

「ドツコイ」頭の天邊から 玉治別だと云ひながら

雷のやうなる聲をして 「ドツコイ」叱りつけられた

こりや又如何した事だらう 大蛇の奴めが化けて來て

俺等が肝を挫かうと あんな狂言したのだらう

虎、三、お愛の三人よ 必ず心配するでない

曲津の神にだまされて 如何して御用が勤まるか

惡の御靈と云ふものは 隅から隅まで氣を配り

水も漏らさぬ仕組して 手具脛引いて待つて居る

其處の處を考へて 「ウントコドツコイ」 輕々に

進んで行つちやならないぞ 互に足許氣をつけて

大蛇の吐いた口車 石の車に乗らぬよに

注意をせなくちやなるまいぞ さはさり乍ら俺も亦

何だか氣分が悪なつて 「ウントコドツコイ」 張合が

サツパリコンとなくなつた 「ドツコイドツコイ」 待つて暫し

これも矢張神様が 俺等の心をためす爲め

あゝ云ふ手段を取られたか 凡夫の身では何ぢややら

薩張り様子が分らない 唯何事も人の世は

神の心に任すのだ 任せきつたる曉は

如何なる事かならざらむ 大蛇は如何に猛くとも

三五教を守ります 仁慈無限の皇神の

威力に敵する者はない 私は確信ある程に

皆さま心をシヤンと持て  
「ドッコイシヨー ドッコイシヨー」

思うたよりもきつい坂  
「ガラガラガラガラ アイタツタ」

あんまり喋つた天罰で  
「ドッコイドッコイ ドッコイシヨ」

すつてんころりと轉倒し  
強か背骨を打つたぞよ

こいつは耐らぬ「ドッコイシヨ」  
さはさり乍ら「ウントコセ」

今から俺が屁古たれて  
どうして成就するものか

常住不斷に信仰した  
其神力の「ウントコシヨ」

現はれ出づる今や時  
神が表に現はれて

善惡正邪を立て別ける  
其御言葉が實ならば

決して心配「ドッコイシヨ」  
皆さま喜べ要らないぞ

あゝ惟神々々  
國魂神の純世姫

月照彦の御前に  
三五教の孫公が

孫公別と現はれて  
「ウントコドッコイ」選まれて

今は尊き宣傳使  
心を平に安らかに

諾うべなひたまひてすつぼん鼈かめの  
言こと向むけ和やはす神しん力りきを  
神かみの御み前まへに誠まごころ心こころを

湖こ水すゐの大をろち蛇ことごとを悉ことごとく  
授さづけたまへよ惟かむながら神かみ  
捧ささげて祈いのり奉たてまつる

「ウントコドツコイ

ドツコイシヨ」

レコード破やぶりの風かぜが吹ふく

「ウントコドツコイ」

散ちらされな

ウカウカしとると笠かさが飛とぶ

笠かさばつかりか體からだまで

木この葉はのやうに散ちりさうだ

「ウントコドツコイ」

力ちから瘤こぶ

體からだに一面いちめん「ウントコシヨ」

神しん徳とくばかりを充じゅう實じつし

この難なん關くわんをやすやすと

貫くわん通つうさして下くださんせ

偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる

畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる』

と歌うたひながら、風かぜに吹ふかれつつ急きふ坂はんを下くだり行ゆく。

お愛あいの方かたは聲こゑも静しづかに歌うたひ出だす。

熊襲の國に名も高き  
白山峠の峰よりも

譽の高き三五の  
道に仕ふる宣傳使

黒姫さまの供となり  
現はれ來ます孫公が

皇大神の御心も  
悟らせたまはず山の上

上りつめたる慢心の  
雲に包まれ自分より

名さへめでたき宣傳使  
孫公別と名乗りつつ

意氣揚々と勇み立ち  
喜び給ふ折柄に

天津御空に神の聲  
忽ち聞ゆる恐ろしさ

名利の欲にかられたる  
孫公さまは氣が付かず

宣傳使をば笠にきて  
白山峠を下り行く

あゝ惟神々々  
三五教の孫公よ

どうぞ心を取り直し  
執着心を拂拭し

矢張元の孫公で  
大蛇退治に行くがよい

戀路の欲に離れたる  
お前は又もや宣傳の

司つかさの名譽めいよに憧あこがれて  
天地てんちの神かみの許ゆるさない

雅號ががうをたてに進すすみ行く  
其心根そのこころねぞいぢらしき

あゝ惟かむながらかむながら神々々  
お前まへの心こころが一時いつときも

早く誠まことにかへるよに  
お愛あいが祈いのる胸むねの中うち

些ちつとは推量すゐりやうしてお呉くれ  
もうしもうし皆みなさまよ

お足あしに氣きをつけなされませ  
此處ここには蜈蚣むかでが澤山たんと居をる

あゝ惟かむながらかむながら神々々  
神かみの許ゆるさぬ宣傳せんでん使し

大蛇をろちの退治たいぢが何なんとして  
旨うまく出で来るで御座ございませう

私わたしは案あんじて耐たまらない  
左様さやうな野やしん心おこを起おこすより

今いまの閒あひだに改あらためて  
元もとの心こころに立たち歸かへり

天津御空あまつみそらに跼せくまり  
大地だいちに踏ぬきあししながら

謙遜へりくだりつつ三五あななひの  
道みちを歩あゆむで下くださんせ

これぞお愛あいが孫公まごこうに  
對たいする誠まことの親切しんせつよ

悪わるうは思おもうて下くださるな  
あゝ惟かむながらかむながら神々々

御靈幸はひましまして 吾等四人の一行が

神の御前に功績を 太しく立てて故郷に

一日も早く歸るべく 守らせたまへよ天津神

國津神達百の神 國魂神の御前に

誠心籠めて願ぎまつる

と歌ひつつ靜に下り行く。

三公は坂を下りつつ歌ひ出す。

「ヤットコドツコイウントコシヨ」 向ふに見える湖水は

父と母とが其昔 八岐の大蛇の片割と

人の怖るる曲神に 命を取られた「ドツコイシヨ」

思ひ出深き仇の湖水 三五教の御教を

聞いて心を取り直し 心平に安らかに



敵を言向け和さむと 一たん心に決めたれど

どうしてこれが「ウントコシヨ」 恨を晴らさで置かれうか

熊襲の國に名を賣つた 屋方の村の三公が

顔にも係はる一大事 親の敵を前に見て

無抵抗主義の御教が どうして實行出来ようか

思へば思へば腹が立つ 年が年中大蛇奴を

亡ぼしくれむと思ひ詰め 大蛇々と口癖に

「ウントコドツコイ」云ひ通し 世界の奴らが「ドツコイシヨ」

大蛇の三公と呼び出した 皆さま足許用心だ

蜈蚣や蝶蝨がのそのそと 其邊あたりを這うて来る

孫公さまの宣傳使 何程神力あるとても

何だか影が薄いよだ こんな事なら黒姫を

無理に頼んで「ドツコイシヨ」 来て貰つたらよかつたに

後で氣の付く「ドツコイシヨ」 癲癩病者の馬鹿思案

後の祭りまつりや仕方しかたない もうこれからは俺達おれたちは

天地てんちの神かみを一心いつしんに 祈りいのて神かみの御守おんまもり

「ウントコドツコイ」守まもられて 亡ほろぼすよりも道みちはない

あゝ惟かむながらかむながら神々々 純世すみよのひめ姫ひめの御前おんまへに

心こころを籠こめて願ねぎまつる 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも 湖こすゐ水みづの大蛇おほへびは猛たけぶとも

地震ぢしん雷かみなり火ひの雨あめが 一度いちどに襲おそひ來きたるとも

誠まこと一つの言こと靈たまの 御息みいきに大蛇おほへびを言こと向むけて

凱旋がいせんせなくちや「ドツコイシヨ」 數多あまたの乾兒こぶんに三公さんこうの

男をとこが立たたない「ドツコイシヨ」 今迄いままで作つくつた罪惡ざいあくの

報むくいは忽たちまち顯あらはれて 黒姫くろひめさまには見離みはなされ

力ちからの足たらぬ孫公まごこうの 「ウントコドツコイ」手てに餘あまる

勁敵けいてき前まへに控ひかへつつ 進すすみ行ゆくく身みぞ悲かなしけれ

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

今迄いままで盡つくせし身みの咎とがを 直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし

「ウントコドツコイ」宣のり直なほし 許ゆるさせたまへや天津神あまつかみ

國津神くにつかみ達國魂たちくにたまの 御前みまへに願ねがひ奉たてまつる

あゝ惟かむながらかむながら神々々 御靈幸みたまさちはひましませよ

と歌うたひながら下くだり行ゆく。

虎公とらこうは又またもや歌うたひ出だす。

「ウントコドツコイ ドツコイシヨ」 此山道このやまみちは些ちと酷ひどい

うつかりしとると谷底たにそこへ 轉ころむで頭あたまを割わる程ほどに

「ウントコドツコイ」氣きをつけよ 「アイタタタツタ」躓つまずいた

彼方かなた此方こなたに「ドツコイシヨ」 高たかい石奴いしめがゴロゴロと

遠慮えんりよもなしに轉ころげてる こんな手合てあひに出遇であつたら

武野たけのの村むらの俠客けふかくも 到底頭たうていあたまが上あがらない

獅子狼や虎熊や

鬼や大蛇も恐れない

此虎公も「ドツコイシヨ」

此坂道にや耐らない

何時に「ウントコシヨ」

眞逆様に顛倒し

頭を割るか分らない

孫公さまに神徳が

十分に具はり居るならば

こんな心配ないけれど

俄作りの宣傳使

「ウントコドツコイ」鼻糞で

的張つたやうな心持

ま一つ安心出来難い

あゝ惟神々々

師匠を杖につくでない

人をば力に致さずに

誠の神を力とし

「ウントコドツコイ」行くなれば どんな守護もしてやると

大神様の神勅

俺はこれから「ドツコイシヨ」

孫公さまの宣傳使

力になさず村肝の

心の誠を發揮して

威猛り狂ふ曲神の

陣屋に忽ち突進し

勝鬨あげて世の人の

「ウントコドツコイ」禍を わざはひ 根本的に除却して こんぼんてき ぢよきやく

武野の村の侠客と たけの むら けふかく 云はれた譽を彌高に い ほんま いたか

筑紫の島に輝かし つくし しま かがや 三五教の道のため あななひけう みち

盡さにやおかぬわが願ひ つく ねが 完美に委曲に聞し召し うまら つばら きこ せめ

守らせ給へ天津神 まも たま あまつかみ 國津神達八百萬 くにつかみ たちやほよろづ

産土神の御前に うぶすながみ おんまへ 畏み畏み願ぎまつる かしこ かしこ ね

あゝ惟神々々 かむながらかむながら 御靈幸はひましませよ みたまさち

と歌ひながら、漸くにして下り三里の山坂も、其日の眞晝頃麓に下りつきにけり。

（大正一一・九・一六 舊七・二五 加藤明子録）

第一四章 空氣焰（九七八）

一行四人は漸くにしてスツポンの湖水の南岸に辿り着いた。此時已に夜はズツ  
プリと暮れ果て、鬼哭愁々として寂寥身に迫り来る。肝腎の自稱宣傳使孫公別は、  
地震の孫よるしく齒の根をガチガチ云はせ乍ら、蒼白の顔してスクミ上つてゐる。  
岩石も吹き散らすばかりの疾風頻りに吹き来り、其物凄き事例ふるに物なく、孫  
公別は樹の根に確と抱きついて、其身の吹き散るのを辛うじて防いで居る。三人  
も黄楊の木の根元にペタリと平太つて風の過ぐるを待つのみ。  
湖水は俄に沸き返る様な音を立て、ブクブクブクと泡立ち始めた。暗夜なれど  
も湖面の泡立つ色は明瞭に見えて居る。暫らくすると大入道の立つた様に波の柱  
が彼方此方にムクムクと突出し、碎けては湖面に落つる其物音、實に凄じく身の  
毛も竦つ許りなり。湖中の彼方此方より、青赤白黄等の火の玉數限りもなく現は  
れ来り、長い尾を中空に引摺りブーンブーンと呻りをたて、四方八方に向つて突  
進し来る。見ればお玉杓子の様な姿で、玉の處に色々といやらしき凄しい顔がつい  
て居る。此怪物は四人の側に集り来り、頭上を前後左右に飛び廻れども、如何し  
たものか身邊には寄りついて来ない。僅か一二間迄やつて来るのが精々である。

お愛「今晚は妙な夜で御座いますな。大蛇の神さま、色々と玉を現はし、吾々一行の歓迎會を開いて御座らつしやるのでせう。ほんに氣の利いた神さまですこと、オホ、火の玉さまのお蔭でレコード破りの風もスツカリ止まつて了ひました。あの物凄かりしブクブクも水柱の大人道も、何處かへ沈没して了つたと見えます。これも全く孫公別の宣傳使様の御神徳で御座いませう。ねー虎公さま、三公さま、宣傳使の御神徳と云ふものは随分えらいもので御座いますなア」

虎公「大蛇の奴、今三番叟を始めよつた處だ。之からが見物だよ。こんな事はホンの一部分だ。之からが孫公別宣傳使のお骨の折れる處だ。もし宣傳使様、如何で御座いますか。何時迄も木の株に抱きついて居つても木はものを言ひませぬぞ」

孫公別は齒をガチガチ云はせ乍ら、

「いやモウモウモウ タ、大變な事が始まりました。本當に愉快な……事……御座いませぬわい。どうも早神力の持ち合せが……ないものだから、斯んな場合には一寸面喰ふ様な……男では……ありませぬ」

虎公「ハ、ハ、ハ、孫公別様さへ此處に控へて御座れば大磐石だ。なあ三公さま、

貴方も安心でせう。先づ宣傳使に宣傳歌を歌つて頂き、大蛇の奴を言向和して頂

きませうか」

三公「三公（参考）の爲めに一寸宣傳歌を試みて頂きませうか。もしも孫公別  
様、何卒一つ願ひやす」

「これだから【もの】の頭になると責任が加はつて困るのだ。平和の時は大變結  
構な様だが、こんな時に筒先に向けられるのは随分辛いな……オツト待てよ、大  
將は帷幄の中に畫策を廻らすのがお役だ。玉除けになるのは雑兵のする事だ。兔  
も角後は宣傳使が引受けるから、三公さま、一つ初陣をやつて下さい。あの通り  
火の玉が刻々に殖えて来る。愚圖々々して居れば、敵に先鞭をつけられる虞れが  
あるから、一つ若い意氣に先發隊を勤めて下さい。孫公御大の命令だ」  
「是非々々先生に願はなくちや、此戰鬪は駄目です。戦はずして敵を呑むと云ふ  
氣概のある、三五教の宣傳使が神力の試し時だ。さあさあ意茶つかさずにやつて  
下さい……虎公さま、お愛さま、さう願つたら如何でせうかな」  
「無論の事です。先頭に立つて働くから宣傳使と云ふのだ。何卒孫公別様、お願



ひ申します」

「宣傳使様、女神から宜しう願ひ致します。一つ御神力を現はして下さいませ」

「先頭に出ん」から宣傳使と云ふのだけれどなア。えー詮方ない。そんなら一つ千變萬化の言靈の妙用を盡して、あの火の玉を一つも残らず水底に蟄伏させて見せませう」

と、瘦我慢を出し、震ひ聲になり宣傳歌を歌ひ始むる。

神が表に現はれて

千變萬化の言靈で

湖水の大蛇を言向ける

湖水に浮んだ火の玉よ

お前はそれ程三五の

神の教が怖いのか

一聞先迄やつて来て

怖相に怖相に尾を下げて

チツとも寄つて来ぬぢやないか 矢張りお前も智慧がある

神徳高き宣傳使 孫公別の御前と

恐れみ謹み萎縮して 怖々してるに違ひない

善ぜんと悪あくとを立たて別わかける 此この世よを造つくりし大神おほかみの

任よさし給たまひし神かむつ司かさ 善ぜんの身み魂たまを救すくひあげ

悪あくの身み魂たまを言こと向むけて 五み六ろく七しちの神かみの御み世よとなし

神かみも佛ぶつ事じも人にん間げんも 鳥とけだもの獸むしも蟲むし族けらも

草くさ木きの末すえに至いたるまで 神かみの恵めぐみを均きん霑てんし

天あめケ下がしたなる萬ばん物ぶつは 大だい小せう高かう下げの隔へだてなく

機き會わい均きん等とう主義しゆぎをとり 殘のこらず枿ます掛か引ひき均ならし

世よを立たて直なほす神かみの道みち 須しゆ彌み仙せん山ざんに腰こしを掛かけ

良うし金とら神こん鬼じん門きもん神がみ 守まもり玉たまへる世よの中なかぢや

湖こ水すゐに棲すめる大を蛇ろちども 今いまから心こころを立たて直なほし

三あ五な教なひにて名なも高たかき 神しん德とく滿みつる宣せん傳でん使し

孫まご公こう別わけの言こと靈たまを 耳みみをすまして聞ききとれよ

天あめケ下がしたには善ぜん悪あくの 區く別べつも無なければ敵てき味み方かた

等などの差け別ぢめはない程ほどに 迷まよひの雲くも霧きり吹ふき拂はらひ

火玉を鎮めておとなしく 尊き神の御教を

慎み畏み聞くがよい あゝ惟神々々

吾は玉治別の神 「オツトドツコイ」こりや違ふ

黒姫さまの一の弟子 何程強い悪魔でも

假令八岐の大蛇でも ビクとも致さぬヒーローよ

見事甲斐性があるならば 一つ力を出して見よ

孫公別の吹き捨つる 伊吹の狭霧に悉く

木端微塵に踏み碎き 亡ぼし絶やすは目のあたり

之が合点いたならば 心の底から改めて

孫公別の御前に お詫をするが第一だ

これ程事を細やかに 分けて諭してやる事を

聞かねば聞かぬで構はない 俺にも覺悟がある程に

早く返答を聞かせよや 孫公別の宣傳使

國治立大神や 金勝要大御神

神素盞鳴大神の

三柱神を代表し

湖水の底に潛み居る

大蛇の魔神に宣り傳ふ

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と始めは恐相に震ひ聲に歌つて居たが、終ひにはド拍子の抜けた大聲を張り上げ  
歌ひ出す。孫公の歌終るや否や、獅子狼の幾萬匹、一度に呻る様な怪しき聲四方  
八方より聞え來り、青赤黄等の火は彼方此方にペロペロと燃えては消え、燃えて  
は消え、又もや烈風吹き出し大地は震動し、如何ともする術なければ、孫公は再  
び元の檜の樹の根株に確と喰ひつき身を震はし蹲み居る。  
三公は黄楊の木を片手で握り、烈風の中に立ち身體の中心をとりながら湖  
面に向つて言靈を宣り始めたり。

八岐の大蛇の片割れと  
大蛇の魔神よよく聞け

現はれ湖底に忍び居る  
抑も大蛇の三公とは

吾事なるぞスツポンの  
湖水を棲處と致す奴

只一匹も残らずに  
俺の側までやつて来い

吾兩親の敵討ち  
生命を取つて呉れむぞと

心も勇み来て見れば  
子供嚇しの火の玉や

泡立つ波や水柱  
呂律も合はぬ呻り聲

レコード破りの強風に  
地まで揺つて嚇さうと

何程企んで見た處が  
そのやり方は古いぞや

そんな嚇しにビクついて  
人氣の荒い熊襲國の

大親分となれようか  
猪食た犬の腕試し

もう斯うなつて来た上は  
後へは引かぬ俺の意地

さあ来い來れ早來れ  
惜しき生命の取り合ひを

此處にて一つやらうかい  
後には尊い宣傳使

力の餘りに強くない  
孫公別も慄ひつつ

二人の喧嘩を見て御座る  
武野の村の俠客

虎公さまを初めとし

辨才天も恥らふて

逃げ出す様なお愛さま

スツカリ道具が揃うて居る

何を愚圖々々して居るか

早く來つて勝負せよ

生命を捨てた三公は

最早此世に恐るべき

物は一つもない程に

親の敵ぢや早來れ

いざ尋常に勝負しよう

それが嫌なら吾前に

頭を下げて尾をふつて

四つに這うて謝れよ

貴様の頭を三つ四つ

此岩石で打ちたたき

吾兩親の無念をば

晴らして助けてやる程に

早く來れよ曲津神

三公親分が待つて居る

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひ終るや湖面は益々波高く荒れ狂ひ、火の玉は刻々に殖え來り、ブンブンと  
呻りを立て、四人の殆ど身體のとどく處迄、數限りもなくお玉杓子の火の玉攻め

かけ来る其嫌らしさ、實に物凄き光景なりけり。

（大正一一・九・一六 舊七・二五 北村隆光録）

第一五章 救の玉（九七九）

お愛は立上り、宣傳歌を歌う。

豊葦原の瑞穂國 國の八十國八十島は

國治立の御體 神素盞鳴の御靈力

金勝要大神の 御靈の守らす國なれば

此三柱の大神の 御許しなくば何神も

此世に住むべき權利なし 三五教の神司

孫公別に従ひて 吾等は此處に曲神の

曲言まがこと向けて神國かみくにを 清きよく涼すずしく澄すまさむと

現あらはれ出いでし四人連よにんづれ 湖底こていに潛ひそむ曲神まがかみよ

如何いかに勢猛いきほひたけくとも 此この三柱みはしらの皇神すめがみの

許ゆるしなくして地ちの上うへに 如何いかでか安やすく住すみ得うべき

あゝ惟かむながらかむながら神々々かみ 神かみの御靈みたまを蒙かうむりて

一日ひとひも早はやく片時かたときも とく速すみやく三五あななひの

誠まことの道みちの御教みをしへに 服まつろひまつれ醜しこ大蛇をろち

それにつき添そふ諸々もろもろの 百ももの靈みたまに宣のり傳つたふ

あゝ惟かむながらかむながら神々々かみ 御靈みたま幸さちはひましませよ』

と簡かん單たんに言靈ことたまを打うち出だしたるに今迄いままでの烈風れつふうは其勢そのきほひを減げんじ、猛獸まうじうの唸うなり聲こゑは漸やうやく低ひく

遠とほく去さり行ゆき、湖こ面めんに浮うかびし諸々もろもろの怪物くわいぶつは、時々じじこくこく刻く々に姿すがたを減げんじたれども容よう易いに

全滅ぜんめつするには到いたらざりければ、茲ここに虎公とらこうは捩鉢ねぢはち卷まきをしながら、嚴いづの雄健をたけびふみた

けびつつ、大音聲だいおんじやうを張はり上げて、詞涼ことばすずしく言靈ことたまを發射はつしやしたり。



三千世界の梅の花  
一度に開く時は今

大蛇の神よよつく聞け  
【きさま】は餘程太い奴

太いばかりか長い奴  
エチプト都に名も高き

春公お常の兩人を  
勿體なくも呑み喰ひ

平氣の平左で此湖に  
住居するとは何のこと

天地の神を畏れぬか  
此處に現はれ來りたる

三公さまは春公や  
お常の方の生み給ふ

珍の尊き御子なるぞ  
汝心のあるならば

早く姿を現はして  
吾目の前に出で來り

三公さまに打向ひ  
前非を悔いて詫をせよ

武野の村の男達  
虎公さまとはおれの事

虎狼や獅子熊も  
おれの名を聞きや驚いて

小さくなつて逃げて行く  
お前も同じ畜生の

醜き體を持つ上は  
俺に恥らひ底深く

姿すがた隠かくしてゐるのだら  
そんな氣き兼かねは要いらぬ故ゆゑ

早はやく此この場ばに現あらはれて  
善ぜん惡あく正せい邪じやの大道だいたうを

悟さとりて天津あまつかみ神國くにの  
榮さかえを永と久はに樂たのしめよ

朝あさひ日は照てるとも曇くもるとも  
月つきは盈みつとも虧かくるとも

大蛇をろちはいかに猛たけるとも  
三五あななひけう教おほみちの大道おほみちに

仕つかへまつれる吾われわれ々は  
いかで初しよしん心を變へんずべき

誠まこと一つの言こと靈たまを  
直なほひ日の銃つつにつめ込こみて

忽たちまち打出うちだす宣傳せんでん歌か  
天てんは轟とどろき地ちはゆるぎ

大海おほつなばら原なみは浪なみたけり  
山やまは忽たちまち裂さけてゆく

此この神しん力りきの活くわつ動どうを  
見みない間あひだに一刻いつこくも

早はやく心こころを改あらためて  
善ぜんの大道おほちに歸かへるべく

誓ちかひを立てよ大蛇をろちがみ神かみ  
三五あななひけう教せんの宣傳でん使し

黒くろ姫ひめ司つかさに從したがひて  
熊くま襲まその國くにへ渡わたり來きし

孫まご公こう別わけを始はじめとし  
三さん公こう、お愛あいや虎とら公こうの

四魂しこんの身魂みたまが今いま此處ここに 現あらはれ來きたり言靈ことたまの

大戦おほたたかひを宣示せんじする あゝ惟神かむながらかむながら々々

神かみの心こころを諾うべなひて かかる小ちひさき湖うみを捨すて

廣ひろき尊たふとき限かぎりなき 天津あまつみそら御空かみくにの神國かみくにへ

心こころも廣ひろく昇のぼり行ゆけ あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたまさち幸さいちはひましませよ

と歌うたひ了をはる。されど如何どうしたものか、湖面こめんの怪くわいはいろいろと形かたちを變へんじ、蛸たこ入道にふだうや

曲鬼まがおに、四よつ目め小僧こぞうなど數かず限かぎりなく浮うかび來きたり、お玉杓たまじやくし子の形かたちせし火玉ひだまは幾いくひやくせん百千ひやくせんとも

なく唸うなりを立たてて土手どての如ごとく集あつまり來きたり、四人よにんの男女だんぢよを十重とへ二十重はたへに取卷とりまきぬ。

四人よにんは青臭あをくさい何なんともいへぬ臭氣しうきに鼻はなをつかれ、胸塞むねふさがり、腹痛はらいたみ、眼まなこくらみて、

今いまや如何いかんともする事能ことあたはざる迄弱までよわり切きつてゐる。

何時いつの間まにやら夜よはカラリと明あけて、湖面こめんより現あらはれ來きたりし怪物くわいぶつは一つ減へり二ふた

つ減へり、太陽たいやうの光線くわうせんが地上ちじやうを照てらす時ときには、怪物くわいぶつの姿すがたは殘のこらず消きえ失うせて、湖面こめんは

只紺碧の波が悠々と漂ひゐるのみ。

四人は池の岸邊に端坐し、昨夜の怪を話し合ひながら、湖水の水に手を洗ひ身を清め、次いで天津祝詞を奏上し終る時しも、木の茂みを分けて此場に現はれ來る一人の宣傳使あり。よくよく見れば玉治別命なり。孫公は飛立つばかり打喜び、コレハコレハ玉治別さま、幾回となくお聲は聞かして頂きましたが、お目にかかるは今が始めて、ようマア來て下さいました……モシモシ三人の方、これが驍名高き三五教の玉治別の宣傳使で御座います」

お愛、三公は嬉し涙にくれながら、玉治別に向つて跪き敬意を表してゐる。

私は玉治別です。皆さま、随分能く言靈がころびましたなア。大蛇の神、随分いろいろと面白い藝當を見せてくれたでせう」

私は虎公でござす。あなたは夜前の光景を御存じで御座いましたか」

ハイ白山峠を一目散に駆け下り、先へ廻つて此森林に身を潜め、あなた方の言靈戦を面白く観覽して居りました。大變危ない所迄行ききましたなア」

モウ少しの事で火の玉の鬼にくつつかされる所でしたが、不思議にも三尺ばかり

近寄つて、それよりはよう寄りつかかなかつたのです。あれだけの勢で如何してマア、もう二三尺といふ所が寄りつけないのでせうか」

「あなたの靈衣の外迄寄つて來たのですよ。靈衣の威徳に恐れて、夫れ以上は近寄れなかつたのです。さうして大蛇の奴、まだまだエライ企みをして居つた様ですが、私は此木蔭より湖面に向つて鎮魂をして居りました。それが爲に猛烈なる大蛇の幕下、此山林に横行する虎、獅子、熊、狼なぞの猛獸も、害を加ふるに由なく、何れも遠く逃げ去つて了つたのです。さうして孫公さまは孫公別とか云ふ立派な宣傳使になられたさうですなア」

「ハイ、イヤモウ一寸臨時に頼まれましてやつて見ました。併し乍ら餘り甘く行きますせぬので宣傳使といふものは辛いものだどホトホト感心致しました。玉治別様がお越しになつたのを幸ひ、私は只今より孫公別の宣傳使を返上致します。どうぞお受取り下さいませ。イヤもう中々骨の折れた事で御座いました」

「アハ、ハ、ハ、誰に宣傳使を命ぜられたのですか。黒姫様からでも假りにお貰ひになつたのですか」

「イエどうしてどうして、ここは共和國で御座いますから、國民一致選舉の結果、推されて宣傳使になつたので御座います。イヤまことにモウうすい目に會ひました」

「サア皆さま、此處に居つても仕方ありません。此湖水には大きな浮島が三つ四つありますから、そこ迄行つて休息を致し、今宵は其島に渡り、一つ言靈戦をひらき根本的に大蛇の神を言向和せませう。皆様サア参りませう」

と先にたつて湖畔を辿るを、四人はハツと胸撫でおろし、元氣頓に加はり、後を慕うて従ひ行く。

(大正一一・九・一六 舊七・二五 松村眞澄録)

## 第一六章 浮島の花 (九八〇)

東西二十里、南北三十里に亘る此湖水の中に三個の浮島ありて、時々刻々に其

位置みちを變へんじ、浮草うきぐさの如ごとく漂ただよへる奇妙きめうなる島しまなり。  
金扇きんせんを開ひらき、打煽うちあふぎながら差招さしまねく。

玉治別たまはるわけは此島このしまを近ちかく引寄ひきよせむと、

浮島うきしまにこみませる神かみよ心こころあらば

寄より來きたりませわれはあふがむ。

水みづの面おもに輕かるく浮うかべる此島このしまは

如何いかなる神かみのすみかなるらむ。

島影しまかげにかくれひそめる曲神まががみを

神かみの御稜威いづに救すくひ照てらさむ。

現うつし世よも亦また幽世かくりよも神かみの世よ

皇大神すめおほがみのしらす御國みくにぞ。

國くに治立はるたち神かみの命みことの伊吹いぶきより

現あらはれますかあはれ此島このしま。

玉たまの緒をの命いのちの限かぎり玉治別たまはるわけは

汝なを救すくふべくここに來きたれり。

玉たま治はる別わけ神かみの命みことは素す盞さ鳴のを

神かみの伊い吹ぶきを受うけつぎて來きし。

惟かむ神ながらの誓ちかひの深ふかければ

如何いかなる曲まがも救すくひ玉たまはむ。

鬼おに大を蛇ろち虎とら狼ほや獅しか子ま熊くまも

神かみの水い火きより生うまれたる御み子こ。

われは今いま神かみの御み言ことを蒙かかりて

汝なれ救すくはむとここきたに來きたれり。

三あ五なの神かみの教をしは世よを救すくふ

誠まこと一ひとつまの玉はる治わけ別なりなり。

わが魂たまは如に意よの寶ほう珠しゆと輝かがきて

うみの底そこ迄まで照てらし行ゆくなり。

湖う底なに潛ひそみ隠かくる醜しこ神がみも



浮かして救ふ神の正道。

浮き沈み交々来る人の世も

神に任せば永久に榮えむ。

スツポンの湖の底ひは深くとも

神の恵の深きに若かず。

いざさらば玉治別が言靈の

嚴の伊吹を開き見むかな。

開け行く御代に扇の末廣く

榮え榮えよ湖の底まで。

三五の神の教の孫公が

神の司と詐りしはや。

詐りのなき世なりせば斯くばかり

神は心を痛めざらまし。

あゝ神よ普く世人を救へかし

湖うみの底そこなる大蛇をろちの末すゑまで。

鬼おに大蛇をろち醜しこの猛たけびの強つよくとも

玉たま治はる別の魂たまに照てらさむ。

曲まが神かみも皇すめ大神おほかみの御み靈たまなり

夢ゆめおろそかに扱あつかふべしやは。

來きて見みれば此こ處こに四よ人にんの神かみの子こが

力ちから限かぎりに言こと靈たま宣のり居をり。

言こと靈たまの曇くもりはいよよ深ふかくして

湖うみの底そこまで通とほらざりける。

八やち千ひろ尋ひろの底そこに潜ひそめる曲まが津つ神かみも

天あま津つ日ひ影かげは仰あふぎ見みるらむ。

松まつの島しま竹たけの島しまより梅うめの島しま

三みつの御み靈たまの姿すがたなりけり。

素す盞さ鳴の神かみの伊い吹ぶきの清きよければ

わが言靈も澄みて鳴り鳴る。

なりなりてなり餘りたる天教山の

神の御稜威ぞ尊かりけれ。

木の花の咲耶姫神現はれて

曲に惱める人を救はず。

何事も神の心に任しなば

世に恐るべき「もの」はあらまし。

千早振る古き神代の昔より

神の心は變らざりけり。

火と水は古き神代の昔より

色も變らず味も變らず

玉治別はかく詠ふ折しも、湖面に浮べる美はしき一つの島、言靈の威力に感じ  
てや悠々として湖畔近く寄り来る。近寄り見れば、意外なる廣き浮島なり。玉治

別は先頭に立ち、此浮島に渡らむとする時、いづくよりともなく聲ありて、

待て暫し玉治別の神司

此浮島は曲の變化ぞ。

美はしき松生ふ島と見せかけて

惱まさむとする曲の醜業。

村肝の心を配れ五柱

曲の集へるこれの湖。

素盞鳴の神の尊の生御靈

われは言依別の神ぞや。

言依別神の命が現はれて

玉治別に力を添へむ。

烏羽玉の闇夜をてらす日出別

神の命も今ここにあり。

木の花姫神の命の生御霊

蚊取の別もかくれ來にけり。

惟神の御靈の幸深く

湖底までも照らし行くなり

と、何處ともなく中空より聞え來る。

玉治別はハツと頭を下げ、拍手再拜、神恩を感謝し、寄り來る松島に向つて、

聲も涼しく生言靈をうちかけたり。

神素盞鳴大御神

木の花咲耶姫神

其生靈と現れませる

蚊取の別の宣傳使

瑞の身魂の生御霊

言依別の神司

日出別の神人が

吾等一行の言靈の

戦を守り助けむと

天空高く翔らせて

くだり玉ひし尊さよ

あゝ惟神々々

神の守りは目のあたり

玉治別は勇み立ち

吾言靈のつづく丈

誠一つを楯となし

仁慈無限の大神の

深き心を四方の國

青人草は云ふも更

これの湖水にひそみたる

大蛇の末に至る迄

救ひ助けでおくべきか

今浮島と現はれし

醜の大蛇よよつく聞け

神の道には塵程も

詐り汚れなきものぞ

清けき島と見せかけて

吾等を誑かり惱めむと

謀りに謀る邪曲の

汝の心ぞ憐れなり

あゝ松島と現はれし

醜の靈よ今よりは

神にうけたる魂を

教に清き湖に

洗ひ清めて天地の

神のよさしの瑞御靈

元の姿に立ち歸れ

いかなる清き靈でも

曇れば石に若かざらむ

たまはるわけ  
玉治別が眞心を

こめて汝を諭すなり

あゝ惟神々々

神の大道に早歸れ

かみ  
神に歸りし靈ならば

祈らずとても皇神は

なんぢ  
汝が罪を赦しまし

生命と榮光と歡喜に

み  
充ち足らひたる神國に

安く救はせ玉ふべし

たまはるわけ  
玉治別の宣傳使

言靈ここに宣り了る

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひ了るや否や、今迄目の前に現はれたる松島は、グレンと顛覆した途端に、  
白と赤とのダンダラ筋の鱗を湖面にさらし、見る間に荒波を立て、湖中深く沈み  
ける。其光景は實に凄じきものにてありき。

又もや一つの島、悠々として此方に浮び来る。よくよく見れば、島一面に黒き  
細き竹が密生してゐる。其竹の間より花を欺く妙齡の美人、三柱現はれ、優しき

手をさし伸べて、早く來れと、口には言はねど、其形容に現はし、手招き頻りなり。玉治別は以前の松島に懲りて、容易に動かず、兩手を組み、此島に向つて鎮魂を修しければ、島は追々湖畔に近より來り、以前の女神は竹藪をぬけ出で、浮島の水打際に立ちて、ニコヤカに玉治別一行の姿を見つめたり。

玉治別 竹島に乗りて寄り來る神人の

姿を見れば心榮えぬ。

さりながら如何で心を許さむや

われ松島の怪しきを見て。

怪しきはこれの竹島いかにして

三人乙女の現はれにけむ。

素盞鳴神の尊の生みましし

三つの御靈に似ましけるかも。

小波の中に漂ふ竹の島



三人乙女の影美はしも  
『

お愛は又詠ふ。

有難やあら尊やと伏し拜む  
『

神の姿の美はしき哉。

素盞鳴神の尊の分御靈

今わが前に現れましにけむ。

惟神神の大道を踏みしめて

瑞の御靈の道を守らむ。

三つ御靈、五つの御靈と相並び

守らせ玉ふ筑紫の神國。

天教山尾の上を降りし八島別

神の命のわれは娘ぞ  
『

と歌ひ終り、三人の女神に向つて伏し拜む。女神の一人は聲も淑やかに、

「真心をつくしの島の此湖に

世人救ふと来ります君。

八島別神の命の御裔ぞと

聞くわれこそは嬉しかりけり。

われこそは神世を松の姫命

汝が心の榮えまちつつ。

榮えゆく神の御國に末永く

いや榮えませ愛子の君よ」

お愛「有難し瑞の御靈の現はれて  
わが身の曇り晴らし玉へる。」

虎若彦夫の命をわが爲に  
彌永久に守り給はれ

次なる女神又詠ふ。

愛子姫汝が命は建日向

別の命の珍の御子かも。

八島別神の命は天教の

山に登りて榮えましけり。

敷妙の神の命の汝が母は

今ヒマラヤの山にましける。

ヒマラヤの山より高き親の恩

ゆめゆめ忘れ玉ふまじきぞ

お愛、これに應ふ。

☐ 敷島の大和心のあらむ限りは

神の大道に進みて行かむ。

父母の神の命の御心に

反きし事の歎かはしきかも。

惟神のまにまに進み行く

わが宿世こそ不思議なりけり。

久方の雲井の空を立ち出でて

武野の鄙にわれは暮しつ

☐ 三人の女神又詠ふ。

☐ 三五の神の教の孫公司よ

大蛇の曲は消えうせにける。

いざさらば心の大蛇を言向けて

誠の道に進ませ給へ。

惟神神の屋方の三公よ

汝が父母は神國にあり。

世の中に神の御目より眺むれば

仇も味方もなきぞ尊き。

此湖に汝が仇のひそむとは

よくも心の迷ひしものよ。

村肝の心の雲を吹き拂ひ

照らせたき月の月の教を。

玉治別貴の命の神司

とく行きませよ火の國都へ。

火の國の都の空に黒雲の

かかるは忌々しとく進みませ。

いざさらば三人乙女は立ち去らむ

五人の人よすこやかに坐せよ

といふかと思れば、島諸共に何處へ行きけむ、跡形もなく、あとには紺碧の湖面に、波穩かにうねりあるのみ。

是より玉治別一行は此湖の曲津神を歸順せしむべく、皇大神に請ひのみまつり、一日一夜祈願をこらせば、忽ち湖水は二つに分れ、美はしき女神の姿となりて五人に無言の儘、恭しく拜禮し終り、直ちに雲を起し、悠悠として天上高く昇り行けり。これは此湖にひそみし巨大なる三頭の大蛇、神の靈徳に依つて三寒三熱の苦をのがれ、忽ち美はしき女神の姿と化して、天國に救はれたるなりき。

ここに玉治別は一行と共に、再び白山峠を越え、熊襲の國の三公が館に立寄り、一夜を明かし、急いで火の神國さして進み行く。惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・九・一六 舊七・二五 松村眞澄録)

第三篇 火の國都

第一七章 霧の海（九八一）

青葉は薰り、霞は迷ふ荒井ヶ嶽の絶頂に腰打かけて、四方を見はらし、雑談に耽つてゐる三人の男女がある。餘り風はなけれども何となく朝の空氣は涼しい。彼方此方に煙ともつかず、霧ともつかぬ靄が大地一面に閉ぢ込め、其中より浮き出た様にコバルト色の山嶽が現はれてゐる。

「モシモシ黒姫様、何とない絶景でせうか、日中は随分苦しいですが、斯う朝霧に包まれて、涼しい空氣に當り、四方を見下す氣分は、まるで地上の一切を掌握した王者の様な雄大な氣分が漂うて來るぢやありませんか」

「實に雄大な景色ですなア。火の國の都はどの邊に當りますか」

「これからズツと西に、うす黒く浮き出た様な山があります。それが火の國の

都みやこの西にしに聳そびえてゐる花見ヶ嶽はなみがだけと云いつて火の國くに第一だいいちの名山めいざんで御座ございますよ。あの東ひがしに見みえるのが火の國くにヶ嶽がだけ、其その少し北きたへよつてゐる絶頂ぜつちやうの少し浮ういて見みえるのが向日山ふやま、それからズツと北きたにうすく霧きりの中なかから覗のぞいてゐるのが白山峠しらやまたうげです。其外そのほかの山々やまやまは全部ぜんぶ霧きりの海うみに沈没ちんぼつして居をりますから見みられませぬ。此霧このきりがサラリと晴はれようものなら、それこそ天下てんかの壯觀さうくわんです。花頂山くわちやうざん、天狗ヶ嶽てんぐがだけ、越こしの山やま、春山峠はるやまたうげ、志賀しがの山やまなどと、随分ずぶん立派りつぱな青山せいざんが點々てんてんしてゐます。其間そのあひだを縫ぬうてゐる火の國くに川がはは、天あめの棚機たなばた姫ひめが布ぬのを晒さらしたやうに蜿々えんえんとして火の國くにの原野げんやを流ながれ、えも言いはれぬ光景くわうけいです。さうして西南せいなんに當あたつて龍の湖たつうみといふ随分ずぶん大きな湖水こすゐがありますが、それも生憎あひにくかすみ霞かすみの爲ために包つつまれてゐます。それから火の國くに都みやこの名物めいぶつ、五重ごぢゆうの塔たふが霧きりのない時ときは、うつすらと目めに映うつります。それを見みる度たびに、何なんともいへぬ氣分きぶんになつて、眠ねむたくなりますよ。』

「徳公とくこうさま、随分ずぶんあなたは地理ちりに詳くはしい方かたですなア。さう云いふお方かたに案内あんないをして貰もらへば大丈夫だいぢやうぶですなア。』

「乍併しかしながら此荒井峠このあらゐたうげは其實そのじつ、御代ヶ嶽みよがだけといふのですが、いつも山賊さんぞくが出て荒あらつぽい事こと



をするので、誰いふとなく荒井峠と綽名がついたのです。一名は生首峠とも云つて、此峠には生首の絶えた事のないといふ危険区域です。此徳公は地理には精通し且豪膽者だといふことを、三公の親分が知つてゐますから、拔擢して御案内に立てと、命じたのですから、何事があらうとも、徳公のある限り大丈夫ですから御安心なさいませ。假令泥棒の千匹萬匹、束になつて押し寄せ來るとも、敵一倍の力を發揮し、縦横無盡に斬り立て薙ぎ立て追ひ散らし、敵を千里に卻けて、御身の御安泰を守ります」

「オホ、随分口の勇者ですなア」

「ソラさうですとも、言靈の幸はひ助け生くる神の國ですもの、勇めば勇む事が出來てくる、悔めば悔むことが出來てくるのは天地の眞理、言靈學上の本義ですから、力一杯強いことをいつて、荒井ヶ嶽の曲神を慥伏させる徳公が一厘の仕組、實に勇ましき次第なりけりと言ふ所ですわい、アハ、アハ、」

「オホ、元氣な徳公さまだこと」

「オイ徳、モウ夜が明けてゐるぞ。何寢言を云つてゐるのだ。一つ手水でも使つ

て来い<sup>こ</sup>」

「オイ久公、貴様こそ寢言を云つてるのだらう。さうでなくちやそんな馬鹿な事が云へるかい。よく考へて見よ。こんな高山の絶頂に、手水を使へといった所で水があるかい。それだから貴様は寢言を云つてると云ふのだ」

「形體ある水で使へと云ふのぢやないよ。無形の清水で手水を使へと云つたのだ。言靈の幸はひ助け生くる國だから、俺がかう云つたが最後、此山頂から俄に清水が滾々として湧き出すかも知れないのだ。餘り茶々を入れて呉れない」

「茶々を入れと云つたつて、わかす水もないぢやないかい」

「俺が一つ魔法瓶から茶々を出して吞ましてやらうか、それツ！」

「といひ乍ら、前をまくつて、徳公の方に向つて龍頭水の如く鹽水を噴出する。」

「エ、汚ねえ事をすな。此親分にして此乾分あり。いつも下らぬ事ばかり見聞してゐるものだから、そんな無作法な事を平氣でするのだ。山には山の神さまがあるぞ。すべて山の頂きは人間に例へたら頭も同様だ。頭に小便をひりかけるとはチツと無道ぢやないか」

「俺のは小便ぢやない、バリと云ふのだ。餘り貴様がイ【バリ】よるから、一つ【バリ】水をさして温めてやらうと思つたのだ。餘りメートルが上りすぎて居るからなア。【バリ】の洗禮を施して貴様の心を、サツパリ荒井峠だ、ウツフ、フ、フ、フ」

「黒姫さま、常の習ひが他所で出るとか云ひまして、日常の教育が不用意の間に現はれるものですなア。本當に仕方のない奴です。虎公親分も斯んな代物を飼つて居るのは随分大抵ぢやありませんか」

「コラ黙つて居れば、口に番所がないと思つて、非常に【バリ】嘲弄を恣にしよる。モウ承知せないぞ」

「貴様は貴様の方から【バリ】かけたぢやねえか。俺が【バリ】するのは當然だ。これでも三公の身内に於ては、徳公と云つて【バリ】バリ者だから、グツグツ吐すと笠の臺が洋行するやうな目に會はしてやらうか」

「煩雜な議論をして居るよりも、手取早く自由行動だ。サア來い勝負！」

「ハツハ、ハ、ハ、【キウ】キウ取つつめられ、【キウ】策を案出して、【キウ】に

威張り出しよつたなア、マアちつと冷静にものを考へて見よ。親分同志は和解してゐるぢやねえか。「ワカ」い者同志が斯んな所で喧嘩しちや濟まねえぞ、此處に三五教の宣傳使が見て御座る。無抵抗主義を貴様は何と思つてゐるかい」  
「モシモシお二人さま、どうぞ争ひはやめて下さい。見つともないぢやありませんか」

「徳別「久」行列車が黒姫オツトドツコイ、コリヤ失敬、黒煙を吐いて、火の國の大原野を疾走する所ですからなア、アハ、ハ、ハ、」

「久々如律令、とうかみゑみため、拂ひ玉へ清め玉へ、南無惟神靈幸倍坐世、一時も早く「徳久」列車が勝利の都へ安着致しまする様、歸命頂禮、願望成就、無上靈寶、珍妙如來、守り玉へ幸はひ玉へ、ウツフ、ハ、ハ、」  
斯かる所へ四五人の男、一人のかよわき女を伴ひ急坂を登り來る。  
「いよいよ泥公の御出現だ。」

此山働く泥棒が

長い大刀振りまはし

オイオイ貴様は旅の奴　　お金をスツカリおれの前  
 出さぬかコリヤどうぞや　　出さぬと云つたら此通り  
 おどせば久公は泣き出し　　金を出せなら出しもする  
 供をせいなら供もする　　命ばかりはお助けと  
 云うても歸らぬ久公を　　憐れや泥棒がバツサリと  
 斬つてすてたる恐ろしさ　　あゝ惟神々々  
 叶はぬならば久公よ　　一時も早く逃げ出せよ  
 三十六計の奥の手は　　逃げるにしくはない程に  
 かけがひのない其命　　もしもバツサリやられたら  
 貴様の内のおなべ奴が　　吠面かわいて喧しう  
 近所に迷惑かけるだる　　アハ、、、、アハ、、、、

コリヤ徳、何を吐きよるのだ。泥棒が怖くつて侠客が出来るかい。おれを誰だ  
 と思つてゐるのかい。蟒の久公と云つたら俺のことだぞ。昔は白山峠に岩屋戸を

構へ、七十五人の乾兒を引きつれ、往來の人間を眞裸にし、經驗をつんだ惡逆無道の蟒の久公の成れの果てだ……と云ふのは俺ではない。其久公の名をあやかつた新久公だから、チツとは泥的の匂ひ位は保留してるつもりだから、餘りバカにして貰ふまいかい」

五人の男は久公の法螺を聞いて、本當の泥棒の出現と思ひ、顔色をサツと變へてゐる。一人の女は度を失ひ、

「あゝ如何しませう、泥棒が出ました。兄さま助けて下さいな」

男「人間は覺悟が第一だ。荒井峠に山賊が出るから、モウ少し遅く、夜が明けてから登らうと云つたのに、貴様が喧しく急き立てて夜中立をして來たものだから、こんな怖い目に會ふのだ。これも自業自得とあきらめて眞裸となり、命丈助けて貰ふやうにするのが第一の上分別だ。オイ皆裸になれ、泥公の方から請求されない間に綺麗サツパリとおつ放りだす方が得策だ。人の性は善だから、下着の一枚位は返してくれるかも知れぬからのう」

と小聲に一同に向つて囁いてゐる。久公は此囁き聲はチツとも耳に入らなかつた。

餘りの驚きに耳が鳴つてみたからである。

男「私は火の國の者で御座いますが、俄に急用が出来まして、男女六人連れ、此坂を越えて参りました。どうぞ荒いことをせないやうに頼みます。其代りスツカリ着物を脱いで渡しますから……」

「お前は人の着物を脱がすのが商賣だから無理もないが、どうぞ今日は日曜にしてくれ、頼みぢや。三五教の黒姫さまのお供をして火の國へ行くのだから、ここで眞裸にせられちやア、本當に迷惑だからなア。一枚だつて渡すこたア出来ないから、どうぞ諦めて下さい。それでも男一匹の侠客だから、裸一貫の大男だから……」

男も亦驚きの爲に耳もろくに聞えなくなつてみた。

「エ、何と仰有います。一枚も渡さぬと仰有るのですか。せめて下着なつと下さないな、裸一貫とか二貫とか仰有いましたが、裸になつちや道中が出来ませぬ、又こんな孱弱い女も居るのでから、そこはお慈悲で見のがして下さいませ」

外五人の男女は目をふさぎ、耳をつめ坂路にふるひふるひ蹠んでゐる。

「アハ、ハ、ハ、臆病者同士の寄合ぢやなア………コレコレ旅の御方、吾々は決して泥棒ぢやありません。大蛇の三公の乾兒で、弱きをくじき、強きを助けると云ふ都合の好い侠客だから、マアマア安心なさい。命を取つても着物迄取らうとは云はねえから安心しなせえ。今の人間は體よりも着物を大切がるから大切な着物の方を助けて上げやせう、アハ、ハ、ハ、」

「コレコレ徳公、久公、冗談もいい加減にしておきなさい。旅のお方が本當の泥棒だと思つて、あの通り慄うてゐられるぢやありませんか。そんな肚の悪いことを云ふものぢやありませんよ」

「いかにも御尤も千萬、恐れ入谷の鬼子母神、呆れ蛙の面に水、つらつら思ひみれば、見ず知らずの旅人を捉へ、いらざる嚇し文句を竝べたて、誠に以て不都合千萬、平に御容赦願ひ上げ奉ります………コレコレ旅のお方、吾々は決して泥棒ぢやありません。三五教の信者だから安心して下さい。實は此方の方から、お前さま達を泥棒の群だと早合點して、雨蛙の胸元のやうに、ペコペコとハートに波を打たせてゐた餘り強くない代物ですよ。疑心暗鬼を生ずとかや、互に心の纏れか



ら、せいでもよい心配をしたり、させたり、【らつち】もねえことで御座んした  
旅の男は漸くにして胸撫でおろし、

「あゝそれで落着きました……オイお前達、モウ心配するには及ばぬ、氣を確に  
持て。こんな弱い事で荒井峠が越されと思ふか。假令泥棒の千匹萬匹押寄せ來  
るとも、此鐵公が鐵拳を揮つて、泥棒の群に縦横無盡に飛込んだが最後、さしも  
暴惡無道の泥棒の群も風に木の葉の散る如く先を争ひ、ムラムラパツと逃げ散つ  
たり。逃げる奴には目はかけず、寄せくる奴は片つぱしからブンなぐり、素首ひ  
きぬき、股をさき手をむしり、子供の人形箱のやうに致してくれむは案の内、ヤ  
ア面白し面白し。實に名にし負ふ荒井ヶ嶽の勇將と、名を萬世に轟かす、比ひ稀  
なる豪傑なり……と云ふ様なものだ。マアマア木ツぱ共、否臆病者共、此鐵公  
さまに従ひ來れ、オツホーン」

「アハ、ハ、又久公の二代目が出来ましたなア」

「久公の副守護神が憑依したのでですよ、アハ、ハ、ハ」

旅の男は五人の男女を差し招き、法螺を吹き、空威張りし乍ら、ヤツパリどこ

かに薄氣味が悪いと見え、下り坂になつたを幸ひ、轉けつまるびつ、立板に砂利をブチまけたやうに、バラバラと命カラガラ逃げて行く。

(大正一一・九・一七 舊七・二六 松村眞澄録)

第一八章 山下り(九八二)

黒姫は四方の風景を眺めながら、

見渡せば四方は霞みて霧の海よ

吾背の君は何處に坐すらむ。

霧の海波静かなり火の國に

コバルト色の山は浮びつ。

村肝の心を荒井ヶ嶽に來て

四方を見晴らす今日ぞ樂しき。

眺むれば火の國山や向日山

花見ヶ嶽の姿のさやけさ。

麗しき霧の漂ふ火の國の

國原清く塵も留めず。

野も山も霧に霞て隠れゆく

わが背の君を「まぎ」て行くかも。

山々は霧に沈みて見えざれど

高山彦の頭見えつつ。

徳公と久公二人を伴ひて

實に面白き旅をなすかな。

旅人を泥棒なりと見違へて

徳久二人は胸をどらせり。

旅人は徳と久との姿見て

泥棒と誤り戦きにける。

今暫し心の駒に鞭うちて

進みて行かむ火の國都へ。

惟神神の教に従ひて

筑紫の島を廻るは樂しき。

神國に生れ出でたる吾なれば

夜晝神の道を進まむ。

天津日の影も霞に包まれて

風靜かなる荒井ヶ嶽の尾

徳公は尻馬に乗つて詠ふ。

黒姫に従ひ來れば山風も

荒井ヶ嶽に泥棒出でたり。

泥棒と取り違へたる久公が

肝玉取られ腰抜かしたり。

腰抜けの弱い男と道連に

なつた迷惑徳公の損だ。

急坂を泡吹きながら「キウ」キウと

久公の奴が登り行くかも。

惟神が表に現はれて

火の神國を霧海にする。

山々は霞の帯をひきしめて

わが行く姿を待ちつつぞ居る。

慢心の山の頂上に登りつめて

困りきつたる久公あはれ

久公は負けぬ氣になつて又詠ふ。

☐  
【トク】頭病見たよな禿げた山の上に

徳公の野郎が慄ひ居るなり。

口ばかり十年先に生れたる

男が屁理屈【トク】トクとして言ふ。

【トク】心のゆくまで脂とつてやるか

不道【徳】なる徳公のために。

野も山も霞や霧に包まれて

春と秋との中に逍遙ふ。

春か非ず秋かと思れば秋ならず

力も夏の朝ぼらけかな。

朝霞棚曳きそめて山々は

浮きしが如く見えにけるかも。

あの様な大きな山を浮かす奴は

霧か霞か白雲の空。

浮ういて居ゐるやうに見みえても花見山はなみやま

根ねは火ひの國くにの霧きりにかくれつ。

この山やまは荒井ヶ嶽あらいがだけと唱となふれど

静しづかな風かぜが吹ふき渡わたるなり。

虎公とらこうのわが親分おやぶんは今いまいづこ

頼たよりも白山峠しらやまたつげ越こゆるらむ。

親分おやぶんがお愛あいの方かたと諸共もろともに

胸突むなつき坂ざかに肝きも「虎とら」れ居ゐまさむ。

三公さんこうの親分おやぶんよりも虎公とらこうは

勝まさりて足あしのまめな強者つはもの。

今頃いまごろは三公さんこう親分おやぶんが屁古へこ垂たれて

徳とくよ徳とくよと弱音よわね吹ふくらむ。

おい徳とくよ早はやく此場このばを立たち去さつて

弱よわい親方おやかたたづね行くべし。

かうなれば黒姫司の御供は

久公一人で事足りぬべし。

心から嫌な徳公と山登り

一しほ汗が深く出るなり。

屋方の村の三公が

乾兒の端に加へられ

朝から晩迄門を掃き

禪までも洗はされ

下女のお鍋に肱鐵を

朝な夕なに喰はされ

性こりもなくつけ狙ふ

腰拔男が現はれて

三五教の宣傳使

黒姫司の御案内

するとは實に案外ぢや

荒井峠へやつて來て

俺は立派な地理學者

なんぢやかんぢやと法螺を吹く

二百十日の風のように

吹き散らすのはよけれども



其處らあたりで金を借り  
未だに尻をふかぬ奴

深い罪科を重ねつつ  
身の程知らずの徳公が

高い山坂登るとは  
是こそ天地轉倒だ

鼻ばつかりを高くして  
あんまり法螺を吹く故に

仲間の奴に嫌はれて  
黒姫司の案内と

體よき辭令に放り出され  
此處迄出て來た馬鹿男

ほんに思へば氣の毒な  
何とか助けてやりたいと

心を千々に砕けども  
腐りきつたる魂を

助けるよしも夏の空  
青葉の影に身を潜め

姿かくしてなき渡る  
山杜鵑は外でない

今日の前に泣いて居る  
こんな男と道連れに

なつた俺こそ因果者  
黒姫司も嘸やさぞ

困つた奴の道連れと  
愛想を盡かして腹中を

揉んでムるに違ひない  
こんな男に狙はれちや

黒姫司もやり切れぬ どころそこらに掃溜が

目につくならば逸早く 惜し氣もなしにドシドシと

捨てて行かうと思へども 山は霞に包まれて

何處も同じ霧の海 捨て場さへなき困り者

厄介至極の至りなり 「オツトドツコイ」 言靈の

善言美詞の御教を 忘れて居つたか待て暫し

黒姫様よ徳公よ 今云うたのは俺ぢやない

お前の肉體守護する 副守の奴が憑依して

無禮の言靈囀つた それに「てつきり」違ひない

腹を立てなよ神直日 心も廣き大直日

あつさり見直せ聞き直せ 人は神の子神の宮

神に敵する仇はない あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 火の國都は十重二十重

霧きりに包つつまれ沈しづむとも

否いやでも應おうでも吾われわれ々は

黒くろ姫ひめ司つかさのお供ともして

送おくつて行ゆかねばならぬぞ

親おやぶん分ぶんさまに頼たのまれた

義ぎ理りを思おもへば今いま此こ處こで

へつ込こむ譯わけにはゆかないわ

も一ひとつ腕うでに撚よりをかけ

足あしに油あぶらを濺そそぎつつ

山やま野のを渡わたる膝ひざ栗くり毛げ

心こころの駒こまに鞭むちうつて

お前まへと俺おれとは睦むつまじう

手てを引き合あうて行ゆかうかい

あゝ面おも白しろい面おも白しろい

東ひがしの空そらが晴はれて來きた

今いま吹ふく風かぜは東ひがし風かぜ

わが言こと靈たまは火ひの國くにの

都みやこに清きよく響ひびくだらう

高たか山やま司つかさも今いま頃ころは

神しん德とく無む雙さつの久きう公こうが

宣のる言こと靈たまに耳みみ澄すませ

生いき神がみさまが出でて來くると

酒さけや肴さかなを用よう意いして

待まつてムこるに違ちがひない

これこれも矢や張つばり黒くろ姫ひめの

神かみの司つかさのお蔭かげぞや

サアサア行ゆかうサア行ゆかう

餘あまりの長ながい休きう息そくで

尻しりに白根しろねが下おりさうだ　いづれ行ゆかねばならぬ道みち

進すすめや進すすめいざ進すすめ　徳公とくこうの野郎やらうは先さきに行ゆけ

黒姫くろひめ司つかさは殿しんがりだ　久公きうこう吾われは中なかに立たち

中なか取り臣おみの役やくとなり　さしもに嶮けはしき坂道さかみちを

苦くもなく下くだり行ゆかうかい　あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

御靈みたま幸さちはひましませよ〇

と歌うたひながら立たち上あがる。黒姫くろひめは徳公とくこうを先さきに立たて、壁かべを立たてたやうな急坂きふはんを一足ひとあし々々ひとあし

指ゆびに力ちからを籠こめて下くだり行ゆく。

徳公とくこうは一足ひとあし々々ひとあし力ちからを入いれながら、さしも名題なだいの急坂きふはん荒井あらみ峠たうげの西坂にしざかを歌うたひ乍ながら下くだ

りゆく。

青葉あをばを渡わたる夏なつの風かぜ  
一いつ間けん先さきは分わからない

霧きりか霞かすみか知しらねども  
だんだんおち込こむ霧きりの海うみ

「ウントコドツコイ」黒姫さま 足許用心なさいませ

外の峠と事變り 火の國一の急坂で

一方は斷崖絶壁だ 一方は深い谷の底

もし踏み外した其時は かけがへのなきこの命

さつぱり「ジャミ」にして仕舞ふ 久公の奴も氣をつけて

一步々々爪先に 心を配つて下りて來い

もしも途中で一人でも 大怪我したら「ドツコイシヨ」

「ウントコドツコイ」親方に 何うして云ひ譯立つものか

黒姫司のお供して このよな深き坂道で

命を捨てては引き合ぬ おいおい此處が一の關

両手で岩をつかまへて 目を塞ぎつつ足探り

そつと傳うて下りて來い あゝあゝきつい難所だな

斯んな所を何として 先の女が易々と

登つて來たのか「ドツコイシヨ」 不思議になつて堪らない

黒姫司は老年だ 心を鎮めてそろそろと

足に力を入れながら 左の手にて杖を持ち

右手に岩ヶ根掴みつつ 静にお下りなさいませ

ア、ア、危ないもう些し 下つて行けば緩やかな

安全無事の道がある 其處へ行く迄「ドツコイシヨ」

どうしても心はゆるされぬ もしも不調法した時は

火の國都にあれませる 高山彦の神さまに

合せる顔がない程に あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして 此急坂を恙なく

無事に下らせたまへかし 神は吾等と俱にあり

吾等は神の子神の宮 とは云ふものの「ドツコイシヨ」

矢張人の身をもつて 神さま氣取りにやなれないぞ

心を配り氣をつけて 此難關を迂り越え

一日も早く火の國の 花の都へ「ウントコシヨ」

行かねばならない「ドッコイシヨ」 黒姫さまは何として

それ程黙つて御座るのか 些とは何とか「ドッコイシヨ」

歌なと歌うて下さんせ 私ばかりが噪やいで

聲を洩らして居た所が オット危ない石がある

根つから「ドッコイ」はづまない 其處には鏡の岩がある

皆さま氣をつけなさらぬと 鏡の岩は滑らかだ

是から向ふへ一二町 鏡のやうに「ドッコイシヨ」

光つて迂る坂の道 此處が第二の難關だ

あゝ惟神々々 叶はぬか知らぬが久公が

屁古垂れよつて「ドッコイシヨ」 さつぱり唾になりよつた

何程無言の業ぢやとて それだけ濕つちや「ドッコイシヨ」

女に劣つた腰抜けと 云はれた處で「ウントコシヨ」

云ひ譯する道あらうまい ほんに困つた弱蟲の

困つた腰抜男だな 「オットコドッコイ」待て暫し

善言美詞の「ヤットコシヨ」  
言靈車が脱線し

濟まない事を云ひました  
あゝ惟神々々

神の心に見直して  
久公怒つて下さるな

お前が賣出す言靈を  
俺が買うたるばかりだ

賣つた喧譁をどうしても  
買はねばならぬ男達

「ウントコドツコイ ドツコイシヨ」  
妙な所へ力瘤

入れる男と思はずに  
何卒見直し聞直し

「ガラガラガラガラ アイタタツタ」  
とうとう腰の骨打つた

「アイタタタツタ」神様の  
罰が當つたぢやあるまいか

口は「ドツコイ」禍の  
門ぢやと聞いて居つたれど

まさかにこんな「ウントコシヨ」  
事になるとは夢にだに

思はなかつた「ドツコイシヨ」  
も些し下れば「ドツコイシヨ」

緩勾配の道がある  
其處でゆつくり憩まうか

あゝ惟神々々  
御靈幸はひましませよ



(大正一一・九・一七 舊七・二六 加藤明子録)

第十九章 狐の出産(九八三)

三人は稍緩勾配の坂道にかかり、甦き返つた様な気分になつて、宣傳歌を歌ひ乍ら進み行く。道の傍に滾々として清水が湧き出て居る。天の與へと三人は飛びつく様にして交る交る手に掬ひつつ喉を霑す。

徳公 旅人の生命養ふ清水かな。

滾々と水の御靈の湧き出でにけり。

あゝうまいうまいと掬ぶ清水哉。

汗までが姿を隠す清水かな。

喉笛の調子を直す清水かな。

岩清水尊き神の恵みなり。

有難し尊し何も岩清水

久公「おい、徳、随分水々とよく轉るぢやないか。それほど貴様水が有難いか。

此坂を降つて少しく左へとれば龍の湖があるから、そこへ飛び込むで死ぬ迄飲む  
といいわ、一杯々々手に掬うて飲んで居るより埒が好いからな。俺も一つ此清水

で駄句つてみようか

徳公「風流を知らぬ貴様に如何して俳句が出来ものかい」

久公「何、俺の名句をよく聞け！」

岩清水徳公の餓鬼の生命かな。

餓鬼達が集まり来る清水かな

徳公「アハ、ハ、ハ、もつと云はないか。もうそれで種切だなア」

久公「滾々と湧き出す命や岩清水。」

云ふよりも云はぬがましと口を詰め。

袖よりも味の良くない清水かな。

湧き返る胸板冷す清水かな。

岩清水徳公の腹に蟲がわき」

徳公「馬鹿にするない。水臭い事ばかり柚ぢやないか」

久公「きまつた事よ。水の御靈の教を傳ふる宣傳使のお供だもの」

黒姫「掬ふ手に恵の露や岩清水。」

滾々と盡きぬ生命の清水かな。

何時までも涸るる事なし岩清水。

高山の胸より湧きし清水かな。

高山を通れば樂し岩清水。

此水や神の恵の生命水。

岩清水三五の月の光りあり。

徳久が水掛論の比沼眞奈井。

高山の清水や殊に味の良き。

岩清水吾背の君に飲ませたし。

湧き出づる清水も神の恵かな。

水々し若い男の水喧譁。

水にさへ根もなき喧譁の花が咲き。

水晶の靈の雫が岩清水。

眞清水や生命の親と伏し拜み。

水入らぬ二人の仲に水喧譁。

水臭い心を嫌ふ瑞御靈。

此水や末には廣き海に入り。

高山の水の甘さは誰も知らず。

黒姫の心を洗ふ清水かな。

坂道の疲れ養ふ清水かな。

又汗の種ともならむ岩清水。

眞清水を掬ぶ手先や霧の立ち

斯く三人は道の傍に腰うち下し駄句りつつある處へ、慌しくやつて来た一人の男がある。男は腰を屈め乍ら、

「もしもし旅の御方様、一つお願が御座います。何卒聞いては下さいますまいか」  
「何事か存じませぬが、妾達の力に叶ふ事ならば承はりませう」

男「早速の御承知有難う御座います。私は火の國の者で常助と申す百姓男で御座います。熊襲の國の建日の館へ參拜せむと、女房のお常を伴ひ此坂をエチエチと登つて參りました處、まだ七月よりならない女房が俄に陣痛が來ると申しだし、路傍の木蔭に腹を痛めて七轉八倒苦悶をつづけて居ります。何卒宣傳使様の御神力によつて安産をさせてやつて下さいませ」

「それは御心配で御座いませう。及ばぬ乍ら御世話をさして頂きます……これこれ二人の若い衆、水筒に水を一杯盛つて下さい。お産の時に使はねばなりませんから……」

「ハイ、徳と承知致しました。スウヰートハートの結果赤坊を腹に仕入んで、頭水筒の御世話に預ると云ふ妙な因縁ですなア。私も未だ嬢アを貰つてから間がないので、出産の状況を目撃した事がない。こりやまア、都合の好い事だ。一つ見物さして貰ひませうかい。なあ久公、何と云つても人間が一匹小さいから

飛び出すのだから、随分六かしい藝當だらう。屹度見る丈けの價値はあるよ』

久公は黙して答へず。

「これ徳公さま、出産と云ふものは大切なものだから、靜かにせないと産婦が逆上すると大變だから、暫く沈黙して居て下さいや』

「委細承知致しました。これ常助どん、お前の奥さまは何處で呻つて居るのだ。

早く案内しなさい。萬一、赤坊が出にくがつて居つたら、俺が後に廻つて力一杯腰なり、尻なりを徳とブン毆つて叩きだしてやるから安心しなさい』

「そんな無茶をしたつて子は生れるものぢや御座いませぬ。却て産婦が氣をとり失ひ難産を致しますから、何卒手荒い事はせぬ様に頼みます』

「常さま、安心なさいませ。此黒姫が何もかも呑み込んでゐますから大丈夫です。さあ早く参りませう』

「ハイ、有難う、御案内致します。斯うお越し下さいませ』

と路傍の草道を二三十間ばかり踏み分け進み行く。黒姫も一歩々々氣をつけ乍ら雑草の中を探りつつ常助に従ひ行く。

「何とマアえらい叢ぢやないか。こんな處でお産をする奴ア碌な奴ぢやあるまい。河原乞食か、山乞食ぢやなくちや宿なし坊か、一體合點のゆかぬ代物ぢやないか」

「これ、徳公さま、お黙りなさい。産婦に障りますよ」

「ハイ、承知致しました、出産が済むまで徳山砲臺も沈黙致します」

「ホ、ホ、ホ、」

「この樹の根に女房が居ります。何卒宜しうお願い致します」

「ほんにほんに綺麗な女房だな。これお常さまとやら、妾は三五教の黒姫と云ふ宣傳使だ。これから神様に願つて、安く身二つにして上げますから御安心なさいませ」

「もしもし黒姫さま、そんな亂暴な事をしちやいけませんぞ。二つにして上げるなんてそんな無茶な事がありますか……殺す勿れ……と云ふ律法をお前様は蹂躪する積りですか」

「ホ、ホ、ホ、譯の分らぬ男だこと、二つにして上げると云ふのは、親切にとりあげて親と子と分けて上げると云ふ事だ。つまり子を生れさす事だよ」

「やアそれで安心した。何卒早く二つなつと三つなつとしてやつて下さい」

「ヒヨツとしたら五つになるかも知れませぬから、吃驚せぬ様にして下さい。：

これこれお常さま、大分息苦しうだ。今樂にして上げますから、チツとばかり辛抱しなさいや」

「ハイ御親切に有難う御座います、とんだ厄介をかけまして申譯が御座いませぬ」  
黒姫は、

「そんな心配なされますな」

と云ひ乍らお常の前に端坐し、天津祝詞を奏上し、天の數歌を謳ひ上げ、一生懸命に祈願を凝らしてゐる。

お常は「ウン」とばかり苦悶の聲と共に「ホギヤー」と一聲、飛びだしたのはクリクリとした男の兒……。

「ヤアお目出度いお目出度い……これこれ常助さま、徳さま、久さま、早く用意をなされ、お水の……私はまだ手がぬけませぬから……さアお常さま、も一氣張りだよ」



と云ひ乍ら、又もや天の數歌を謳ひ上げると、「ホギアー」と一聲、飛んで出た赤坊は女である。「ウン」と一聲、又もや男の赤坊が飛び出す。

「さアも一氣張りだ」

とお常の腰をグツと抱へ「ウーン」と息を掛ける、「ホギヤー」又飛出したのは女の赤坊である。

「さア常助さま、お常さま、御安心なさいませや。腹帯を締めて上げませう。産前よりも産後が大切ですから後を氣をつけなさいよ」

「はい有難う御座います。お蔭で安産さして頂きました。此御恩は決して忘れませぬ」

「何だ、家の隣のお磯が雙子を生みよつて珍らしいと云つて村中の評判だったが、此奴ア又豪氣だ。赤坊の夫婦が飛び出したぢやないか……なあ久公、なんでもこりや前の世で如何しても……お前と添はれねば手に手を取つて死出三途、蓮の臺で一蓮托生、南無妙法蓮陀佛……と洒落て淵川へ身を投げた心中者の生れ變りだらうよ。何とまア仲のいい者だな。死ぬ時と一緒に死に、生れる時にも一緒に生

れて来るのだから、ホントに巧妙な奴もあつたものだ。アハ、、、、、：：：俺も嬢ア  
の死ぬ時や一緒に死んでやつて、又此赤坊の様に、同じ母親の腹に生れて来てや  
らう。こりや、うまい事を考へた。オホ、、、、

「これこれ八釜しい。下らぬ事を云ふぢやありませんよ、後の身體に障つたら如何  
しますか」

「それだと云つて、犬か猫か狐か狸の様に、人間が一遍に四人も赤坊を生むのだ  
もの、これが黙つて居られるものか。生れてから初めて見たのだから、珍しくつ  
て面白くつて仕方がありませんわい。

四つ足の身魂か何か知らねども

一度に四つの子を生みにけり。

常助とお常さまとのそのなかに

狐のやうな子は生れけり。

お常さん腹帯シツカリ締めなされ

後の肥立ちが肝腎だから。

肝腎の常助さまはウロウロと

呆氣面して何を周章る。

常さまよ子は三界の首枷ぢや

うかうかせずに働け是から。

今までは二人暮しの常さまも

これからチツと荷が重うなる」

「これこれ徳さま、又八釜しい、チツと黙つて居て下さい」

黒姫が何程黙れと云つたとて

こんな事見て黙つて居らりよか。

千早振る神代もきかず四人の

子が一時に生れ出るとは。

狐きつねならば知らしず人にんげん間の身からだ體たいより

四よつ足あしドツコイ四よつ身み飛とび出でる。

あゝ惟かむながら神いか如何かなる神かみの惡いたづら戯がか

古こ今こん獨ど歩くの今け日ふの誕たん生じやう。

珍ちん無む類る例ためしもあらぬお常つねさまが

一いち度どに四よ人にんフウフ（夫婦）と生うむ

「さあ、常つね助すけさま、お常つねさま、もう大だい丈ぢやう夫ぶです。御ご安あん心しんなさいませ

「とんでもない御お世せ話わになりました。決けつして此この御ご恩おんは忘わすれませぬ

「随ず分ぶん身み體たいを大たい切せつになさいませ。冷つめたい水みづを飲のんだり無む理りをせぬ様やうに、七しち十じふ五ご日にち

のあひだ間まは御ご保ほ養やうあらむ事ことを、ここんここんと懇こん望まうして置おきます

「ハイ有あり難がたう御ご座ざいます。左さ様やうなればこれでお別わかれ致いたします

と云いふより早はやく、常つね助すけ、お常つねは眞ま白しろけの大おほ狐きつねとなり、眞ま白しろの尾をを垂たれて四し匹ひきの子こ

供もを連つれ、ノソリノソリと森しん林りん深ふかく姿すがたを隠かくしたり。

「アハ、ハ、ハ、ハ、何だ。初めからチツと怪しいと思つて居たが、狐の産婆さまを黒姫さまが爲さつたのだな。何と偉いものだ。一遍に四人も子を産むのが變だと思つて居つた。如何やらまだ狐に騙されて居る様な氣がするぞ……おい久公、俺の頬を抓つて見て呉れ、黒姫さま迄がソロソロ狐の親分の様に見え出して來たワ  
イ」

「ホ、ハ、ハ、ハ、神様のお道には別け隔てはありません。人民は申すに及ばず、鳥獸蟲族に至る迄助けに行くのが、三五教の御教だからなア」

「黒姫さまお前さまも呆れたでせう。初めは矢張り人間だと思つて居たのでせう」  
「そんな事の分らぬ妾ですかい。初めから常助だとか、お常だとか云つて居つたぢやありませんか。あゝして人間に化けて居つたけれども、太い尻尾が股の間から一寸見えて居たのだ。お前はそれが氣がつかなくかつたのだな」

「初めから狐だと思つたら、【アタ】嫌らしい、誰が相手になるものか。力一杯ブン殴つてやるのだつた。なあ久公、さつぱりコンと譯が分らぬ様になつて來たぢやないか」

「いや、もうあんまりの事で久には何とも云ふ事が出来ないわ」

「さア、も一息だ。そろそろ参りませうか」

と黒姫先に立つ。徳公は、

「ハイ、参りませう。もう此先に出産して居つても、狐の取上げだけは断つて下

さい」

「狐ばかりか、虎でも狼でも獅子でも、熊でも大蛇でも鬼でも構はぬ、頼まれた

ら産婆をしてやりますよ。それが神様の道に仕ふるものの盡すべき道だからなア」

徳公「何と、恐ろしい宣傳使だなア。徳と考へねばなるまい、さア行かう」

と先に立ち、荒井峠を西へ西へと下り行く。

(大正一一・九・一七 舊七・二六 北村隆光録)

## 第二〇章

### 疑心暗狐(九八四)

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし 黒姫さまくろひめに從したがひて

荒井あらいヶ嶽がだけを下くだり行ゆく 「ウントコドツコイ ドツコイシヨ」

轉こけつ輓まろびつ兩りやうにん人が 邊あたりに心こころを配くばりつつ

五合ごがふめ目めあたりに來きて見みれば 天てんの與あたへか岩いは清水しみづ

人ひと待まち顔がほに湧わいてゐる コリヤ堪たまらぬと飛とび付ついて

一口ひとくち喉のどをうるほせば 今いま迄まで暴ぼう威ゐを揮ふるひたる

汗あせの曲まが津つはどこへやら 縮ちぢみ上あつて「ドツコイシヨ」

寂滅じゃくめつ爲ため樂らくとなりよつた 黒姫くろひめさまが句くを作つくる

俺おれも久きう公こうも「ドツコイシヨ」 黒姫くろひめさまの驥き尾びに付ふし

天下てんかの名めい句いくをひねりだす 諄じゆん々じゆんとして「ウントコシヨ」

盡つきざる姿すがたは「ドツコイシヨ」 泉いづみの涌わく如ごと面白おもしろく

甦よみがへりたる心こころ地ちして 息いきを休やすむる折をり柄からに

常助つねすけさまと云いふ男をとこ 慌あわたしくもやつて來きて

黒姫くろひめさまに手てをつかへ 途とちう中に女によう房ぼうが「ドツコイシヨ」

又々坂がキツウなつた

背中を用心するがよい

お常の産氣がつかまりました

此山中の「ウントコシヨ」

人も通らぬ路傍で どうにも斯うにも仕様がな

御苦勞乍ら「ドッコイシヨ」 取上げ婆さまになつてくれと

誠しやかに頼む故 ウンと呑み込み黒姫様が

いと親切に承諾し 夏草茂る木下かけ

ガサガサ進んで行く間に 大木の蔭に「ウントコシヨ」

一人の女が坐つてる 黒姫さまは親切に

魔性の女に「ドッコイシヨ」 知るや知らずや忽ちに

禪十字にあやなして 「ウントコドッコイ ウントコセイ」

力をきはめて腰抱き 介抱すれば忽ちに

キヤツと飛び出す狐の子 又もや女の子狐が

出るかと思へば又一つ 男狐が飛んで出た

又もや一つの狐の子 よくよく見れば牝だつた



狐きつねが生うんだ二ふた夫婦ふうふ 親おやを合あして三み夫婦ふうふが

太ふとい尻尾しつぽをプリプリと 右みぎや左ひだりにふりながら

黒くろ姫ひめさまに禮れい言いうて 後あと振返ふりかへり振返ふりかへり

叢くさむらわ分わけてガサガサと 姿すがたかくした面おも白しろさ

尻尾しつぽ計ばかりか「ウントコシヨ」 頭あたまの毛けまで皆みな白しろい

雪ゆきを欺あざむく白狐びやくこさま 必かならず御恩ごおん忘わすれぬと

黒くろ姫ひめさまに云いひよつた 思おもへば思おもへば「ドッコイシヨ」

狐きつねの取とり上あげする産婆さんば 虎とら狼ほかみや獅し子くま熊まや

大蛇をろちの端はしに至いたる迄まで 助たすけてやるのが神かみの道みち

取とり上あげますといひなすつた 「ウントコドッコイ ドッコイシヨ」

ホホンに感かん心しん々かん々しんと 股またを擴ひろげて坂路さかみちを

下くだりながらも何なんとなく 黒くろ姫ひめさまのスタイルが

厭いやらしうなつて「ドッコイシヨ」 氣き分ぶんが悪わるくなりました

「ウントコドッコイ ドッコイシヨ」 どうせ碌ろくな「ドッコイシヨ」

婆さまぢやないと思てゐた  
自轉倒島に年古く

住居を致して世を紊す  
金毛九尾ぢやあるまいか

「ウントコドツコイ」龍宮の  
乙姫さまの生宮と

話の端に聞いた故  
此奴あウツカリ出来ないぞ

グツグツしてゐちや頭から  
「ヤットコシヨー ヤットコシヨー」

「それぞれそこに石がある」  
呑まれて了ふと思つた故

猫を被つてハイハイと  
「ウントコドツコイ」瘦馬を

牽いて坂路登るよに  
いとおとなしう従うて

此處まで従いて「ドツコイシヨ」  
やつて來たのは徳公だ

狐の嫁入「ドツコイシヨ」  
すると云ふ事聞いたれど

其時や日和で雨が降る  
天道さまがガンガンと

お照らし遊ばす眞晝中  
魔性の狐が現はれて

あつかましくも人の前  
尻尾をかくしてやつて來て

取上げてくれとは何の事  
「ウントコドツコイ」此方が

人間様であつたなら 四つ足體の畜生が

如何して恐れて近よらう 黒姫さまは「ドッコイシヨ」

てつきり狐の親玉か 銀毛八尾の「ドッコイシヨ」

古い狐の御化身か 眉毛に唾つけ眺むれど

根つから尻尾が見えよらぬ 餘程劫經た奴だらうか

「ウントコドツコイ ヤットコシヨ」 コレコレモウシ黒さまえ

私はお前を「ウントコシヨ」 此處迄送つた返禮に

「ウントコドツコイ ドッコイシヨ」 足許危なうなつて來た

私は決してたまさぬと 一言誓うて下さんせ

狐を馬に乗せたよな 怪しい氣分になりました

オイオイ久公如何思ふ ホンに怪體な「ウントコシヨ」

譯の分らぬ事ぢやなア 荒井峠と思てたら

人跡絶えし山奥の 虎狼の吼えたける

深山の奥かも知れないぞ どうしてもこしても腑におちぬ

コンコンさまの御出産

取上げ婆々アの黒さまに

常助お常と化けた奴

親分子分の關係で

あんな事をば「ドツコイシヨ」

平氣な顔で白晝に

やつたであらうか恐ろしい

荒井の峠はいつととも

不思議な所とは聞きつれど

前代未聞の此怪事

此謎とくのは六つかしい

あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして

國魂神の純世姫

表に現はれまして

黒姫さまは善神か

但は悪魔かハツキリと

どうぞ立別け下さんせ

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も神様に

任して御願致します

誠の神か曲神か

但は狐の親分か

合點のいかなない黒姫を

正體現はし兩人が

心を安めて下さんせ

縦からみても「ドツコイシヨ」

横よこから見みても黒姫くろひめは

矢張やっぱり人のスタイルだ

之これが狐きつねであつたなら

餘程よつほど上手じやうづつに化ばけたもの

ホわかンに分わからぬ今日けふの旅たび

あゝ惟神かむながらかむながら々々

久公きうこうシツカリして居をれよ

それそれ　そこに石いしがある

黒姫くろひめさまを先さきに立たて

お前まへと俺おれと兩りやうにん人は

あとから従ついて「ドツコイシヨ」

尻しりのあたりを査しらべつつ

審神さにはし乍ながら下くだらうか

モウシモウシ黒姫くろひめさま

どうぞお先さきへ「ドツコイシヨ」　あなたはお出いで下くださんせ

後うしろに目玉めだまのない私わたし

どんな惡戯いたづらされよかと

心こころにかかつてなりませぬ　疑心ぎしん暗鬼あんきか知しらねども

お前まへの様やうな化者ばけものと

一緒いっしょに行くゆのは眞平まつびらだ

あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸さちはひましませよ

と歌うたひ乍ながら、黒姫くろひめ一行いっかうは一歩ひとあし々々力ちからを入いれて下くだり行ゆく。黒姫くろひめは歌うたひ出だした。

國治立大神くにほるたちのおほかみや

豊國姫大御神とよくにひめのおほかみ

神素盞鳴大神かむすさのをのおほかみが

開き玉ひらたまひし三五あななひの

教をしへを傳つたふる宣傳使せんでんし

尊たふとき神かみの生宮いきみやと

神かみの任よさしの黒姫くろひめを

何なんぢや かんぢやと罵ののしつて

誠まことを知らぬ困こまり者もの

假令たとへきつね狐たぬきや狸たぬきでも

残のこらず神かみの造つくらしし

尊たふとき身魂みたまである程ほどに

曇くもり切きつたる世よの中なか

人間にんげんよりも畜生ちくしやうの

狐きつねや狸たぬきの魂たましひが

神かみの御目みめより眺ながむれば

遙はるかに優まさつて居ゐる程ほどに

天地てんちの道理だうりも白雲しらくもの

包つつむ山路やまぢをふみこえて

迷まよひに迷まよふ二人ふたり連れ

少すこしく心こころをおちつけて

此この黒姫くろひめが言靈ことたまを

味あぢはひ聞きくがよからうぞ

三千さんぜん世界せかいの梅うめの花はな

一いち度に開ひらく五み六ろ七くの世よ

松まつの神代かみよも近ちかづいて

四方よもの山々やまやま花開はなひらき

小鳥ことりは謠うたひ海河うみかはは

清くさやけくすみ渡る  
尊き御世の開口

さうなる上は人間は  
云ふも更なり鳥獸

這ふ蟲迄も悉く  
神の恵の御露を

與へて尊き天國の  
姿をうつす宣傳使

海の内外に使はして  
神の御旨を隈もなく

開かせ玉ふ三五の  
深き仕組を知らないか

狐狸と言はれても  
此黒姫は構はない

さはさり乍ら徳公よ  
チツトは愼みなされませ

此神國は言靈の  
幸はひ助け生くる國

畏れ多くも三五の  
神の司を見違へて

銀毛八尾の狐とは  
誤解するにも程がある

お前の心にかかりたる  
其黒幕を逸早く

外して私の顔を見よ  
何ほど黒い黒姫も

普通の人ではない程に  
龍宮海の底深く

鎮まりいます乙姫の 神の命の生宮ぞ  
しづ おとひめ かみ みこと いきみや  
 あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして  
かむながらかむながら みたまさち  
 徳、久二人の魂に 光を與へ村肝の  
とく きつふたり たましひ ひかり あた むらきも  
 心の暗を晴らしませ 三五教の黒姫が  
こころ やみ は あななひけう くるひめ  
 國魂神の御前に 慎み敬ひ願ぎまつる  
くにたまがみ おんまへ つつし おやま ね  
 あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ  
かむながらかむながら みたまさち

と歌ひつつ、坂路を急ぎ降り行く。

（大正一一・九・一七 舊七・二六 松村眞澄録）

## 第二章

### 暗闘（九八五）



房公ふさこう芳公よしこう兩人りやうにんは 建日たけひの館やかたを立たち出いでて

黒姫くろひめさまのあと後おを追おひ 嶮けはしき山坂やまさかトントンと

掬鉢ねぢはちまき卷しりに尻しりからげ 薬罐頭やくわんあたまに湯氣ゆげを立たて

後追あとおひかけて來きて見みれば 火ひの國くに峠たうげの登のぼり口ぐち

黒姫くろひめさまのお姿すがたは 雲くもか霞かすみか魔まか神かみか

ドロンと消きえて影かげもなし 「ウントコドツコイ」このやうな

はげしい坂さかをば「ウントコシヨ」 黒姫くろひめさまの老年としよりが

どうして登のぼつて行いつたるか 影かげも形かたちも見みえないと

二人ふたりは足あしを早はやめつつ 老樹らうじゆ茂しげれる坂道さかみちを

「エンヤラヤー エンヤラヤー」 ハーハースー スー云いひながら

足あしをツルツルすべにらせつ 板いたを立たてたる「ドツコイシヨ」

やうな嶮けはしき坂道さかみちを 兔うさぎの如ごとく這はうて行ゆく

當たうの主人あるじの黒姫くろひめは 道踏みちふみ迷まよひ丸木橋まるきばし

向むかふへ渡わたつて森中もりなかに お愛あい其その他たの男をとこをば

助けて居るとは知らずして

進み行くこそ憐れなり。

二人は日のツツプリ暮れた頃、漸くにして火の國峠の絶頂に辿りつく。そこには枝ぶりの面白い山桃の木が七八本、無遠慮に空を蔽して立つて居る。

「オイ芳公、これだけ俺達は一生懸命に走つて来たけれど、黒姫さまに追つかないのだ、大方道が違つたのぢやあるまいかなア」

「さうだなア、どうも怪しいものだ。何でも坂の上り口に右へ行く細い道があつたが、大方其方へでも迷ひ込んで行かれたのぢやあるまいか。どう考へてもそれより外に道がないぢやないか。まア兔も角も今晚は此木の下でお宿を借ることとしよう。又人でも通つたら尋ねようとままだから夜の途を急いだ處で仕方がない。俺も大分に疲れて来たからのう」

「そんなら仕方がない。芳公一泊して行かうかい」と、兩人は蓑をしき「グレン」と横になる。

そこへ西の方から、コチンコチンと杖の先で道の小石を叩きながら、登つて來

ひとり  
た一人の白髪はくはつの老人らうじんあり。老人らうじんは二人ふたりの休やすむ傍そばに立たち寄より、杖つゑの先さきにて二人ふたりの額ひたひ  
あたりを交かはる交がはるグイグイと突ついてゐる。二人ふたりは「アイタ、」と言いひながら、ガ  
バツと跳はね起おき、薄暗うすくらがりにすかし見みて、

「ダダ誰たれだい、俺おれの頭あたまを杖つゑでこづきよつた奴やつは、ふざけた事ことをしよると承知しやうちしな  
いぞ」

「アハ、、、、餘あまり暗くらいものだから……何なんだか躰いびきがするので近寄ちかよつて見みれば、暗くら  
がりに光ひかつたものが一つ、其横そのよこに黒くろいものが又一またひとつ倒たふれて居ゐるので、こりや又狸またたぬき  
の鞆丸きんたまではあるまいかと思おもつて、杖つゑの先さきで一ちよつと寸ちよつといぢつて見みたのだよ。何なんを云いうて  
も暗くらがりと云いひ、老人らうじんで目めが疎うといのだから、頭あたまのひと一つやそこら割われたつて辛抱しんぱうし  
て下ください。何程腹なにほどはらが立たつても老人としよりは大切だいじにせねばならぬ規則きそくだからのう……」  
「何處どこの老人らうじんか知らぬが、知らぬとやつた事ことは仕方しかたがないとしても、唯ただ一言ひとことの斷ことわ  
りも言いはず、反對あべこべに老人らうじん尊敬論そんけいろんを捲まくし立たてよつて太ふとい奴やつだ。大方おほかたお前まへは化州ばけしうだら  
う。さア、正體しやうたいを現あらはせ！」

「オホ、、、、、どうせ化州ばけしうに違ちがひないが、俺おれでさへも肝きもを潰つぶすやうな闇やみの中なかに、

よう光る薬罐頭があつたものだから、「ヒネ」た狸の鞆丸ではあるまいかと、一寸泥のついた杖の先でいぢつて見たのだから、了見さつしやい。知らぬ神に祟りなしと云ふから、さう老人に毒つくものぢやありませんぞや」

「もしお爺さま、知らずにした事は仕方ありません。こちらも兩人の者が、この木の下に逗留して居ると云ふ廣告を出して置かないものだから、間違へられても何とも云ふ事は出来ませぬ。併しながら黒姫と云ふ五十許りのお婆さまに、お出會ひでは御座いませなんだか」

「何だか黒いものにチヨコチヨコ出遇うたが、向ふが黙つて通りよつたものだから、どれが黒姫だか黒狐だか、熊だか烏だか區別が付きませぬわい」

「お爺さま、この暗いのお前は一たい何處へ行く積りだえ」

「俺は仕方がない極道息子が二人あつて此坂を今登つて来る筈だから迎へに来たのだよ」

「へエ、そのまた二人の息子とはどんな人ですか」

「さうだなア、一人は暗の晩でも薬罐のやうに頭が光つて、一寸腰が曲り背の低



「お前の云ふ通り、俺は見る影もない糞爺だ。目糞に齒糞、耳糞に鼻糞、お前のやうに尻糞はつけて居ないが、随分汚い糞爺だよ」

「オイ糞爺、俺が尻糞をつけて居るなんて、失敬な事を云ふない。この暗がりで見え難いと吐した癖に、尻糞迄どうして分るのだ。糞があきれて雪隠が踊るわい」

「何とまア糞やかましい男だなア。俺は火の國の聖と云つて、どんな事でも「しり」てしりて「しり」ぬいて居る牛の尻だよ。お前の尻の毛が何本あると云ふ所まで知りて居るのだからのう……」

「こりや化爺、そんなら俺の尻の毛が何本あるか當てて見い！」

「オホ、か、かう見た處が唯の一本も無いぢやないか。お瀧の素片多女に惚けよつて、尻の毛を一本もない所迄抜かれたと見えるわい。まるきり牛蒡の切口か

榎炭の切口のやうな黒い尻だのう」

「何を吐して「けつ」かるのだい。もうよい加減にすつ込まぬか、尻の穴奴が！」

「すつ込めと云つたつて、十年許り苦しんで居る脱肛だから、容易にすつ込みは

せないぞや。これと云ふのも房公ふさこう芳公よしこうと云ふ極道ごくどう息子むすこがあるために、それが苦くになつてこんな病氣びやうきが起つたのだよ。親不孝おやふかうな息子むすこもあつたものだ。こんな奴やつは今いまに天罰てんばつが當つて火の國くに峠たうげの大蛇をろちに吞のまれて仕舞しまふと、娑婆しやばふさぎの厄介やつかいもの者がなくなつてよいのだがなア。神かみが表おもてに現あらはれて、善ぜんと惡あくとを立てかへる世よの中なかだから、どうせ二人ふたりの極道ごくどう息子むすこの壽命じゆみやうも長い事ことはあるまい。あゝ可愛かあいさうなやうな氣味きみのよい事ことだわい、オホ、ゝゝ、

と遠慮えんりよ會釋えしやくもなく、暗くらがりらに「ボツ」と姿すがたを現あらはして嘲笑あざわらふ。房公ふさこうは最前さいぜんの正面しやうめん衝突しゆつうで鼻血はなぢを出だし痛いたさにもものをも得え云いはず、地ちにかぶり付ついて泣ないて居ゐる。老爺ぢいやは皺しわがれた聲こゑで歌うたひ出だした。

黒姫婆くろひめばさまの供ともをして 心こころも暗くらい兩人りやうにんが

暗くらい峠たうげを登のぼり來くる 後前あとさき見みずの暗雲やみくもで

心こころの舵かぢを取とり外はづし 顔かほと顔かほとが衝突しゆつうし

藥罐頭やくわんあたまが鼻打はなうつて 赤あかい鼻血はなぢをタラタラと

流して躡むいぢらしさ

黒姫司にそそられて

遙々つらつて来た友の

難儀を見捨ててスタスタと

高山峠を一散に

登つて出て来る不人情

人の皮着た代物の

平氣で出来る業ぢやない

貴様二人の心には

黒姫よりもまだ悪い

黒い顔した鬼が居る

其鬼共を追ひ出して

生れ赤兒になりかはり

尻の掃除をよつくして

尊き神の御使と

早くなれなれ いつ迄も

黒姫如きの供をして

男が立つと思てるか

前代未聞の馬鹿者だ

我は國治立神

お前の御魂を磨き上げ

誠の神の生宮と

造り直して神界の

御用をさせてやり度いと

此處に姿を現はして

お前等二人の眼を醒まし

無限の力をそれぞれに

配り與ふる神ながら



神の御息に生れたる

汝はこれから謹みて

誠一つを立て通し

一日も早く火の國の

花の都へ立ち向ひ

黒姫司が迷ひ居る

戀の闇をば晴らせかし

神の大道を踏みながら

夫のために魂を

抜かれて來る黒姫の

其愚さは限りなし

迷ひきつたる黒姫の

後に從ひ遙々と

ここ迄來る二人連れ

猶更馬鹿な代物だ

國治立大神と

云うたは眞赤な詐りで

我は月照彦神

早く御魂を立て直し

清明無垢の身となつて

嚴の御魂や瑞御魂

開き給ひし三五の

教の柱となれよかし

神は汝の身を守り

魂を守つて何時迄も

太しき功を立てさせむ

あゝ惟神々々

御靈幸はへましませよ

と歌ひ終るや、怪しき老人の姿は煙となつて消え失せ、後には尾上を渡る松風の音、ザワザワと聞え来る。

「オイ房公、どうだ、鼻柱は些しよくなつたかなア。あんまり常から鼻が高いものだから、今現はれた神様が鼻を揞ぢ折つて改心させてやらうとなさつたのだよ。何時とても貴様は高慢が強うて鼻を高うするから、こんな目に遇うたのだ。途中の鼻高と云ふのはお前の事だよ」

「何でもいいわ。俺はもう恐ろしくつて何どころぢやない。大方あれは、此山の天狗に間違ひなからうぞ。何でも彼でも俺達の事を皆知つてござつたぢやないか」

「天狗の話はもう止めて呉れ。天狗と聞くと、何だか首筋がゾクゾクして来るかなア。あゝ惟神靈幸倍坐世」

「こんな處に長居は恐れだ。さア行かう。黒姫さまが火の國で待つて居られるだらうからなア」

「行かうと云つた處で是だけ峻い坂道、其上闇と来て居るのだから、どうする事

も出来はせないぞ。まア此處で天津祝詞を奏上し、神様を祈つて夜を明かすこと  
としようかい」

(大正一一・九・一七 舊七・二六 加藤明子録)

## 第二章 當違(あてちがひ)〔九八六〕

火の國都の高山彦の門前に現はれた二人の男、こは云はずと知れた房公、芳公  
の兩人であつた。

『もしもし門番様、何卒通して下さいませ』  
門番の輕公は門内より、

『村肝の心の岩戸の締めたる

曲津の通る門口でなし。

心こころより神かみの大道おほぢを明あきらめよ

天あめケ下がしたには妨さまたげもなし。

此この門もんは心こころ正ただしき人々ひとびとの

大手おほて擴ひろげて通とほる門もん口ぐち。

わが胸むねの門もんを開ひらけば忽たちまちに

これの鐵かなど門もんは自おのづから開あく

房公ふさこうは外そとより、

洒落しやれた事こと言いふ門番もんばんが守まもり居をる

困こまつた「もん」に突つき當あたりける

芳公よしこうは又また歌うたふ。

ㄣ 【よし】吾を卑しきものと見るとても

【かる】く開けよ神の鐵門を。

【よし】もなき事に暇を潰すより

心の門を開き通せよ。

吾こそは自轉倒島の神の子よ

神の通はぬ門口なき筈。

皇神の任しの儘に渡り來る

疎略にすな神様の御子を

輕公は門内より、

ㄣ 【輕々】しくどうして鐵門が開かりよか

曲の猛びの強き世なれば。

曲神が誠の神となりすまし

人を誑かる闇の世なれば

門の外より房公の聲、

躊躇ふな吾は頭てらす大御神  
榮えの門を開く神なり

輕公門内より、

いざさらば頭てらします大御神  
進ませ給へこれの鐵門を

と詠ひ乍ら、門をガタリと外し、門を左右にパツと開けば、房公、芳公は輕く目  
禮し、足も輕げに奥へ奥へと進み入る。

玄關げんくわんの受付うけつけには、五十ごじふ恰好かつかうの、顔かほの少すこし細長ほそながい男をとこが控ひかへて居ゐる。

房公ふさこう「私わたしは三五あななひけう教くろひめの黒姫くろひめのお供ともをして此處ここ迄まで參まゐつた房公ふさこうと申まをすもので御座ございます  
が、黒姫くろひめさまは此方こちらへお世話せわになつて居をられますか

「三五あななひけう教くろひめの黒姫くろひめ様と云いへば、隨分ずぶん黄金わうごんの玉たまで名なの知しれた宣傳せんでん使しだが、未まだ此方こちらへ  
はお見みえになつて居をりませぬよ」

「當館たつやかたの主人しゅじんは、矢張やはり高山彦たかやまひこと申まをすお方かたで御座ございますか」

「左様さやうで御座ございます。御主人ごしゅじんは高山彦たかやまひこ、奥様おくさまは愛子あいこひめ姫ひめと申まをす立派りつぱな神司かむつかさで御座ござい  
ます」

「高山彦たかやまひこ様は御在宅ございたくですか。一寸ちよつとお伺うかがひ致いたし度たう御座ございますか……」  
と意味いみありげに云いふ。

「私わたしは受付うけつけの玉公たまこうと申まをしますが、何なんでも高山彦たかやまひこの御主人ごしゅじんは、今朝けさ早さう々さう何處どこかへ修しう  
行げふにお越こしになつたと聞きいて居をります。乍しかしな併ならうけつけの吾々われわれは詳くはしい事ことは存ぞんじませぬ」  
「何卒どうぞすみませぬが、高山彦たかやまひこ様がお留る守すならば、一寸ちよつと奥様おくさまに會あはして下くださる譯わけに  
はいけますまいか。いづれ後あとから高山彦たかやまひこ様の前まへの奥おくさまが見みえますから、それ以いせ

前に一寸お目に掛けて御伺ひして置けば、前以て圓滿解決の曙光を認め得るものと存じますから、何とか一つ取りもつて下さいな」

「滅相もない。主人の御不在中に奥様が男の方に御対面は遊ばしませぬ。残念ながら何卒諦めて下さいませ。さうして御主人様の前の奥様とは、何と云ふお方で御座いますか」

房公は少しく胸を張り、切り口上にて、

「勿體なくも三五教の大宣傳使黒姫様で御座る。吾々は其黒姫様の股肱の臣で御座るから鄭重にお待遇なさるが宜からう。如何に愛子姫様だとて此事をお聞きになれば、お會ひにならぬと云ふ譯には参りますまい」

と肩肱怒らし禿頭に湯氣を立て、章魚が袴着た様な恰好で、肩を四角に固くなつて居る。

「ハ、ハ、ハ、そりや大變な大間違ひぢやありませんか。御主人の高山彦様はまだお年がお若い屈強盛りです。さうして愛子姫様をお迎へ遊ばしたのが、女をお持ちになつた最初だと云ふ事ですから、そんな年をとつたお婆アさまを女房に持



つて居をられる筈はずはありませぬ。何かのお閒まちが違がひでせう」

「アハ、ハ、ハ、何なんとまあ上うへから下したまでよう腹はらを合あしたものだなア。萬里ばんりの波濤はたうを越こえて、遙々はるばると夫をつとの後あとを慕したひ探たづねて御座ござつた貞淑ていしゆくな黒姫くろひめさまを袖そでにして、若い女をんなを女房にようぼうに持もち、面白おもしろ可笑をかしく此世このよを渡わたらうとは狡ずるい量見りやうけんだ。高山彦たかやまひこさまも餘程よほど墮だ落くをしたものだなア。六十ろくじふの尻しりを作りつく乍ながらチツと心得こころえたら好よささうなものだ。若わかい奥おくさまを貰もらつて若返わかがへり屈強くつきやうざか盛さうりの壯年さうねんの様やうになつたのかなア。人間にんげんと云いふものは心こころの持もち様やうが肝腎かんじんだ。然しかし黒姫くろひめさまは何處どこに迷まようて御座ござるだらうか。もしもこんな處ところへ御入おいで來きになつたらそれこそ大變たいへんだがなア」

此時このとき一閒ひとまを隔へだてて聞きえ來きたる一絃琴いちげんきんの聲こゑ、歌うたの主人あるじは此家このやの女主人をんなしゆじん愛子姫あいこひめである。

千早ちはや振ふる遠とほき神世かみよの昔むかしより 國治立大神くにいはるたちのおほかみは

天地あめつち四方よもの神人しんじんを いと平たひらけく安やすらけく

常世とこよの春はるに救すくはむと 心こころを千々ちぢに配くばらせつ

夜よると晝ひるとの別わかちなく 遠とほき近ちかきの隔へだてなく

高き卑しき押なべて 惠の露をたれ給ひ

三五教の御教を 島の八十島八十の國

諸越山の奥までも 開かせ給ふ有難さ

吾背の君は天照 皇大神の御任せる

五百津美須麻琉々々々の 玉の威徳に現れまして

活津彦根の神となり 神素盞鳴大神の

御子と仕へて天ヶ下 四方の國々隈もなく

嚴の教を宣べ給ふ 高國別の宣傳使

天教山より降ります 八島の別や敷妙姫の

神の命の後襲ひ 高山彦と名を變へて

此世を忍び給ひつつ 五六七の御代を待ち給ふ

神の御裔ぞ尊けれ 妾も同じ瑞御靈

神素盞鳴大神の 生せ給へる珍の御子

愛子の姫と名乗りつつ 父大神の御言もて

メソポタミヤの顯恩郷けんおんきやうに　　バラモン教けうの館やかたをば

建てて教をしへを開ひらくなる　　鬼雲彦おにくもひこの曲神まががみが

御許みもとに永ながく隠かくれつつ　　心用こころもちふる折柄をりからに

太玉彦ふとたまひこの宣傳使せんでんし　　現あらはれ來りて太玉ふとたまの

御稜威みいづを現あらはし給たまひしゆ　　鬼雲彦おにくもひこは驚おどろきて

雲くもを霞かすみと逃にげ去りぬ　　妾姉妹わらはおとどいはちにん八人は

顯恩郷けんおんきやうを立たち出いでて　　おのもおのにもみ身をやつ竄やつし

三五教あななひけつの御教みをしへを　　四方よもに傳つたふる折柄をりからに

魔神まがみの爲ために妹いもつとは　　なやまされつつ波なみの上うへ

遠とほく流ながれる千萬ちよろづの　　艱なやみを凌しのぎ大神おほがみの

大道おほぢを傳つたへ進すすみ行く　　あゝ健氣けなげなる姉妹おとどいよ

今いまや何處いづくの野のに山やまに　　いとしき妹いもは逍遙さまよふか

あゝ惟かむながらかむながら神々かみ々々　　神かみの御靈みたまの幸さちはひて

一日ひとひも早はやく姉妹おとどいが　　無事ぶじなる顔かほを寄より合あはせ

樂しむ時を松の世を 五六七の神の御前に

偏に願ひ奉る 吾背の君は皇神の

大御詔を蒙りて 桂の瀧に出でましぬ

あゝ惟神々々 皇大神の御恵に

吾背の君が百日日の 楔身をやすく濟ませかし

愛子の姫は謹みて 清き玉琴かき鳴らし

すがすがしくも願ぎ奉る あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ふ聲、二人の耳に透き通る様に聞え來る。

「もしもし玉公さま、今のお聲は愛子姫様ぢや御座いませぬか。あのお歌の様子では、吾々の御先生黒姫様の御探ね遊ばす、高山彦さまではない様な氣が致しました。一體此方の御主人は何處から御入來になりましたか」

「此神館は二三年前まで、天教山より降りましたる天使八島別命様御夫婦がお守

りになつて居りましたが、天教山より日の出別神様お越し遊ばし、木花姫命様の御用が忙しいから、元の如く天教山に歸つて呉れよとの御神勅で、日の出別神様と共に、此都をお立ち退き遊ばされ、其後へ神素盞鳴大神様が天照大御神様の嚴の御靈と生まれませる活津彦根命様を、お連れ遊ばして御入來になり、素盞鳴尊様の總領息女の愛子姫様を妻となし、お歸り遊ばしたので御座います。他の宣傳使とは事變はり、随分御神徳の高い神司で、畢竟生神様で御座いますよ」

「ハテナア、何が何だかサツパリ譯が分らなくなつて來ました。オイ芳公、コリヤ一つ考へねばなるまいぞ」

「まるで火の國峠の天狗に魅まれた様な話だなア。こりや斯うしては居られない、黒姫さまの所在を探した上で何とか思案をせにやなるまい……玉公さま、有難う御座いました。又お邪魔を致します。奥様にも宜しく……」

と云ひ捨て慌しく蓑笠をつけ金剛杖をつき乍ら表門指して出でて行く。

(大正一一・九・一七 舊七・二六 北村隆光録)

第二三章 清交（九八七）

火の國館の門前近く、  
宣傳歌を歌ひ乍ら入り來る一人の宣傳使は玉治別命なり。

神が表に現はれて

善神邪神を立別ける

戀に迷うた黒姫が

自轉倒島の聖場に

朝な夕なにまめやかに

仕へつとむるハズバンド

高山彦の神司

筑紫の島に渡りしと

心一つに思ひつめ

百の悩みに堪へ乍ら

三五教の宣傳を

兼ねつつ來る浪の上

筑紫ヶ嶽をふみ越えて

岩の根木の根よけ乍ら

人跡稀なる谷の路

向日峠や屋方村

後に眺めて荒井嶽

二人の御供を伴ひて

火の國一の急坂を

登りつ下りつ進み來る

あゝ惟神々々かむながらかむながら 黒姫司くろひめつかさが今いまここに

現あらはれ來きたることあらば さぞや驚おどろき給たまふべし

吾わが背せの君きみと只ひたすら管くだらに 思おもひし高たか山やま彦ひこ神がみは

眞まことの夫をつとに非あらずして 思おもひもよらぬ人ひとの夫つま

天あまてら照てらします大おほ神かみの 御み手ての手たま卷まきにまかせたる

五い百ほ津つ美み須す麻ま琉る々る々る々る 玉たまの精せい氣きにあれましし

活いく津つ彦ひこ根ねの神かむつかさ司さ 高たかく國くに別わけと聞きくならば

さすがに氣き丈やうの黒くろ姫ひめも さぞや驚おどろき玉たまふらむ

思おもへば思おもへばいぢらしい 一ひと日ひも早はやく片かた時ときも

黒くろ姫ひめさまの迷まよひをば 晴はらし助たすけて自おの轉ころ倒たふの

神かみの集あつまる珍うづの島しま 綾あやの高たか天かまにつれ歸かへり

高たか山やま彦ひこと諸もろ共ともに 睦むつび親したしみ皇すめ神かみの

誠まことの道みちに仕つかへまし 麻ま邇にの寶ほつ珠しゆの神しん業げふに

清きよくも仕つかへさせ玉たまへ あゝ惟神々々かむながらかむながら

かむすさのをのおほかみ  
神素盞鳴大神の 御言を畏みフサの國

やま  
ウブスナ山の山頂に 大宮柱太しりて

そそり立ちたる齋苑館 聖地を後にはるばると

かは  
エデンの河を船に乗り フサの海原横斷し

しま  
筑紫の島の熊襲國 建日の港に上陸し

くろひめ  
黒姫さまを助けむと ここ迄進み來りけり

かむながらかむながら  
あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

うた  
と歌ひ乍ら、門前近く現はれける。

もんばん  
門番の輕公は此宣傳歌に勇み立ち、威儀を正して門を開き、

たまはるわけかみ  
玉治別神の命の出でましと

し  
知るより心勇みけるかも。

たかやまひこ  
高山彦の神の命の後追うて



黒姫司出でますと聞く。

黒姫の御供の人が今二人

力なくなく歸りましけり。

高國別神の命の神司

桂の瀧に出でましにけり。

玉治別神の命よ速かに

鐵門をくぐり奥に入りませ。

惟神の恵の深くして

今日は尊き神に會ふ哉。

有難や玉治別の出でましに

御空も清く晴れ渡りけり。

大空の星にも擬ふ玉治別の

神の身魂の美しき哉

と口を極めて讚美し、歡迎してゐる。

『美しき火の國都の鐵門守る

輕の君こそ雄々しき男の子よ。

われこそは玉治別の神司

館の君に會はまくぞ思ふ。

高國別神の命は雄々しくも

桂の瀧に出でますと聞く。

さり乍ら愛子の姫はおはすらむ

われは代りて言問ひたくぞ思ふ』

門番の輕公は、

『神館主の君はいまさねど

愛子の姫に會はせまつらむ。

玉治別神の命よわれは今

君の御爲に導きまつらむ

玉治別は、

今こそは人の情の知られけり

鐵門を守る人の言葉に。

黒姫はやがては此處に來ますらむ

易く通せよ鐵門守る人

黒姫を易く通さむ術なけど

君のことばに詮術もなし。

君ならで誰に開かむ此鐵門

主の君の許しなくして

玉治別は、

『いざさらば珍の館へ進み申さむ』

心も足も輕公の恵に』

かく應答し乍ら、いつの間にか玄關口につけり。輕公は受付の玉公に向ひ歌を

詠む。

『玉公よ今より表の鐵門守れ』

わはこれより受付とならむ』

『いざさらば表に立ちていかめしく』

みことのままに鐵門守らむ』

と、つツと立つて元の門番をなすべく表に出て行く。

この輕公は、津輕命といふ館の主の股肱と頼む宣傳使である。津輕命は玉治別命に向ひ又詠ふ。

「いざ早く奥の一間に通りませ

愛子の姫は汝を待ちます」

「神館主の神はまさねども

いろとの君にものや申さむ」

と、津輕命に導かれ、奥の間さして進み入る。愛子姫は玉治別命の入來と聞き、あわただしく衣紋をつくるひ髪をなで上げ、しづしづとして此方に向つて歩み來る。長き廊下に差かかる折、玉治別にパツタリ出會ひ、

「世の人を導き救ふ愛子姫

汝迎へむと此處に來れり。

汝が命なこれの館みやに來きますぞと

きくより日々にちにちに待まちあぐみたるよ。

うるはしき玉治別たまはるわけの神司かむつかさ

高たかき御名みなこそ世よに響ひびきけり。

あゝ清きよき神かみの姿すがたを目まのあたり

拜をろがみ仰あふぐ今日けふぞ嬉うれしき

玉治別たまはるわけはこれに答こたへて、

名なは高たかき火ひの國都くにみやこの神司かむつかさ

汝なれはいろとにおはすか天晴あはれ。

素盞すさの鳴をの神かみの尊みことの愛娘まなむすめ

姫ひめの命みことを慕したひ來きにけり。

うるはしき其御心そのみこころの現あらはれて

御姿さへも輝き玉へる。

照りわたる天津御空の月の如

清き御姿今拜むかな

と詠ひ乍ら、愛子姫、津輕命に前後を守られ、一間の内に悠々として進み入る。

奥の一間に三人は鼎座して、互に打とけ嬉しげに語り合ふ。

玉治別の宣傳使様、ようマアはるばると訪ねて来て下さいました。夫高國別は

折悪しく、今朝桂の瀧へ御襖の爲に、百日の心願をこめて参りました不在中で、

誠に不都合なれども、ゆるゆる御休息の上、國々の御珍らしいお話を聞かせて下

さいませ

ハイ有難う御座います

と、愛子姫が妹の所在を、且又其活動振を詳細に傳へけるに、愛子姫

はえも云はれぬ愉快なる面色にて、

玉治別さま、随分あなたも御苦勞なさいましたなア。神様の爲世人の爲、どう

ぞ御壯健にて御神務にお仕へ下さいますやう祈ります」

「ハイ有難う御座います。私も不運な身の上、父母に捨てられ、ホンの獨身者で御座いますが、三五教に歸順いたしましたしより、國依別さまの妹を女房に貰ひうけ、今は夫婦が力を協せて、神様の御用を一心に致して居ります。イヤもう苦勞といつても、神さまと道伴れの苦勞で御座いますから、何處の國へ参りましても、眞に愉快でたまりませぬ」

「あゝ左様で御座いますか。妾も何とかして妹の様に世界各国を巡教いたしたく存じまするが、何を云つても夫ある身の上、思ふやうには参りませぬ。身魂の因縁相應の御用より出来ないものと見えますなア」

「いかにも左様で御座いませう。時に三五教の黒姫さまは、高山彦といふ御主人が御座いますが、綾の聖地に於て、下らぬことから喧嘩をなされまして、高山彦さまは、筑紫の島へ行くと云ひ切つた儘、何處かへお隠れになりました。そこで黒姫さまが、高山彦さまは屹度筑紫島に御座ることと思召され、はるばると海山越えて此國へ來てゐられます。高國別さまの又の御名が高山彦さまと申すので、



黒姫さまは吾夫とのみ思ひつめ、やがて此處へお越しになるでせうから、どうぞ  
願ひで御座います。奥へ御通し下さいまして、一應話をきいて上げて下さいま  
せ。玉治別が御願ひで御座います」

それは又妙な事でムいますなア。黒姫さまの御主人の御名もヤツパリ高山彦さ  
までムいましたかなア。其高山彦さまの御所在はお分りになつて居りますか」

高山彦さまはアフリカへ御渡りかと思ひきや、依然として聖地に現はれ、神さ  
まに朝夕お仕へをして居られます。私はそれを見るにつけ、黒姫さまの御心根が  
可哀相になり、神素盞鳴大神さまのまします齋苑の館へ一旦参りまして、更めて  
ここへ渡り、黒姫さまに巡り會つて、知らして上げたいと思ひ、宣傳を兼ねお迎  
へ旁参りましたので御座います」

それはマア御親切な事で御座います。黒姫さまがあなたの御心底をお聞きにな  
られたら、さぞお喜びになることとせう」

ハイ有難う、私の伺ひでは、このお館にて餘り遠からぬ内、黒姫さまに御面會  
が出来るやうに存じます」

「妾も左様に心得ます。どうぞ早くお越し下さると宜しいがなア」

かく話す折しも、門番の玉公はあわただしく入り来り、

「三五教の黒姫と云ふ婆アさまが、五人の荒男を連れて、表門へ現はれ、此門を開け……と言つて居ります。如何致しませうかなア」

津軽命は言下に、

「玉公御苦勞だが、早く表門をひらき、黒姫さま一行を此處へ御案内申せ」

玉公は不審な面持ちにて、

「へー、あんな悪い奴を澤山伴れた婆アでも、通して宜しいか。高山彦さまの女

房だなんぞと言つてゐましたよ。もしもあんな婆アさまを引っぱり込まうものな

ら大變ですよ。第一愛子姫さまが御迷惑を遊ばすでせう」

「構はないから、早くお迎へ申して来い」

「ハイ」

と答へて門番は表をさして走り行く。

(大正一一・九・一七 舊七・二六 松村眞澄録)

第二四章 歡喜の涙（九八八）

愛子姫は黒姫の訪問と聞き、  
玉治別は後に只一人腕を組み、  
稍危み乍ら、玄關口に津輕命と共に  
出で迎へる。黒姫は玄關口に立ち、

高山彦夫の命の後追うて

黒姫司ここにきたれり。

高山彦夫の命は如何にして

われを出迎へ遊ばさざるや

愛子姫「あらたふと黒姫司はるばると

出でます事の心嬉しき。

いざ早く館の奥へ上りませ

汝なれ來きますとてわれは待まちける。

玉たまはる治わけ別かみ神みことの命みことも出いでまして

汝なれが入じゆらい來まを待またせ玉たまへり』

『いざさらばお構かまひなくば奥おくの間まへ

進すすみて夫つまに言こと問とひ申まをさむ。

高たか山やま彦ひこ夫つまの命みことの情つれなさよ

吾われを見みすててかかくる國くにまで。

年とし老おいし身みも顧かへりみず若わか草くさの

妻つま持もたすとは何なんの心こころぞ。

うらめしき汝なれが命みことの姿すがたかな

吾わが背せの君きみのいおも思おもへば』

黒姫くろひめの神かみの司つかさよ聞きこしめせ

吾背わがせの君きみは高國たかくに別の神かみ。

高山彦神たかやまひこかみの命みことと名な乗のらせど

活津彦根いくつひこねの神かみにましける。

兔とも角かくも奥おくにいりませ三五あななひの

神かみの司つかさの黒姫くろひめの君きみ」

「さやうならこれより奥おくへ驅かけ込みて

否應いやおういはさず調しらべ見みむかな。

詐いつはりの多おほき此この世よと知しらずして

さまよひ來きたりし心悲こころかなしも」

疑うたがひの雲くも明あきかに晴はらせませ  
吾わが背せの君きみの繪ゑ像ざう見みまして

『さてもさても合が點てんのゆかぬ汝なれが詞ことば  
荒あ井らヶ嶽がの狐きつねにあらぬか』

津つ輕がる命のみこと『これはしたり口くちが惡わるいも程ほどがある  
黒くろ姫ひめさまよ何なにを證しょう據こに』

黒くろ姫ひめ『自おの轉ころ倒じ島まを後あとにして 姿すがた隱かくした高たか山やま彦ひこの  
神かみの命みことの吾わが夫つまは 筑つく紫しの島しまに渡わたるとて

聖地を見すて出でしより 妾は後を慕ひつつ

遠き海路を打わたり 嶮しき山をふみ越えて

雨にさらされ荒風に 髪梳りトボトボと

三人の供を従へて 此處迄進み來りけり

あゝ惟神々々 誠の神のましまさば

愛子の姫がすげもなく わが背の命を奥深く

包みかくして白ばくれ たばかり醜の枉業を

あらはせ玉へ惟神 皇大神の御前に

三五教の神司 黒姫謹み願ぎまつる

愛子姫 天地の神も御照覽 いかにか心の汚れたる

愛子の姫も徒に 人の男をそそのかし

宿の夫とぞなすべきか 黒姫さまの背の君は

高山彦と聞くからは 同名異人のわが夫を

誠の夫と思ひつめ 迷ひ玉ひしものならむ

黒姫司きこしめせ 妾も神の大道を

守る身なれば如何にして 詐り言を用ふべき

早くも奥へ進みませ 汝が命の疑ひも

旭に露と消え失せむ あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひ終り、悄然として涙含む。愛子姫は黒姫のキツイ詞に、きつく侮辱された

様な感じがして、女心の悲しくなり來れるなりき。

黒姫「高山彦さまが桂の瀧とやらへ修業に行かれたから、不在だと言はれたさう

だが、そんな仇とい事で、此黒姫はあとへ引く様な女ぢや御座いませぬ。女の

心岩でもつきぬく、何處までも調べ上げねば承知を致しませぬぞや。大方奥にか

くれて御座るのだらう。稻荷か何かの託宣で、此黒姫が此處へ來るといふ事を前



知し、大方皆の者が腹をあはし、門番迄に言ひ含め隠して御座るのだらう。何と云つても隠すより現はるはなしといつて、終ひには尻尾が見えますぞや。へエ御免なさいませ、コレコレ番頭どの、奥へ案内して下さい。夫の所在が分るまではビクとも動かぬ此黒姫、マア暫く御厄介になりませうかい、オツホ、、、  
愛子姫は先に立ち奥の間に導く。此處には玉治別が腕を組んで、何事か思案にくれゐたり。

「コレコレお愛さま、お前も餘程のすれつからしと見えて、千軍萬馬の劫を経た此老人をうまくチヨロまかしますなア……ヤアそこには一人何だか見覚えのあるやうな男が坐つて居る。コリヤマア何の事ぢやいなア。大方こんな事だと思つて居つた。矢張高山彦さまは桂の瀧へ行かれたのだらう。其不在の間にこんな男を伴れ込んで、イヤもうお話になりませぬワイ、オツホ、、、」

「モシモシ黒姫さま、夫ある妾に對して殺生な事を云つて下さるな。外聞が悪う御座います」

「外分の悪い事を誰がしたのですか。高山彦の夫に代り、間男の成敗は私がする。」

サアお愛どの、氣の毒乍ら、トツトと出て下さい。アーア高山さまが不在になる  
とサツパリ「ワヤ」だ。一邊惡魔の大清潔法を行らないと、神さまだつて此館へ  
は鎮まつて下さらないわ……コレお愛、何をグツグツして泣いてるのだ。泣かね  
ばならぬやうな事をなぜなさつたのかい、オツホ、さてもさても氣の毒な  
ものだなア。私も同情の涙がこぼれませぬわいな。ウツフ、あのマア悲し  
さうなないぢやくりわいのう」

玉治別はフツと顔をあげ、

「ヤアあなたは黒姫さま、最前から待つて居りました。サア此方へ御越し下さい  
ませ」

「何だ、お前は玉ぢやないかい、門にも玉が居れば中にも玉が居る。お前がお愛  
の情夫だなア。何と抜目のない人間だこと。高山さまの尻を追うてこんな所迄や  
つて来て、チヨコチヨコとお愛に可愛がつて貰つてゐるのだろ、オホ、。若  
い時は誰もある慣ひだ。本當に敏腕家だ。ドシドシと體主靈從主義を發揮しなさ  
るがよからう。若い時は二度ないからなア。併し乍らよう考へて御覽、お前も三

十の坂を越えてるぢやないか。十九や二十の身ではなし、チツとは心得たがよからうぞえ。併しお前の戀愛を私が彼これ云ふのぢやない。サア早く今の間にお愛を伴れて驅落をして下さい。高山さまがお歸りになると、大騒動だから、チヤツと早う出なさい。お前が可哀相だから、親切に言ふのだよ」

「アア、情ない事になつて來た。黒姫さま、私はたつた今の先、このお館へ參つたのですよ。實は高山彦さまが、筑紫の島へ渡ると捨臺詞を使つて、あなたにお別れになりました。私もさうだと思つて居つた所、豈計らむや、高山彦さまは伊勢屋の奥座敷にかくれて暫く御座つたさうですが、黒姫さまがいよいよ自轉倒島を立たれた時分から、又ツと顔を出し、毎日日錦の宮へ御出勤になつて居られますよ。そこで言依別命様が聖地を立たれる時……黒姫さまが可哀相だから、お前御苦勞だが宣傳旁筑紫の島へ行つて、黒姫さまをお迎へ申して來い、さうして夫婦和合して御神業にお仕へなさるやう取計らへ……との御命令で、はるばる貴女の後を慕うて此處まで參つたの御座います。愛子姫様と云々などと云ふやうな事は夢にも御座いませぬから、どうぞ諒解して下さいませ」

と眞心面に表はれ、慨歎やる方なき其顔色を見て取つた黒姫は稍心やはらぎ、

「何、高山彦さまが聖地に御座るとは、そりや本當かい？」

「何嘘を申しませう。萬里の波濤を渡つて、こんな所まで嘘を云ひに来る者が御座いますか。黒姫さま、よく御覽なさいませ。此繪像は當家の御主人の生姿で御座いますから、能く御見竝べなさいませ。本年三十五才の屈強盛りの活津彦根神様が高國別と御名乗り遊ばし、表向は高山彦と呼ばれて御座るのですから、あなたの御主人とは全く同名異人ですよ」

黒姫は其繪像をジツクリと眺め、

「いかにも違つてゐる。……ヤア愛子姫様、えらい御無禮な事を申上げました。

どうぞはしたない女と思召さず、神直日に見直し聞直して下さいませ」

「ハイ有難う、御諒解さへゆきましたら、こんな嬉しい事は御座いませぬ。どう

ぞ御緩りと御泊り遊ばして、神様の御話を聞かして下さいませ」

「愛子姫様、黒姫様は別に悪い心で仰有つたのぢや御座いませぬ。餘り一心に當家の御主人を自分の夫と思ひつめ、はるばるお出でになつたものですから、逆上

遊ばすのも無理は御座いませぬから、どうぞ悪く思はないやうにして下さいませ」

「ハイ有難う御座います」

と云つた限り、疑のはれた嬉しさに愛子姫が歔り泣きの聲さへ聞ゆる。

「ア、私位因果な者が世にあらうか。遙々夫の後を慕うて来て見れば、人違ひ、捨てた吾子ではあるまいかと、はるばる建日の館へ行つて見れば、之も亦人違ひ、

どうしてこれ程する事なす事が食ひ違ふのだらうか。之もヤツパリ前生の罪、否々

神様から賜はつた倅を、若氣の勢で捨てた天罰が酬うて来たのだらう……ア、神

さま、どうぞ許して下さいませ。さうして夫の所在の分りました以上は厚かまし

く御座いますが、どうぞ倅の所在を知らして下さいませ。一度倅に會はなくては

死ぬ事も出来ませぬ。あゝ惟神靈幸倍坐世」

と神前に向ひ手を合せ、涙乍らに祈願する。玉治別は首を傾け乍ら、

「モシ黒姫さま、今始めて承はりましたが、貴女にはお子さまがあつたのですか。

そして其子はいつお捨てになりましたか。實は私も捨子で御座いますが、未だに

兩親が分りませぬので、日夜神さまに祈り、一目なりとも兩親に會ひたいと、今

も今とて憂ひに沈んで居つた所で御座います」

「何、玉治別さま、お前も捨子ですか、そりや初耳だ。丁度私の子が今生きて居つたならば三十五歳になつてる筈だ。お前の年は幾つだつたかなア」

「ハイ、當年三十五歳になりました」

「何三十五歳！ そりや又不思議な事もあるものだ。併し私の捨てた子には、背中の正中に富士の山の形が、白い痣で出て居つた筈だ。これは全く木花咲耶姫さまの因縁のある子供だからといつて富士咲といふ名をつけておいたのだが、餘り世間が喧ましいので、守り袋に富士咲と名を書きしるし四辻にすてました。思へば思へば可哀相なことをしました」

と泣き沈む。

「何と仰有います。其捨子は富士咲と申しましたか、そして背中に富士の山の形の白い痣があるとは合點のゆかぬ御言葉、一寸失禮ですが、黒姫さま、私の背中を見て下さいませぬか。私の小さい時は富士咲と申しました。そして人の話によると、何だか山のやうな痣が出来て居るさうです」

「それは又耳よりの話だ。一寸見せて御覽！」

「ハイ」と答へて玉治別は肌をぬぎ背をつき出す、黒姫は念入りにすかして見て、

「ヤアてつきり富士の山の痣、そしてお前の幼名が富士咲と聞く上は、全く私の倅だつたか。ア、知らなんだ知らなんだ、神さま、有難う御座います。因縁者の寄合で珍らしい事が出来るぞよと大神さまが仰有つたが、いかにも因縁者の寄合だなア」

と嬉し涙にかきくれる。

「そんなら貴女私の母上で御座いましたか。存ぜぬ事とて、何時とても御無禮を致しました。どうぞお母さま御赦し下さいませ。あゝ惟神靈幸倍坐世」

と両手を合せ、嬉し涙にかきくれる。

これより黒姫は愛子姫に厚く禮を述べ、無禮を謝し且つ徳公、久公にも其勞を謝し別れを告げ、いそいそとして玉治別、孫公、房公、芳公と共に再び建日の港より船を漕ぎ出し、由良の港の秋山彦が館に立寄り、麻邇寶珠の神業に参加し、

目出度く聖地に歸る事となりたるは、三十三卷の物語に明かな所であります。惟  
がらたまちはへませ  
神靈幸倍坐世。

かく述べ終られた時しも正に午後六時、表に出て天空を見れば、ドンヨリと曇  
おほぞら  
つた大空を南北に區劃した青雲巾二三間と見ゆるもの、東の山の端より西の空遠  
りんくわくただ  
く、輪廓正しく帯の如く銀河の如く横たはりつつありました。

(大正一一・九・一七 舊七・二六 松村眞澄録)

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

靈界物語 第三五卷 海洋萬里 戌の卷

終り